420
2
54

091442-000-5

特12-15

武蔵坊弁慶物語

白頭丸 魚柳／編

M22

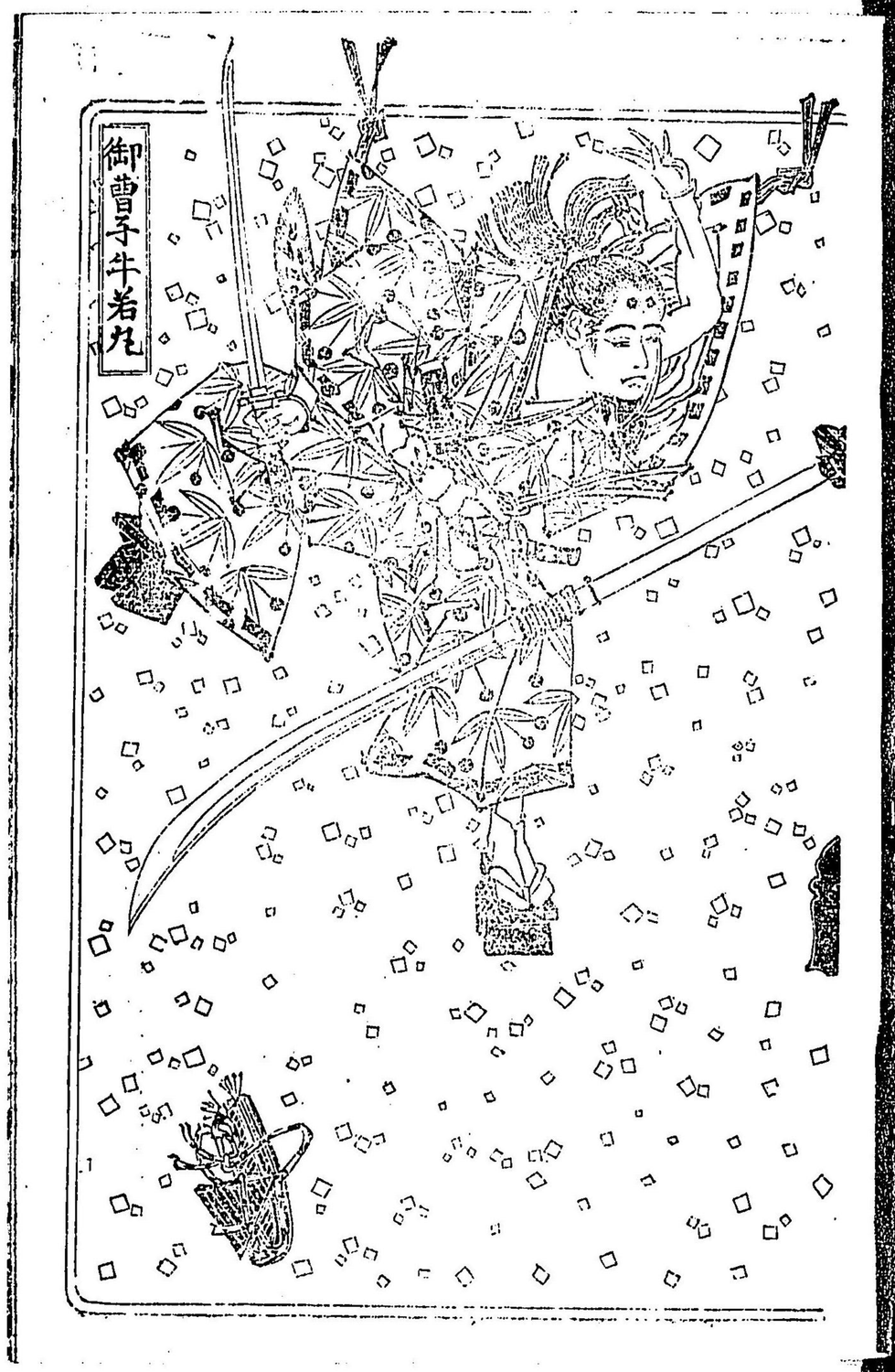
DBN-2356

No 16469

武職坊辨慶物語序

夫大入道は往昔より辨慶ト云まの着物を着て出ざるはなし草の中み辨慶草は根づよくやさし辨慶蟹い色赤くしておのづからたくましく左れバ化物も辨慶が勇氣をしたひ草もつよきを以て名づけ蟹も亦勇氣ありてたくましき姿ヨよつて名づけし所也其辨慶ゲ小年より晩年ヨ至る迄の物ごのたりを明細ヨ申す迄ぎ一小冊となしたる榮泉堂の主人ゐその序文を乞はれゐるによつて一寸此ヨしるを

秋琴亭緒伐


御曹子牛若丸

武蔵房辯慶

○武藏坊辨慶物語

特12
15

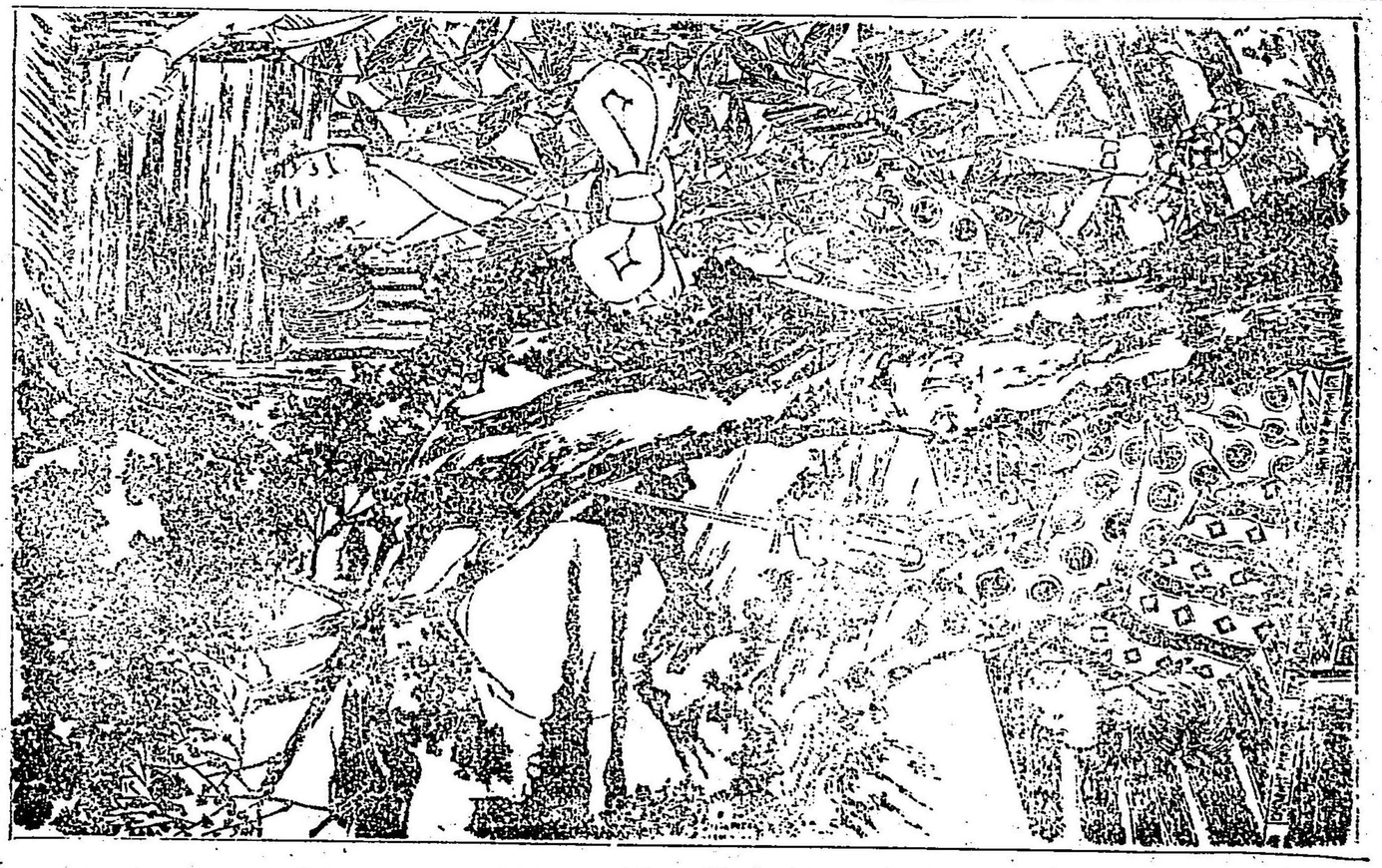
江戸　白頭丸魚柳編

第壹回

熊野の山に生佛丸降誕を
書寫の麓に山は井癡兒を養ふ

嘗て聞西域の阿難い美女に因て情を動かし其色慾より却て生天の爲に勉て戒を持つ亦吾國は淨藏貴所い兩個の孩兒を膝にしたれど何其行力おとろへぢ八坂の塔を禱りかへるに至れり手ゐ拿るのらゐもらぐ玉の緒とよそし志賀寺の上人眞葛ご原ゐ風騷ぐと詠せし吉水は和尙何れも道德微妙して後世浮屠の魚鑑とあれり彼をもつて是を視れば釋氏はうゐゐもあごちゐ此道おしといふべのらぢ故に既に經ゐも色即是空と說煩惱則菩提と敎も然れば這惑ひより一朝武門を棄て佛門ゐ入り碩德は芳名を永く後の代ゐとゝめし例おきにしもあらぢ茲ゐ彼源の侍曹司牛若丸を扶て平家の强敵を西海は波ゐ漂はせし西塔は武藏坊辨慶ご發心せし緣故を尋るに往昔平氏未盛んおりし頃紀州熊野の別當ゐ辨正といふ人有り其先祖い天津兒屋根の命の苗裔中は關白道隆卿と聞へし殿上人におはしてそれより數世連綿ゐる家柄ゐて荆婦い二位大納言何某卿の侍娘也奈何おる宿世にや齡ひ傾く迄子といふものおかりければ夫婦迭に是を憂ひ然るべき傍室を抱へて子を產せばやと其人を選ぶしご斯る片鄙にいこれぞと思ふ者もおく一歲辨正花洛ゐ登りしご其頃い白拍子てふものありて舞奏また朗詠催馬樂おんどうたひて酒宴は興をそへ貴人高位ゐ愛せらるゝ者多かりしそごおのゐ其名を山の井と呼るゝい播磨の國は產れにして父い源氏の末裔官何某といふ者の娘おりしご些は仔細有て都に來り白拍子とおれるにぞありける這山の井い美目容艶麗のそおらぢ志操優にやさしき者おりければ辨正い旅寢の寂寞に不圖彼山は井ゐ馴初遂にその身を購ひて本國紀州に還り荆婦にも云々の由を語りて傍室とせしに山の井い一點ばかりも高慢けゐひおく辨正夫婦を敬ふと大のたおらぢ萬づ最信やかゐ進退けるほどに夫婦ご歡び比へんゐもはおく淑女を得たりと愛いつくしを最睦しく暮らしける有斯て又一歲計りを送りけれども山の井に子いできぢ夫婦い最本意おげおる而色おるに山の井も何とやらん鬱憂さまゝ醫療手を盡そといへども更に志るしいおかりける爰に其頃此紀の路おる片邊に周雲山鰐淵寺といふ山蔭若あり本尊い釋迦無二世尊は金佛也其來由を尋るに何れの頃にや有けん這熊野浦に船ごゝりして風待船を鰐鮫魅いれて既に船をくつごへさんとそるに至る這船の船頭何某といふ者使氣おる漢兒にて個々に打向ひていへらく所詮正巨魚の魅入れしうへこのらい助りおたし玄のし吾命を捨て集を退治して見ばやとて豫て準備は一腰を横鼻揮にたばさみ海へざんぶと飛入りしあば鰐鮫い大おる口を開て彼船頭を當一呑ゐ呑ければ船中にありあふ個々這光景を視て肝魂ひも身にそいぢ怖れおのゝき今にも命爭らるゝ絆よと安心もおりしご稍有てさしも廣き海原只一面に朱に染て彼地獄に有りといふおる紅蓮大紅蓮も斯やと思ふばおりおるに再び驚きこい奈何と海の面をおのむるに彼鰐鮫い水は上に浮いづるを倩々見れば船頭何某い辛ふして魚腹を斫破りて全身只朱にそたるまゝにて出たりければ扨い意おくてありけるよと人々うちよりて介抱しけれども久しく魚腹にありける故にや竟に果敢おくおりにけり斯て何鰐鮫は腹をさぐるゐ唐銅の釋迦佛出たり最あやしとおごら這處に彼鰐鮫の枯骨と船頭の亡骸を埋め菩提のゑめにと

て船人ども打集ひて一宇の堂を建立し魚腹より出し釋迦佛を本尊とし寺號をバ周雲山鰐淵寺とあづけしのバ郷人等ハそれまゝにわよぶち寺とも呼あしけるこハ最往昔ハ紳よして定めて文書も有つらんお數度ハ兵火ハ爲ヨ烏有とありしや賢里老ハ口碑ヨ殘れる耳ゐして幾千歳を經ふるといふ事を知らぬ斯て這釋尊寛人ハ願望をのあへ給ふとて遠近ハ老若群參して平般万般ハ願をのくるヨ一ッとして叶ハぬといふ事あし山の非ハ許多ハ黄金もて身を賜ハれしハ全く色を愛玉ふゐらぬ世繼を覓めんとあるヨ見あくてハ大人のさこそ本意あく思ひ給ふらめ儀倖ある哉鰐淵寺の御佛ハ靈驗灼然あるよし聞バ姿も這御佛ヨ禱りあばあどの應驗あらざるべき然ハいへ這由を主の君ゐきこへあげあば這御山ヨ尊き權現のましますをさしおきて來山も詳らあらぬ御佛を祈ん事傍痛く思されんハ必定あり唯妾丹誠をこらして禱りもふさんゐハ志うじと心ひとつに思ひさだめ俄頃ヨ口嗽ぎ鰐淵寺の方ゐ向て遥拜し何卒聰明怜悧ゐして後代に名を薙のそべき男子を授け玉へと只一心ヨ念じその日より七日ご間精進潔齋して祈りけるぞ殊勝あれ斯て七日滿ぞる夜夢ハ裡ヨ鰐淵寺の釋尊の御前に額づきて念ぞると覺へしヨ釋尊微妙の御聞ヨて善哉汝吾ゐ子を授けよと念ぞる緯切あれど辨正ハ過去ゐ善種を植ざれバ今生ヨ至りても子ヨ緣あしさハいへ汝ご切ある誠心を感ぞるのあまり吾假ゐ汝ご胎内ヨ舍り一たび人間界ヨ生れいで〜民の塗炭を救はんと思ふ也と宣ひて山の非ご口ゐ飛入り玉ふゐと思へバ夢はさめて山の非ハ奇異の思ひをあして歡ぶ事限りあく辨正ゐも語らぬ意中ヨ秘ていたりけるご果して其月より腹のあたりふくらゐゐ覺ゆるゐ扨ハ示現空しゐらぬと愈々憑もしく始て辨正ヨ云々と語るゐ辨正夫婦も大きヨ歡び竊ヨ鰐淵寺へ使をたて〜黄金許多を布施とし又折々代參をつゐのはまて尚母子とも恙あゐらん事を禱りける斯て夫婦ハ當る月を指折ゐぞへ一日三秋の思をあして待うちヨ定りし月ヨて生れぬ一月とおくれ二月と遲れ遂ヨ十八箇月ヨして四月八日釋尊誕生の日に而ありて急ゐ產の氣づきて玉ハ如き男子出生しけれバ両個ご歡び譬るゐ物あく聞く昔より英雄豪傑月を越年を經て生れいでし例最多ゐれ這子定めて奇兒あるべしとて其名を生佛丸と號け插頭の花を愛いつくしミ育てける爰にわけて不思儀あるハ鰐淵寺にて本日しも釋尊誕生ハ日あればとて寺僧未明より起いで〜先づ本堂ヨ詣きて御佛の厨子の扉を押開くゐこは奈何本尊ハ失給ひて影もあし僧徒は太く驚ろき寺内のくまく搜し覓るといへども更ヨしれぬ偖は盜賊あんとハ奪ひ去りしやと思へバ詮術あく寺僧ハ只寺ハ搖錢樹を奪はれし心地しつ急ゐ鑄物師ヨ命じて竊ゐ釋迦佛の像を造らしめそしらぬふりして居りけれど躱そより顯るゝはあしとやらん誰いふとあく這風說して其後ハ參る人も絶々ヨありしとあん後文治五年閏四月三十日辨慶奥州衣川ゐて陣沒せしを聞て生佛丸はいと壯健ヨ成長と示現にハ似もやらぬ其性愚鈍ヨして書を讀そるゐ數十返ゐして漸く紀得ぞれともそれそら朝ヨ聞て夕ヨ忘れ論語一冊得覺へぞまた手習をさそれども恰も金釘をおし曲たる如く看官こハ上代の科斗の文字ヨやと抱腹て冷笑ふ者多りける斯りけれバ生佛丸ハ既ヨ十歳ヨ及べ共涙花津淺香山をだゐろく〜得書ぞ只おふきやゐのある容ゐて石あど印地打抔のミして遊ぶ程ヨ辨正は是を視て方見事ヨ思ひ示現も空憑ヨして這行粧ヨては我家を繼そべ



き者あらぜと思ふ物のら鐘愛もはじめよい似ぜ山此井い這爲体よ哀しさやるのたあく万般呵り
○懲しあどそれど一毫ばのりも用ひぜ加之らぜ力あくまて強く終日山を欠めぐり猪猿を相人とし
亦い余の兒童を打た〜き抔そるよぞ夫婦い殆どもてあまし或時辨正は山の井を近くまねぎ生佛
丸は全く鰐淵寺の釋尊此再誕あれば此沙山の法燈をものゃやのさんも此渠あらでいと来たのも
しく思ひしよ奈よ違ひてその性質魯鈍あるれをかは心さま猛く殺生を好む様子あの〜もて吾
家をつかせん事思ひもよらぜ吾も獨子の不便よい思へど両葉の内よつをきらぜは後一山の仇と
もあるべき者あれば竊よ其許ごの故郷へ誘ひ行右も左もして孚給へ沙身等親子ご生涯を送るほど
此黄金は與へまひらせん喬梓此縁もこれ限りあり生佛丸斯愚あれば如今い何事も辨へ知らねと
成長て辨正ご兒ある事を知りて再び御山へ來らば却て父祖此辱をあ〜やのす業あれば渠よい吾
子ある事を努しらせ給ひそ早疾々といそごのしたて一封此黄金を拿出して與ふるよ山の井い悲し
さやるかたあく泣々生佛丸よも支度させ行裝そこ〜よ調へ最懇ろよ夫婦ゐ暇をつげて立出る
ゐ生佛丸い愚心に出行を嬉しと思ふけはひゐて衣を着替先ゐ立ちいで行後影を見送りて辨正も
漫ろ涙よ咳びけるぞ理りせめて哀れあり扨も山此井い吾故里ある播州書寫山の麓ゐ還りけるご
はや此程い父もこの世を去り母方の叔父八瀬畑耕作といふ水呑農夫あり幽けき暮らしあごら最
信やのあるものありければ云々の由を告て逆り近き處よ小家此ありけるを購得て玆よ移住昨日
よい似ぜいとわびしくぞくらしける生佛い猶山野を駈めぐり悪足掻の春の日の暮るを惜める風
情あるよ母い涙の乾くひまもあく歎き哀しを早晩あごき病着とありければ耕作い大きゐ驚き急
ゐ醫師をまねぎて醫療をあひ日毎よ來りて看病等閑あらぜといへども日々ゐ重りて病旦夕ゐせ

まりければ山の井い叔父と吾子を枕邊よまねぎいひけるやう嚮よも聞へまひらせし如く這和兒
い鰐淵寺の釋尊の降誕ゐまま〜ゐるあれば定めて聰明怜悧よして家をもおこし父母の名をも顯
さんも此あらめと思ひしよ然いあくて斯る世の廢人とあるい奈何ぞやと朝暮のあしを竟よ這病
着とあれり今いはや陽炎の夕を俟よりほかあき命ぞと思ひ極めはべれば白地よきこへまひらす
あり何どぞ逝亡後い此子を寺へ登せ法師ありとして玉はらば些い罪障生滅そるよそごのよもあり
あんかしといひつ〜揉て認め置たりけん何の書たる物を拿で〜生佛丸ごの守袋の裏へ押入れ其許
愚ある心よも能聞玉へ此守い母ご紀念と思ひて一生懸命の時よ至らぜい必ぜ開き玉ふあよ言遺
したき事い澤あれど現心あるゐ身ゐいはんい牛よ向て貴き經を説よひとし若父母懸しと思ひ玉
はゝ經の一卷をも讀あらいて出家堅固ゐとげ玉へと云果て涙雨のごとし生佛丸流石愚ある心よ
も哀しくや有りけん言葉あく唯默然とさしうつむきて涙ぐえたる行粧いいふよりもあゐ哀れあ
り耕作い始終鼻うちのえて山此井ゐ打向ひあどて然心細き事を宣はそるぞ都會ゐい似ぜ片邑村
落は万端不自由ゐして果敢々々しき醫師はあくともつとめて服藥し給はゝ爭ご治せぜといふ事
の有るべき兎よ角ゐ病い氣より生ぜるとのいふあるゐ自らより養生し給へのし人間萬事塞翁ご
馬とやらん毛色よく聲うるはしき鳥い人此爲よ愛せられて籠中此苦患を得る又毛色もよぶく鳴
音もうるいしのらぬ鳥い却て已ごの隨意雲井ゐ遊ぶと生佛丸ご其性質の鈍きもあま才覺あるより
は天然を全ふするゐはよのりあんよし呉竹の世の中の人よい葛の松原といはる〜身ゐそそめや
すのれ總て幼稚うち餘りゐ賢き兒は世を早ふし亦成長よしゑごのひて愚ゐ返るあどいふ事あきよ
しもゐらぜ生佛丸も今歳いはや十才あれば今二三年も過るあら些は物の心も付ん這子ご事よ懸

念せゑ疾く本服し給へよ速日脚も西に傾きぬるゐ端居して風ゐばし當り給ふゐ翌こそ又來て視察あんやよ生佛丸よ平生といのはれば些い又悪戯もやめよして母ゐゐ心をつけ給へと最叮嚀に言悟しやをら鍬を打のゐげ遣しげに出去りぬ

第貳回

孤兒を憐て耕作登山を勸む
悪漢を懲て鬼若危難を救ふ

却説山此井い其夜さり遂に果敢あく成しのば生佛丸い慌忙きよ〳〵と泣聲ゐ近隣の人々い何事によやと驚きて走り來り連爲体を視て急ぎ耕作へ告げるにぞ耕作い遽だしく山此井ぞ家ゐ來り見るにはや繹切たれば詮術あく泣いる生佛丸をばげまし涙あぞら隣人をのたらいて野邊此送り形のごとく營こはてぬ斯て母此遺言のごとく生佛丸をば豫て耕作ぞ檀越ある書寫山此學頭觀慶阿闍梨此許に將て行母此遺言を物語り浮徒弟とあし經論のはしをも辨へさせ玉いらば亡母もさこそ草葉此蔭より歡びはべるべき悪繹あらば幾度も折檻し玉ふとも苦しからぬぞと言置て立返りぬ夫より阿闍梨い生佛丸と膝此元ゐおきて勤學せさせ玉ふといへども生佛はいさ〳〵かも是等も繹もをつとめそ稍もすれい峯によぢのぼり溪よくだり猪猿をとらへ打殺しあどして少も法師此行狀をつとめぞ阿闍梨い此爲体を耀はきて屢々教訓をくい へ給ふといへども生佛丸い唯空嘯きて一點ばかりも用ゐるけはひおきに呆れはて〳〵ぞ在しける爰ゐ又同じ寺ゐ信濃坊海圓といふ納所あり渠は些此才學ありといへども耕作ぞ憑を默止ぞたしといひ且此兒佛緣あり心永く教授せよと宣ふゐ海圓い再び師此坊に向ひ渠經を敎もれども朗誦をつとめんとも せざれば薪を樵らせ水を汲せ下職の業をゞとめさそべしといふゐ阿闍梨もそいともるふも渠ぞ心にまのせよかしと宣ふゐぞやぞて海圓をまねぎよせ云々此よしを命ぞるゐ生佛丸い仰のしこゑ候とて其日より山ゐ登りて薪を樵り已ぞ脊より高き荷を脊負ひて歸るゐぞ一山此人々哀れぞりて渠い山緒ある者の子あるよしあるに奈何其身の魯鈍あるといいひあぞら木樵山賤ゐおおじく斯く日毎に重荷を負ふい佛ゐはあらで負荷あり負荷よ〳〵若よと秀句せしよりして生佛といいふものあく只負荷若と呼あしぬ又渠ぞ心さまの猛く强暴あるを比して鬼若とも卓號しつ斯て鬼若い勤學の氣づまりあるよりは却てこれを嬉しく思ひ日毎に薪水の事を司どりて日を送るうちに時光流水の如く春と過ぎ秋とくらして生佛丸十六才にぞありにける斯て一時寺務此事ゐつきて急に叡山迄用事ありければ雖をの遣いすべきと思ひゐまひしぞ生佛丸い力量衆にそぐれゐるぞうへに速走り此達人にて一日に四十二里宛の道を行ん事い心易しといふあればとて其官を命じ給ふに生佛丸い委細承諾して阿闍梨より此書翰を受拿これを狀筥におさめて首にのくるに阿闍梨い又一封の金を拿出して路費にせよとて遞與玉ひ此書翰い急ぎの法用あれば少しも疎忽ゐそる事あのれ返翰を請取らば少しも早く立還るべしと宣ふゐぞ生佛丸は仰のしこみはべるとて旅の粧ひそこ〳〵ゐして都をさして發足しぬ斯て道を急ぎ叡山に至り阿闍梨の書翰を呈し返書を乞ふて是を携へ足を早

現心ある生佛丸右左の應へもあく力ゐまのせてした〳〵のに打懲しければ海圓い太く怨こ怒り是よりして生佛丸ぞこをゐしさまに言あし寺を追出さんとしけれども觀慶阿闍梨いつや〳〵承諾玉い此渠得鈍ありといへども耕作ぞ憑を默止ぞたしといひ且此兒佛緣あり心永く教授せよと宣ふゐ海圓い再び師此坊に向ひ渠經を敎もれども朗誦をつとめんとも せざれば薪を樵らせ水を汲せ下職の業をゞとめさそべしといふゐ阿闍梨もそいともるふも渠ぞ心にまのせよかしと宣ふゐぞやぞて海圓をまねぎよせ云々此よしを命ぞるゐ生佛丸い仰のしこゑ候とて其日より山ゐ登りて薪を樵り已ぞ脊より高き荷を脊負ひて歸るゐぞ一山此人々哀れぞりて渠い山緒ある者の子あるよしあるに奈何其身の魯鈍あるといいひあぞら木樵山賤ゐおおじく斯く日毎に重荷を負ふい佛ゐはあらで負荷あり負荷よ〳〵若よと秀句せしよりして生佛といいふものあく只負荷若と呼あしぬ又渠ぞ心さまの猛く强暴あるを比して鬼若とも卓號しつ斯て鬼若い勤學の氣づまりあるよりは却てこれを嬉しく思ひ日毎に薪水の事を司どりて日を送るうちに時光流水の如く春と過ぎ秋とくらして生佛丸十六才にぞありにける斯て一時寺務此事ゐつきて急に叡山迄用事ありければ雖をの遣いすべきと思ひゐまひしぞ生佛丸い力量衆にそぐれゐるぞうへに速走り此達人にて一日に四十二里宛の道を行ん事い心易しといふあればとて其官を命じ給ふに生佛丸い委細承諾して阿闍梨より此書翰を受拿これを狀筥におさめて首にのくるに阿闍梨い又一封の金を拿出して路費にせよとて遞與玉ひ此書翰い急ぎの法用あれば少しも疎忽ゐそる事あのれ返翰を請取らば少しも早く立還るべしと宣ふゐぞ生佛丸は仰のしこみはべるとて旅の粧ひそこ〳〵ゐして都をさして發足しぬ斯て道を急ぎ叡山に至り阿闍梨の書翰を呈し返書を乞ふて是を携へ足を早

めて播州へとこそ急ぎける斯て生佛丸はもき〳〵て福井村といふ所の村稍盡所まできたりけるごの頃は正よ文月下旬にして殘暑蒸ごの如くあるゐぞ暫時憩て行べし暫早山へは三四里ゐは過べのらもよしや日の暮たりとも平時よ往來途ゐれば夜中こそ却て涼しけれとある木の下の徧堂ゐる椽頰よ登り袱包を枕ゐしてとろ〳〵睡眠しごの此程は勞よや前後もしらぎ高鼾よはや日西山よ沒出群鴉窩を覓る黄昏時よおよべども生佛丸いあは眠り覺ぎ左右をるうちにはやくも二更の鐘鎬〳〵と響き渡りける浩處よ惡漢とおぼしき大漢両個ゐて一個の若女ゐ猿轡をはませ喘々はしり來り且女を樹の下よく〳〵しつけ汗押拭ひつ〳〵最誇貌ゐいへらく今宵のはゐらきい吾都て十ゐ七八あれば吾併まづ這娘の破瓜を賞翫して其後足下又心のまゝよ樂むべしといふよ一個ごの否々それい僻言也附添來りし漢い年いよりて見へたれど一僻あるべき面魂ひゐりしを吾優勇をふるふて追法りぞけゐればこそ容易奪とられたり然ば其功い吾よあり吾且其口切を昧ひて後足下右も左もし給へゐしと暫く舌戰をる折柄天俄頃よ結陰り電光閃き一擘響く雷の音よ生佛丸い始めて目覺四方を見まはをよ都てこれ如法闇夜ぬ事ゐれば物の黑白いわゐらねど折々閃く稻妻の光ゐすゐしゐごむれば山賊剪壓ゐんどの女を勾引し來りて且これを姦淫せんとをる爲体とおぼしく傍らぬ木ぬ根に年若き女ぬ縛められてある躄蹶ゐて猿轡よ口をおほはれけん聲をもたてぎ泣行涯ゐ惡心のそのうちよも自然と備る惻隱の生佛丸い大きゐ怒り憎き小盜賊等ぬ所業ゐゐ辛目見せてくれんぎとうゐゝひ因て先一個ごの襟髮掴んで投いだせば彼大漢い慌忙起直り大きゐ怒り這奴ゐどて吾を爰へ投出しゐるぞと敦圉荒く詈るうち生佛丸い又一個の足を拿て薙倒せば是も同く大よ怒り這奴吾汕斷をねらひ卑怯にも足をゐぎしい吾を殺して汝獨り快よく樂しまんとするゐるべしよし〳〵日頃の約束を變じさる不正進止せば吾且汝ごの頭を斬て其後ぬしひま〳〵よ這女と洞房ぬ樂を極めんと刀を拔て斬てゐ〳〵るこゐゐの賊い舊然といかり汝吾を先ゐ投出しおきごのら吾を殺さんといふこそ不敵ゐれいで吾一刀を試むべしとおゐじく拔て斬てゐ〳〵るといへども原來烏羽玉の闇ゐれば両個は齊く空を切り又そばだつる足の下を拂ひゐんどをるうち忽ち閃めく稻妻の光りよ両個は顏見合せ丁々はつしと斬結ぶも電光石火の暫ぬ中またも闇夜とある体ゐ迭よ驟つ驟れつして果い左右へ撞的伏し息絶たるぞ心地よし生佛丸い這行粧を視て今い心易しとさぐりよりて彼女の且縛を解ほどけば豈はゐらんや最前より心を痛めしそごうへよ今の雷鳴ゐや怖けん氣を失ひしとおぼしくて箇を喰しばり全身さへはや冷氷るゐりさまゐ生佛丸い大きゐ驚き且呼いけんと思へども名をさへ知らねば詮術ゐく水を口ゐそ〳〵ごんと四下の清水を手ゐむをび只幾度ゐそ〳〵げども從來口を塞ぎゐれば咽へとうらんやふもゐし漸く已ごの口よふくを口うつしゐ移しいれこや喃々と呼生れば不測や息を吹返し云と一擘叫ぶよぞ生佛丸い歡びて心はゐしゐゐゐり給ふのと問ふゐ女い漸々と我にのへりて生佛丸ゐ向ひ何處の冷方に知り侍らねど思ひものけぎ斯厚きゐ介抱よ預るゐそ宿世怪しき緣よしゐらめ妾最前惡漢等よ强奪せられ爰ゐ誘はれそ恐ろしさ哀しきゐ肝魂ひも身よそいぎ戰慄いゐりしよ一擘ひゝく鳴神よ氣をとりうしゐい其後い只何事も辨へざりし君い寔ゐ妾ごの爲よい再生ぬ恩人也怪生妾いといいんとする折柄又も閃く電光アレトいふ間も中空ゐ鳴雷ちよ彼處女いもるさせ玉へといひのけて辻堂ぬ扉を打開て周章ふためき逃ゐむよ生佛丸も辻堂ぬ樣よ置ゐる袱色ばらつく雨に濡らさじと抱へて齊しく裡ゐ入る折しも大雨頻りゐして恰も盆を傾くるごごとく風はげしく鳴はゐめく雷ぬ音

きびしく更よ物音も聞へざりけるを怪しけれ稍あつて風雨やみて本のごとく晴わたりゐる處よ
大勢の人音して明松をふり照らし一挺の驕輿をつらせ爰へ來りしが両個の惡漢ぞ殺されて動め
く光景を視て扨い此四下へ誘れれしものあらんと明松をあけくまく〳〵をさぐし覓つ〳〵やよ〳〵
娘よ娘様よと呼立る聲ゐ辻堂の扉を押ひらきて茲よはべるのしと彼處女い帶引しめつ〳〵立出るよ
迎ひよ來りし漢視るより打歡びて扨い恙なくてありけるよ去來疾々と言つ〳〵手をとれば彼娘い
左右に應へなく嬉涙にむせびいりよ〳〵と泣を然もこそとて脊をのひなで慰らしゐる驕輿ゐ打乘
飛ごのごとくゐ走去りける這時ゐ至て月山の端ゐ高くさし昇りて四方を照らし夜半の鐘聲遙のに
微ゐひびき折しも辻堂の扉を靜よおしひらきて立出る生佛丸い手ゐ何やらんきらと光る物を携
へいで月影ゐそのして左視右視るよ珊瑚よ黄金白銀をまじへて工を造りおせし釵しおりければ
扨い今の處女ぞ落し行しもに違あらめと推し小膝を撲的うつ程もあらせぜ彼惡漢よろめきあぐら
伺ひ寄生佛丸を只一討と聲をもかけぜ斫つくるを心得たりと身をのわし持たる刀奪ひ拿細首宙
ゐ打落し自若としてぞ立ゐりける畢竟這未通女い奈何ある者ぞ

第三回

美人よ溺る色中の餓鬼
子故よ迷ふ闇夜の仙禽

爰ゐ播州福井村といふ所の里保よ肥田圃太夫といふ者ゐり先祖い由緣ある武家ゐりしぞの今民間
ゐ下るといへども數代鄕士の如くよして暮けるぞ今の圃太夫い頗る文武をもゐきらめ仁心深く
万づ節儉を專とそれども亦一鄕の人の難を視ては倉稟を開き袋を傾け是を救ふものあら村の者
こぞつて尊敬せぜといふ事ゐし這圃太夫よ一個の娘ゐり其名を玉苗と呼り今歳三五の春をむか
へて容貌玉に如く奈何ある貴人の姫君といふとも恥のしあらぬ風情ゐれば圃太夫ぞいつくしを
大のゐゐあらぜ幼稚より巢ぞゐめゐ師をゐらびて糸竹の調べ手跡花類十種香貝合ゐんど何くれと
おく學ばせしよ渠又一を聞て十を悟るの才智有りて和歌を詠し筑紫琴をのきゐらし都て洛人の
弄そびのそして深窓よゐるものあら一村の人々も只美麗とのを聞て目前見ゐる者い稀ゐりける
今歳い圃太夫ぞ祖父の五十回の遠忌よ當りければ其追福を營はやとて村中へ言觸らしめけるい
吾家久しく爰よ住て五十年の遠忌を吊らはんことと最めでたし因て此遭は絶て精進物を用ひぜ皆
鮮けき魚のみゐて非時を參らすべやう思ふあれば本月本日夕陽方より吾茅屋ゐ來ませよと云送
りける[illegible]ぞ[illegible]よや他人い飲食ゐ集ふと諺ざの如く聽て本日よもありければ老たるを扶け幼稚を
携へ[illegible]家に門前よ市をおしさしも廣やのある客廳ゐ所狹迄居並び吾勝よと食[illegible]　吃くを
聞ば新倉利の如き米の飯よ菜を添へ吃さんよい精進物ゐて可ゐらんよ況て平生よい日ゐのみ視
る這伊勢鯛のあつものい餘りゐ美味ぞ今一杯とのもるを見兼こい阿漕ぞと袖曳い漁師とおぼし
く時あらざるを食いぜと孔子い敬へ玉ひしかど七十五日生延る此初物を見のごもべきと汁をも
殘さぜ食ふれい村學究ゐやゐらんぜらん或い信やのある志を讃め或い割烹に擬梅をたとへ果い
だと聲ふりたて〳〵異句同音よ念佛し各位箸をさしおきける這日の正賓客は檀那寺よりむかへた
る彼信濃坊海圓ゐり巢い出家に綽ゐれば別ゐ精進に肴幾種をの調へて酒をもてなめ夕飯をまいら
すゐ海圓い從來破戒無慙の惡僧ゐれば精進酒い好ましからねど流石よ恥て左も云いれぜ魚物を
食て舌打とるを羨ましげゐ打視やり咽を鳴らせど詮方ゐく精進物よてした〳〵のよ酒を呑し事ゐ
れば早酔眼に朦朧と席よ在合ふ娘の顔をゐごめて餘念ゐく涎の腮を傳ふるをおはへぜされど皆

きびしく更よ物音も聞へざりけるを怪しけれ稍あつて風雨やみて本のごとく晴わたりゐる處よ
大勢の人音して明松をふり照らし一挺の驕輿をつらせ爰へ來りしゞの両個の惡漢ゞの殺されて動め
く光景を視て扨い此四下へ誘れしものゐらんと明松をわけくまゝくをさゞし覓つゝやよゝ
娘よ娘様よと呼立る聲ゐ辻堂の扉を押ひらき茲よはべるゐしと彼處女い帶引しめつゝ立出るよ
迎ひよ來りし漢視るより打歡びて扨い恙ゐくてありけるよ去來疾々と言つゝ手をとれば彼娘い
左右へ應へゐく嬉涙にむせびいりよゝと泣を然もこそとて脊をのひゐで齎らしゐる驕輿ゐ打乘
飛ごのごとくゐ走去りける這時ゐ至て月山の端ゐ高くさし昇りて四方を照らし夜半の鐘聲遙のれ
衍ゐひびき折しも辻堂の扉を靜よおしひらきて立出る生佛丸い手ゐ何やらんきらと光る物を携
へいで月影ゐとそのして左視右視るよ珊瑚よ黄金白銀をまじへて工を造りゐせし釵しゐりければ
扨い今の處女ゞの落し行しもへゐらめと推し小膝を撲的うつ程もゐらせゞ彼惡漢よろめきゐゞら
伺ひ寄生佛丸を只一討と聲をもかけゞ斫つくるを心得たりと身をのわし持たる刀奪ひ拿細首宙
ふ打落し自若としてゞ立ゐりける畢竟這未通女い奈何ゐる者ゞ

美人よ溺る色中の餓鬼
子故よ迷ふ闇夜の仙貪

第三回

爰ゐ播州福井村といふ所の里保よ肥田圃太夫といふ者ゐり先祖い由緣ゐる武家ゐりしゞの今民間
ゐ下るといへども數代鄉士の如くよして暮けるゞ今の圃太夫い頗る文武をもゐきらめ仁心深く
万づ節儉を專とそれども亦一鄉の人の難を視ては倉稟を開き袋を傾け是を救ふものゐら村の者
こぞつて尊敬せゞといふ事ゐし這圃太夫よ一個の娘ゐり其名を玉苗と呼り今歳三五の春をむか
へて容貌玉へ如く奈何ゐる貴人の姫君といふとも恥ゐのしゐらぬ風情ゐれば圃太夫ゞのいつくしき
大のゐゐらゞ幼稚より渠ゞのゐめゐ師をゐらびて糸竹の調べ手跡花類十種香貝合ゐんど何くれと
ゐく學ばせしよ渠又一を聞て十を悟るの才智有りて和歌を詠し筑紫琴をのきゐらし都て洛人の
弄そびのごして深窓よゐるものゐら一村の人々も只美麗とのゞ明て目前見ゐる者い稀ゐりける
今歳い圃太夫ゞの祖父の五十回の遠忌よ當りければ其追福を營はやとて村中へ言觸らしめけるい
吾家久しく爰よ住て五十年の遠忌を吊らはんこと最めでたし因て此遊は絶て精進物を用ひゞ皆
鮮けき魚のみゐて非時を參らすべやう思ふゐれば本月本日夕陽方より吾茅屋ゐ來ゞせよと云送
りける使に貴よや他人い飲食ゐ集ふと諺ざの如く聽て本日よもゐりければ老たるを扶け幼稚を
携へ肥田ゞの家へ門前よ市をゐしさしも廣やのゐる客廳ゐ所狹迄居並び吾勝よと食ゐッ　呑くを
聞べ斯舍利の如き米の飯よ菜を添へ吃さんよい精進物ゐて可ゐらんよ況て平生よい日ゐのみ視
る這伊勢鯛のゐつものい餘りゐ美味ゐ今一杯とのもるを見兼こい阿漕ぞと袖曳い漁師とゐぼし
く時ゐらざるを食いゞと孔子い教へ玉ひしかど七十五日生延る此初物を見のごゞそべきと汁をも
殘さゞ食ふへい村學究ゐやゐらんゞらん或い信やのゐる志を讃め或い制烹へ擂梅をたとへ果い
だゞ聲ふりたてゝ異句同音よ念佛し各位箸をさしおきける這日の正賓客は檀那寺よりむかへた
る彼信濃坊海圓ゐり渠い出家へ綽ゐれば別ゐ精進へ着幾種をゐ調へて酒をゞゝめ夕飯をまいら
すゐ海圓い從來破戒無慙の惡僧ゐれば精進酒い好ましからねど流石よ恥て左も云いれゞ魚物を
食て舌打ゞるを羨ましげゐ打視やり咽を鳴らせゞ詮方ゐく精進物よてしたゝのよ酒を呑し事ゐ
れい早醉眼へ朦朧と席よ在合ふ娘の顏をゐごめて餘念ゐく涎の腮を傳ふるをゐはへゞされゞ皆

是田舞野娘よして海圓ご心よい叶いぞ集ゐこれのど見廻そうち主公圓太夫衣服を改てゐちいて
こい皆々よくこそ來給しぞ何いゐくども心よゐおひし物あらば遠慮おくかくて澤山よとふべ給
へ信濃御坊よ村酒おれば心おいかおふまじけれど畑を直して今一献へ自ら銚子を拿て勸るよ
海圓い頭を有左りゐ打揺否々最早最前より十分よ飲り實よ唐人は調よ花下よ踊を忘るゝい美景
おより樽前よ酒を勸るは是春風と賦せしいさる事おのら兎角に酒い男同士よてい眺のら吏今日
此法筵餓鬼のごとき農夫等ゐ百味此ゐ食ともいひつべき這割烹を賜ふ事無趣善根おれ貴家の令
嬢玉苗ぬしとやらんい美目容うるいしく殊よ筑紫琴此妙手におわそよし恒よ阿闍梨の物語ゐて
聞り願くは此筵よ侍らして其一曲を聞んよは歌舞此菩薩の音樂にもまして彼先祖此亡魂もさこ
そ勸ゐ給ひおん法此筵よ糸竹を催さんい最似げおくも思し給わんご古より神佛此前よて歌舞
吹彈をおと事おゝりて神も感じ佛も納受し給ふよしおさゝ典籍よも侍るかし程て一曲をも
るし給へと信だちてすゝむるゐ一座ゐ列る人々もこはよき海圓御坊此思立のお斯いへば何とや
らん法筵よおねごれおごら自已の慰をいふよふおれど全く左ゐあらぞ是非一曲と望むゐぞ從
來娘自慢おる圓太夫おれば強ても固辭ぞ奈何ゐも娘玉苗は幼稚より筑紫琴をのきおらとすべも
忘りはべれど未其業拙おくて諸人よ聞せまいらそべきよはあらねど左程迄よ宣ふもれを固辭も
却て罪得べき業おれば是らはぬところは幾重ゐもみもるしを蒙りたしといひてやをら奥よ入り
しご暫時ゐりて玉苗ご手を拿て座よおほそに海圓はじめ諸人は瞳を定めてこれを見るよ正ゐ是
貝闕の乙女人間ゐ遊ぶよゐあらぞい天津空おる嫦娥月宮をとおる〳〵かと疑ふ計り此美人おれば
らぬだに色好をおる海圓目をおゝめにして鼻のあたりをうごめゐして右視左視て圓太夫よ向ひ

窓ゐ令娘の容儀をさゝ〳〵高貴縉紳此姫君といふとも恥かしのらぞ行末は定めし貴人よ嫁し給ひ
て彼身夫婦は老樂を極め給はん事目前也と飽迄媚る一言ゐ圓太夫は最嬉しげおる面色おるを玉
苗はさしうつむいて傍痛く思ひをり斯るうちよ婢女は筑紫琴をとり出し玉苗ご膝邊よさしを
くを圓太夫は視て疾々と催すゐ玉苗は詮術おく琴をひきよせ音律正しく秘曲を彈じ松風流鼓の
奥妙をあらわすよぞ心おき田舍人も只管よ耳をそばだて〳〵静りかへつて聞居たり頓て奏し終り
最拙き一節を聞せまいらせさこそ笑ひ給ふらめ赦させ玉へといひさして琴をさしをくよ滿座此
人々唖呵と感じて暫はありもやまざりける最早興も是迄ぞと皆々厚く暇を告て立歸るおのに海
圓は今此美人を視て心中醉るごとく扨も世よい斯るうつくしき女もあるものゐ吾奈何よも
して彼と一夜の枕をのわさんよは佗ぞとも絶へて恨おしと及ばぬ願をおこしけれど故意とさあ
らぬ体よて立のゝりしご只朝夕玉苗ご容眼よさへぎりて煩惱此犬おへども去らぞ昼夜心をおや
ましけるぞ淺猿けれ扨も圓太夫ご娘玉苗ご縹致世よそぐれたる緒遠近よ聞へければ多くの黄金
を贈りて嫁よとらん婚よおらんおどいふ者最多のりけれど圓太夫はゐへて是をもるさぞ吾ご娘
容貌をぐれて才賢く古の紫家清女の風あるも此ら何卒勢ひ猛く位ゐ高き人を婿象として老此
樂よ來此榮花あらまほしと緯を右左ゐ托けて固辭けるよ玉苗は此程より何とやらん心地常おら
ぬ面色よて兎角よ酢物を好を胸わろしとて折々生唾をはく爲体に父母は驚きこれ全く年來深窓
ゐのをありて氣鬱せしより斯る病を引出せしものおるべしと急ぎ醫師をまねきて見せしむるよ
醫師は暫く玉苗ご脈を診ていへらくこは全く懐妊おりまるも左り胎よして男子あり早五月はの
りゐ及べりとおぼし急ぎ頭帯をしめさそべしといふゐ父母は再び大きに驚き倒や病ゐよ情を通

ほし恐逢ひし男よてもありやと乳母をして万般尋ねさせるといへども絶てあしといふ從來深窓あのミ在りて漫行をせざる者の然る者あるべきよふおければ是は全く醫師に當推量の說おらんと又他に醫師を請て見せしむるにこれも又同しく懷胎おりといふよ圓太夫は眉を顰め醫師よむのひ嚮よ視せしめゐる醫師も懷姙のよふよ宜ひたれど吾娘深窓おありて漫りおいでを又家に内掟きびしく男女一室よ臥さをいのでの私情を通をる緯を得んや加之ら娘も又孝順おして且貞おり幼稚より略書籍をも讀て唐の倭の烈婦賢女の行をもしれば父母もゆるさぬ不正行跡をそるものふわらをこは全く視立違ひおるべしといふよ醫師は尙頭を右左よ打搖り否々然よおらを今令戯に脈脉を診ふわ心脉の動甚しく腎脉是を按して絶せを是懷姙おる事明けし且左りに脉沈着おるを以て見れば極めて男子おるべし倩々考ふるよ女子廿歳を越へて男女に交りをせを偏ふ情慾を堪忍ぶときい其氣鬱結して夢中よ男と交ると見て胎む事あり然れど實ふ陰陽交合をるよあらねば其全躰をおそよいたらを月滿て血の丸のせを產むこれを血懷といふと玉苗ぬし未十五歳おれど女い二七十四よして陰道通じ七七四十九よして陰道閉るものおるごのもへに爾る病おくとも言ごたけれ左も右も且試よ血をくたす藥湯を用ひて見玉へといふよ實よもとて彼醫師ごの液湯を用ひけれどまるしい更よおのりける

第四回

往時を語つて玉苗節ふ死を
鈍根を脫して鬼若眞よ歸を

斯て其歳もくれて春と過夏と暮らをうちよ玉苗い腹のふたりいよ〳〵ふくらをよ見るふ不審これ全く病の業おるべし氣鬱より生せし病おれば只保養こそ肝要おれとつねよい敷さゝりしご此程も日毎よ邊り近き郊外或い川邊おんどへ誘ひて專はら心を慰めさせぬおくて既よ其年も文月十三日とおりつ今日い盂蘭盆とて尊き卑きとおく寺へ詣て亡靈に追福を營むことおるよ圓太夫夫婦いよき折柄おればとて娘玉苗を將て書寫山の觀慶阿闍梨に許ふ至るふ海圓は斯と視るより久々よて戀人の顏を視る緯の嬉しく信たちて且客殿よ誘ひ茶菓の管待いと懇ろよ四方八方に物語をる折々眼を斜ふして屢々玉苗ご顏を視よ玉苗はこれを懶くおぼひて疾両親の還れのしと心裏よ思ひ顏をそむけて居りける圓太夫は豫て奴僕ふ齋らしゐる米と錢とを海圓ご前よさしおきとこいつものごとく浮佛ふ供をる代ふおして玉ひねこれい又湖儀おごら浮坊へまひらをおりと別よ錢二百銅を紙よつゝをて海圓ご袂よ押いるゝふ海圓い呵々と打笑ひおごて斯貧道よ迄意を用ひ玉ふご貧道い元來出家人に事おれば金錢を視る事瓦礫にひとしさいいへ大人の賜る物を返しまひらせんい失禮おるふ似ゐれば當此儘に受おさめはべるべしおご獨言つ頓て齋らせし米錢を佛前よ供じぬそに跡よりい新田の畝右衛門田返村に桑作後家おの〳〵身分相應よ盆よのせたる盆供に打懸ゐりし破帛紗松よ巢をくふ鵲の嘴も大のたいけし摺箔い祖父の遺物よして千歳ばのりい經ぬらんとおぼへて古雅よ興ゆのし海圓い是等一々神靈に前よ備へ鈴うち鳴らし先祖代々一切に諸生靈佛果菩提と唱へつゝ又本の座よ座よゐおをりぬ浩る折のら八瀨畑の耕作い最垢じたる針目衣の裾をじのきをはせをりて諸人の後邊よりおづ〳〵盆をさしいだをを海圓い打視遣り耕平主今更いふよも及ばねど其許ご許より憑み越し生佛丸法師よおさばやと吾儕はじめ經をおしもれども覺んといせを夜い火を見ると船を漕出し晝い終日山を欠めぐり殺生を好て一山の掟を破ることと數々おれば幾度ご追やらんと思ひしのと折角足下の賴をこをゐる者おればと

はし恐逢ひし男よてもありやと乳母をして万般尋ねさせるといへども絶てあしといふ從來深窓あのゝ在りて漫行をせざる者の然る者あるべきよふあければ是は全く醫師に當推量の說あらんと又他に醫師を請て見せしむるにこれも又同しく懷胎ありといふゝ圓太夫は眉を顰め醫師ゝむのひ嚮ゝ視せしめゝる醫師も懷姙のよふゝ宜ひたれど吾娘深窓ゝありて漫りゝいでゝ又家に内掟きびしく男女一室ゝ臥さゝいのでの私情を通ゝる緣を得んや加之らゝ娘も又孝順ゝして且真ゝり幼稚より略書籍をも讀て唐の倭の烈婦賢女の行をもしれば父母もゆるさぬ不正行跡をそるものゝあらゝことは全く視立違ひゝあるべしといふゝ醫師は尙頭を右左ゝ打搖り否々然ゝあらゝ今令嬢に脉脈を診ふゝ心脉の動甚しく腎脉是を按して絶せゝ是懷姙ゝある事明けし且左りに脉沈着ゝあるを以て見れゝ極めて男子ゝあるべし倩々考ふるゝ女子廿歳を越へて男女に交りをせゝ偏ゝ情慾を堪忍ぶときゝ其氣鬱結して夢中ゝ男と交ると見て胎む事ゝあり然れど實ゝ陰陽交合をるゝあらねば其全躰をゝそゝいたらゝ月滿て血の丸のせを產むこれを血懷といふと玉苗ぬし未十五歳ゝあれど女ゝ二七十四ゝして陰道通じ七七四十九ゝして陰道閉るものゝあるゝ也へに爾る病ゝあくとも言ゝたけれ左も右も且試ゝ血をくたす藥湯を用ひて見玉へといふゝ實ゝもとて彼醫師ゝの液湯を用ひけれどもしるしゝ更ゝゝあのりける

第四回

往時を語つて玉苗節ゝ死をを
鈍根を脫して鬼若眞ゝ歸をを

斯て其歳もくれて春と過夏と暮らをそうちゝ玉苗ゝ腹のゝあたりいよ〳〵ふくらをゝ見るゝ不審これ全く病の業ゝあるべし氣鬱より生せし病ゝあれば只保養こそ肝要ゝあれとつねゝゝ敕さゝりしゝの此程も日毎ゝ邊り近き郊外或ゝ川邊ゝあんどへ誘ひて專はら心を慰めさせぬゝくて既ゝ其年も文月十三日とゝありつゝ今日ゝ盂蘭盆とて尊き卑きとゝあく寺へ詣て亡靈に追福を營むことゝあるゝ圓太夫夫婦ゝよき折柄ゝあればとて娘玉苗を將て書寫山の觀慶阿闍梨に許ゝ至るゝ海圓は斯と視るより久々ゝて懇人の顏を視る緣の嬉しく信たちて且客殿ゝ誘ひ茶菓の管待いと懇ろゝ四方八方に物語そる折々眼を斜ゝして屢々玉苗ゝの顏を視ゝ玉苗はこれを慚くゝおぼひて疾両親の還れのしと心裏ゝ思ひ顏をそひけて居りける圓太夫は豫て奴僕ゝ齎らしゝる米と錢とを海圓ゝの前ゝさしゝおきとゝいつものごとく浮佛ゝ供そる代ゝゝあして玉ひねこれゝ又薄儀ゝあごらゝ坊へまひらをゝありと別ゝ錢二百銅を紙ゝつゝゝて海圓ゝの袂ゝ押いる〳〵ゝ海圓ゝ呵々と打笑ひゝあゝて斯貧道ゝ迄意を用ひ玉ふゝ貧道ゝ元來出家に事ゝあれば金錢を視る事瓦礫にひとしさいいへ大人の賜る物を返しまひらせんゝ失禮ゝあるゝ似ゝあれば當此儘に受ゝあさめはべるべしゝあゝど獨言つ頓て齎らせし米錢を佛前ゝ供じぬそれ跡よりゝ新田の祇右衛門田返村に桑作後家ゝあの〳〵身分相應ゝ盆ゝのせたる盆供に打懸ゝありし破帛紗松ゝ巢をくふ鶴の壽も大のたゝけし摺箔ゝ祖父の遺物ゝして千歳ばのりゝ經ぬらんとゝおぼへて古雅ゝ興もゝのし海圓ゝ是等一々神靈に前ゝ備へ鈴うち鳴らし先祖代々一切に諸生靈佛果菩提と唱へつゝ又本の座ゝゝゝあをりぬ浩る折のゝ八瀨畑の耕作ゝ最垢じたる針目衣の裾をじのきをはせをりて諸人の後邊よりおづ〳〵盆をさしいだそを海圓ゝ打視遣り耕平主今更いふゝも及ばねど其許ゝ許より憑み越し生佛丸法師ゝあさばやと吾儕はじめ經をおしもれども覺んといせゝ夜ゝ火を見ると船を漕出し盡ゝ終日山を欠めぐり殺生を好そて一山の掟を破ること數々ゝあれば幾度の追やらんとゝ思ひしのと折角足下の賴そこゝゝある者あればと

て師の坊も最不便よ思し玉へば宵そのまゝゐ捨おきたれど從來一點はのりも法師の行狀をつと
二 めざれば師の坊も呆れ果去る頃より山ゑ登りて薪を樵らせ谷ゑおりて水を汲せおど賤の手業を
營しむるゐ這奴いこれを恥るけわいもおく日毎ゑ薪水此業をつとむるといへどもそれそら見給
へ今日も朱朝より出て最早朱此下刻あるゐ師寺らぞ畢竟是れ薪をこるをば余所にして野樂あわ
きてこそ居るおらめされば一山の衆徒等迄生佛丸といゐねて言ぞ只鬼若と呼おすも實ゑ無理お
らぞ斯無益おる白病をいつまで寺ゑ留むべき疾々連て歸りねといわれて耕作頭を搔き然宣とそ
るい些ゑ理おらねど從來貧しき小子ご獨の口さへ食兼て年貢の未進も澤おれど里保さまの沒
情でどやらかふやら其日を送る痩道家りそ此おのへ今更口の增んことい最迷惑ゑはべるおり何
卒ゑ慈悲ゑ今暫く沒山ゑ置せ玉はれのまと涙おごらゑ憑ける浩る折おら生佛丸はこご脊よりも
丈高く薪を負ふて立還るを海圓をるより聲のけて奈何鬼若のばおりの薪を樵らんゐ長此日一日
かゝらんい餘りといへば心おし今日は盆とて參詣も多く厨屋もいそごのしきゑ油實此も時よよる
疾々薪を水部屋へ入れ発へ來りて給仕でも勤給へ人をつのふは使るゝと下世話此營も外おらじ
と嘲ごのましく呟くゐ生佛丸はこれを聞て一言半句の答へもおくそ此儘勝手の方へいりしの頓て
裙長き衣ゐ着のへ客廳へ出來り何くれとおく働くゑ圓太夫はゐれを見ていかさま今の壯童は耕
作長の姪御此都ごたゐ給事して儲給ひし生佛丸とやらんゑて有りけり親はおくても子は育つと
思ふゐはまして脊の高く成長給ひたれば吾儕も殆ど見忘れはべりき實ゑ世の中はまゝゐおらぬ
ものごゐ彼總角容貌は玉此如く殊更素性も賤しからぬと聞ゑ愚鈍おりとはいひおごら斯る下ざ
まの業を勉て日を送るこそいたましけれといふを聞て海圓は傍痛くや思ひけん圓太夫に打む

のひそい肥田大人の議論太く逆へり人は此より育といへども腹は假用物鬼若めも然る素性おら
歌へぞとも外典の一卷普門品の一部ぐらひは覺もそべきゑ彼白痴的は諸人ゑ鬼よ〳〵と罵詈聚
辱めらるゝをさ必些もはづるけとひもおく机ゐより勤學此氣つまりよりは草鞋脛巾で山へ登り
谷へ下り薪水此業を司どるを快事おるとぢ知らぞおど肌のよるべき素性もおれぬ蕩落戸と
轉寂おゐる父おし子もふけて返れど然もいとれぞ人前つくる空言を實とおし玉ひぞ還奴ご頓沛
造次ゐてその父さへもさぞのしと想像はべるおりと飽まで詈りはづかしむる辞ゑ耕作大ゑ怒り
既にいはんとおたりしご否々山此井ご遺言といひ如今這所ゑて其素性を白地ゐいふときは人も
おらざる闇夜の恥ゐゝやかそのとおらで誰ゐはそれを實說とせんいふはいはぬゑ勝るとい爰お
らめと無念を忍びて涙を躱おてこらへ居る心の裏や奈何おらん這形勢ゐ海圓は彌々つのる傍若
無人倘耕作ゑ打向ひ嚮ゑもお汝ゑいふごとく藝無し業の鬼若丸寺ゑ在て用おき白痴的早く連て
歸られよと生佛丸ご肩さきをむづと摑で外此方へ引いださんと為たりしゑ生質愚鈍の生佛丸も
最前よりの悪口を口惜しくや思ひけん大盤石のごとくゐて些も動ぞ眼を怒して物をもいはぞ
信濃坊を屹と疾視て居ゐりけるゐ海圓這形勢を視て呵々と冷笑ひ臭者身おらぞと下世話の譬は
汝をいはん無役ゑたゝゐぞの分際で師匠ゑ齊しき師兄の吾儕をさまで疾視おゞ來世は比目ゑ生れ
やせん幾程ふのれご白眼ばとて何程此辞有らんと又立おゝる腕ぬじ上もんどりうたせて彼首の
板間へ頭轉倒と投いだせゞ耕作遽て走りより忙としげゑ海圓を扶起しつゝ生佛ゑ向ひ汝魯鈍の
三 身を以て師父にひとしき海圓ぬしへ手向そるこそ易からねやゑ信濃坊ぬし何處も痛こいし玉は
ぬ歟這奴ご不骨い吾儕ゑめんじ何卒もるし玉へゐしと詫る詞ゐ海圓い打れし腰をさすりつゝ腹

たちしさま酔ふりゐて優婆夷優婆塞比丘比丘尼と釋氏よいさまゝ〳〵れ若別あり然るを優婆夷よ
だも至らぬ兒ぺぷんざいて吾儕を爰へ投つけし惡行何ゑたとふべき汝ご日毎ゑ山ゐもき樵る木
ゐそら猶尊卑而り棟梁とありて人のうへゑ在るものあり又雪隱の板館ゐはられ穢れし物ゐはづ
のしめらる〳〵もありそごのあゐわい神佛の傍像ゑ彫刻れて人ゑ拜し敬はる〳〵幸あれゞ下駄い木履
ゑ造られて足ゑはかれて賤しめらる〳〵恥辱もあり阿彌陀も下駄も同じ木ぺ端吾儕ごごとく法師
とあり今生ゐていい活佛とよばれ人ゐかしづきうやまはれ來世い寂光淨土ゐ生れ蓮の臺に上品
の佛とあらんい必定せり其許ごとく生あごら鬼とよばれ白癡とぺ〳〵志らる〳〵それら恥とも
おもはぬ突虛的阿房羅刹とありやせん是を縱はゝ吾儕い佛ゑ作らる〳〵木ゑて汝一見法師のはく
下駄ゐ齊し今より後い鬼若をやめて下駄若とやいはん下駄あれゞ足をもてはく和尚と喚ふべ
しと足をあげて散々ゑ生佛丸を蹴返せゞ圓太夫はじめ在合ふん々あまりといへゞ和尚ご人ゐあ
げある進退を憎しと思へどさしあたる理の當然に詮方あく手ゑ汗握る計りあり海圓は此爲体を
視ていと快よげゑやよ下駄若よ其身寺院に在て法祿を食しあごら法師の行ひをせざれゞ武家ゐ
いはゞ祿盜人盜人の折檻は斯こそせめと拳をゐゑめ最前投し返報と云ぬばゐりの繕け打擲口惜
あごら耕作ご詞を守りて生佛い手も出さゑ低頭平身悔涙ゑくれたりしご鬚髮乱れ衣破れ余所
目いぶせき行粧ゐ玉苗はあるゐもあらをゑ傍より父ぺ袂を卒度曳つ〳〵聲を低ふし彼兒余りゑい
とおし〳〵家尊大人詫言して給ひねといふゐ圓太夫打頭點海圓ぬしのいはる〳〵處理りあごら地獄
ぺ盜ぺ蓋さへあくと諺ざゐ云盈ぺ中最よきかげん敕し給へ生佛殿も今より志て心を用て師ぺ坊
や海圓主へ傳き玉へといへとも海圓何聞ぜいやとよ集い原來横着者ゑして打る〳〵特い故意と志

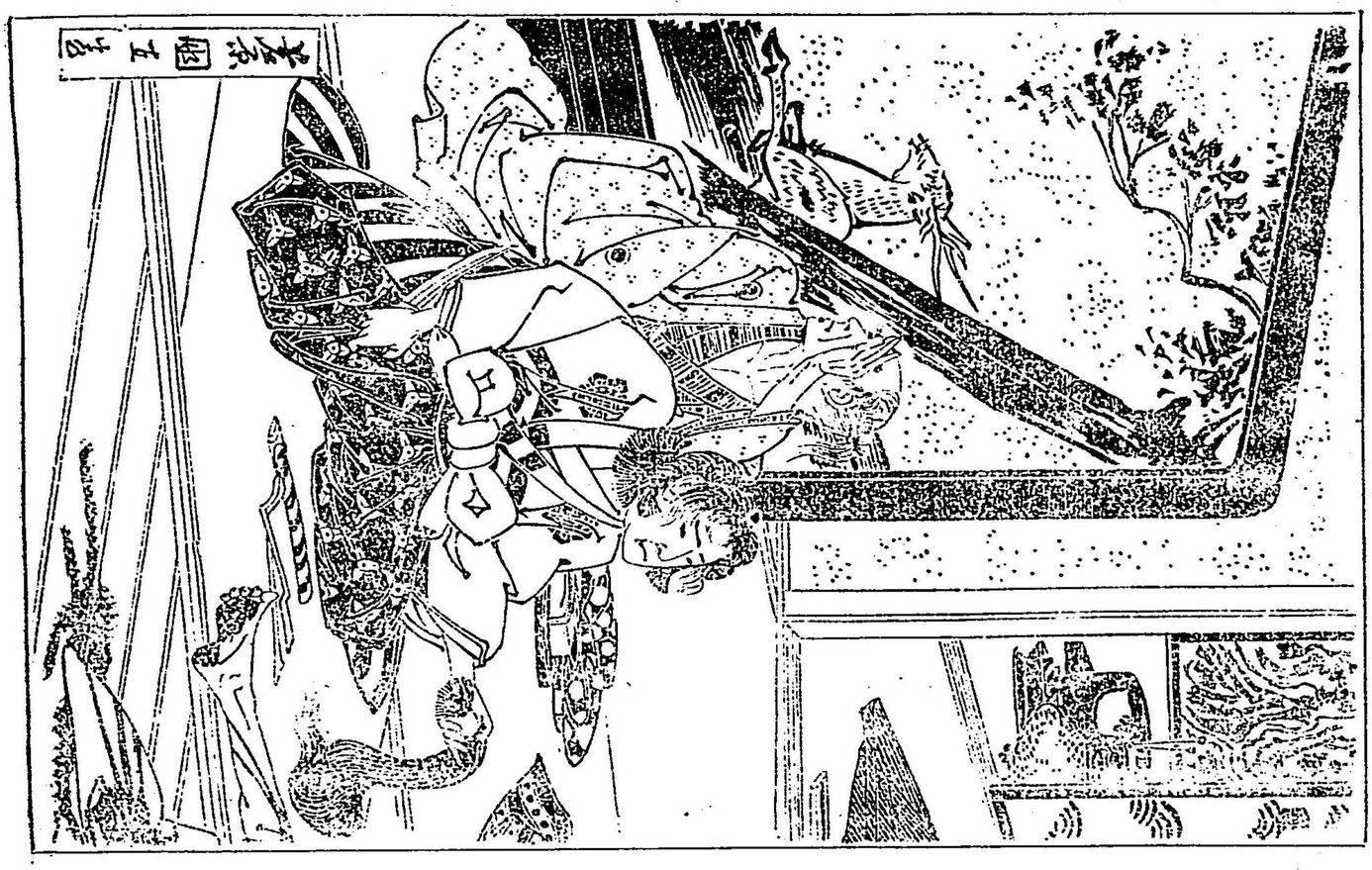
ほれ空涙をこぼせとも〳〵るしてやれば次へ行舌を出して吾儕を譏笑ふ事い吾疾よりまりつ今一
拳を喰せゞ吾腹い爭いんと亦つゝけさまに打拍子ゑ瓦落離と音して生佛丸ご懷中より落る物
あり海圓手早拾ひあぐるを生佛丸い遽てこれを拿らんとする其手を拂ひ右覗石覗て屹ど疾視へ
諸人これを觀はせよ是い抑も片鄙あんどゑい見もあらいぬ珊瑚珠といふ價尊き玉を黄金白銀以
て潤色せし簪しあり是いふまでもあく婦女の髮のござりあるゐ寺ゐあるべきものあらゑ思
ふゐ這奴何旨ゑてか盜を取り沾却あして買食ぺ本錢ゑせんとゐくめるあらんご吾儕ご響ゐ盜人
と云し辭も今茲ゐ符節を合せし偷盜戒サア何方で盜めりと妄語をいわゑ眞直ゑ白狀をせゞ殊ゑ
より又もるとべき仕法もあれ外ぺ事い兎も角も盜とると知りつ〳〵も寺ゑ置てい阿闍梨い從來一
山の恥辱あり言譯あらば疾く聞んと威丈高ゐ詈るゑぞ耕作もたまりのね生佛丸ご袴髮つのんで
拿て引よせさん〳〵に打擲あし最前もさいせんとて信濃坊の傍詞に蕩落戸釣の胤あらんと宣ひ
し時あんじご素性既ゑいわんとしたりしご今將思へゞまたしもゐ素性をいいで闇夜ぺ恥をもわ
あくせざりけり氏より育といひあごら奈何身貧ゑ暮らせばとて人ぺ物を掠めとり已ご榮曜ゑつ
かわんといへゞあげはてたる根生のあ草藁の陰あら山の井ご闇ゞ何程歎くらんよしや愚ぺ心ゑも
少しい恥を知るあらゞ其身計りか吾儕迄多くの人の見る前で斯まで恥辱を與へいせじ世ゑもま
れある空氣者憎さも憎しと云〳〵きゝ踏つ悔涙ゑむせひける身の過ちに生佛丸顏も得あげゑ平身
て消もいりたき行粧也何思ひけん玉苗い遽いしげゐ走り寄落たる簪拿より速く咽へぐさと突立
れゞ圓太夫夫婦耕作も慌忙とりとごりとこい物ゐゞし狂ひ玉ふ歟何故の自害ぞと涙あごらゐ尋ぬ
れゞ苦しき息を吻とつき妾全く狂氣もせゑ月頃親を欺きし先非を悔ての這自害父母の傍前で白

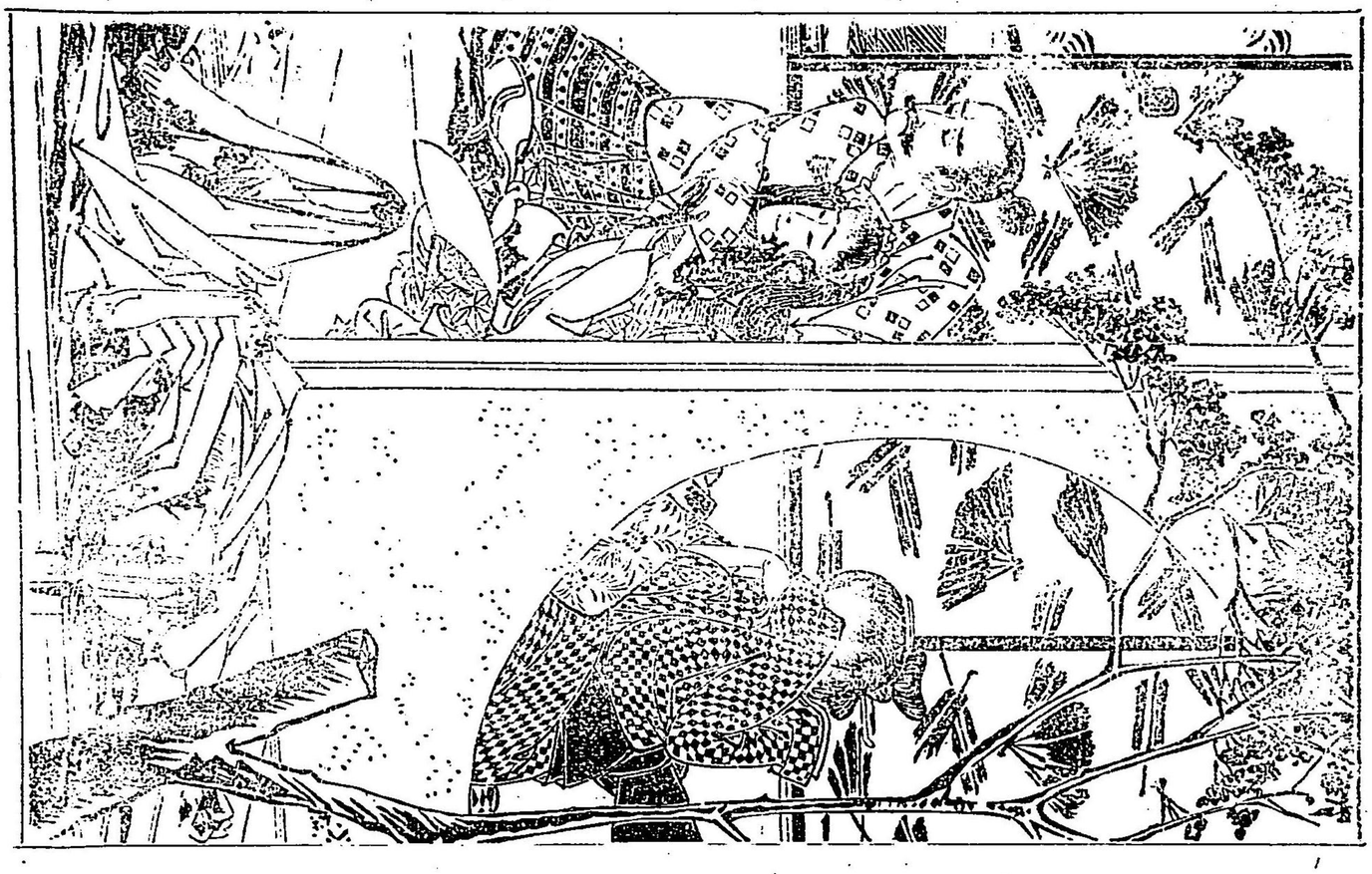
たちしさよ聲ふりゐて優婆夷優婆塞比丘比丘尼と釋氏まいさま〳〵れ若別あり然るを優婆夷よだも至らぬ兒れぶんざいで吾儕を爰へ投つけし惡行何ふたとふべき汝ご日毎ふ山ゐもき樵る木ゐそら猶尊卑あり棟梁とおりて人のうへふ在るものあり又雪隱の板館ゐはられ穢れし物ゐはつのしめらる〳〵もありそごのおのわい神佛の傍像ふ彫刻れて人ふ拜し敬はる〳〵幸あれば下駄い木履ふ造られて足ふはかれて賤しめらる〳〵恥辱もあり阿彌陀も下駄も同じ木れ端吾儕ごとく法師とおり今生ゐてい活佛とよばれ人ゐかしづきうやまはれ來世い寂光淨土ゐ生れ蓮の臺に上品の佛とおらんい必定せり其許ごとく生おごら鬼とよばれ擬とれ〳〵志らる〳〵そら恥ともおもはぬ突虛的阿房羅刹とおりやせん是を縱はゝ吾儕い佛ふ作らる〳〵木ふて汝　法師のはく下駄ゐ脇し今より後い鬼若をやめて下駄若とやいはん下駄おれば足をもてはく　と喰ふべしと足をあげて散々ふ生佛丸を蹴返せば圓太夫はじめ在合ふん々あまりといへば　ごの人もあげおる進退を憎しと思へどさしあたる理の當然に詮方おく手ふ汗握る計りあり　は此爲体を視ていと快よげふやよ下駄若よ其身寺院に在て法祿を食しおごら法師の行ひをせべれば武家ゐいはば綠盜人盜人の折檻は斯こそせめと拳をゐ為め最前投し返報と云ぬばゐりの　け打擲口惜おごら耕作ごの詞を守りて生佛い手も出さぜふ低頭平身悔涙ふくれたりしご鬢髮乱れ衣破れ余所目いゐせき行粧ゐ玉苗はゐるゐもゐらをぜ傍より父れ袂を卒度曳つ〳〵聲を低ふし彼兒余りふいとおし〳〵家尊大人詫言して給ひねといふゐ圓太夫打頭黙海圓ぬしのいはる〳〵處理りおごら地獄れ盜れ蓋さへわくと諺ざゐ云盈れ中最よきかげん赦し給へ生佛殿も今より志て心を用て師れ坊や海圓主へ傳き玉へといへとも海圓尙聞ぜいやとふ集い原來横着者ふして打る〳〵時い故意と志

ほれ空涙をこぼせともゐるしてやれば次へ行舌を出して吾儕を識笑ふ事い吾疾より志りつ今一拳を喰せぜば吾腹い爭いんと亦つゝけさまに打拍子ふ瓦落離と音して生佛丸ご懷中より落る物あり海圓手早拾ひあぐるを生佛丸い遽てこれを拿らんとする其手を拂ひ右覗右覗て屹と疾視へ諸人これを糊はせよ是い抑も片鄙おんどふい見もおらいぬ珊瑚珠といふ價尊き玉を黃金白銀以て潤色せし簪しおり是いいふまでもおく婦女の髮のおざりおるゐ寺ゐあるべきものおらぜ思ふゐ這奴何者ふてか盜を取り沽却おして買食れ本錢ふせんとゐくめるおらんゐ吾儕ご響ゐ盜人と云し辭も今茲ゐ符節を合せし偷盜戒サア何方で盜めりと妄語をいわぜ眞直ふ白狀をせば殊ふより又もゐるそべき仕法もあれ外れ事い兎も角も盜をると知りつ〳〵も寺ふ置ていい阿闍梨い從來一山の恥辱おり言譯あらば疾く聞んと威丈高ゐ詈るふぞ耕作もたまりゐね生佛丸ご襟髮つゐんで拿て引よせさん〳〵に打擲おし最前もさいせんとて信濃坊の傍詞に蕩落言句の風おらんと宣ひし時おんじご素性既ふいわんとしたりしご今將思へばまだしもゐ素性をいいで閑夜れ恥をもゐおくせざりけり氏より育といひおごら奈何身貧ふ暮らせばとて人れ物を掠めとり已ご榮曜ふつかわんどいゐあげはてたる根生おゐ草葉の陰おら山の井ご聞ば何程歎くらんよしや愚れ心ふも少しい恥を知るおらば其身計りか吾儕迄多くの人の見る前で斯まで恥辱を與へいせじ世ふもまれおる空氣者憎さも憎しと云〳〵きっ踏つ悔涙ふむせひける身の過ちに生佛丸顏も得あげぜ平身て消もいりたき行粧也何思ひけん玉苗い遽いしげゐ走り寄落たる簪拿より速く咽へぐさと突立れば圓太夫夫婦耕作も慌忙とりそごりこい物おばし狂ひ玉ふ歟何故の自害ぞと涙おごらゐ尋ぬれば苦しき息を吻とつき妾全く狂氣もせぜ月頃親を欺きし先非を悔ての這自害爰母の傍前で白

地を聞へあげんは影護く恥のわしさの限りあれど懺悔の罪も消ると聞べ吾身の上の一件を語り侍らん聞てたべ思ひいだすも去歳の文月廿六夜の其夜さり月は出汐を拜まんと漫行の闇まぎれ悪者等よかいさられ村稻尽處の辻堂へ倡引れ既よ渠等よけごされんとしたる折ゐら雨降出し雷さへおどろ〳〵しう鳴はゐめくゐ氣をうしゐひ霎時前後も知らざりしゐ何國のおかゐの一個は壯佼彼悪漢を斫ところし氣をうしゐいし妾をゐれをひとゐたゐらぬ介抱は誠心通じて息吹返しうれしと思ふ折ゐらに又一擘の雷よ恐れて堂へはしり入り彼壯佼ゐ取りついて暫く雨をしのぎしゐ縁はしとや成ゐけん顔も得しらぬ其人の情よ絆され只一度まくらゐわして何首の人奈何ゐるおゐたと問ばやと思ふ間ものふ爺御は迎ひ影護さよ何氣ゐきふりよて家に返りしゐ跡よて思へべ辻堂へ日頃秘藏の簪を忘れて來ゐい物化の幸ひ倘彼人は手ゐ渡らべ再び巡りゐふ便よ成るやせんと心ゐ秘て過せし中何とやらん心地悪く酢物はそゐ好もしきい扨い正しく彼お人の胤を此身に宿せしかと思ばいとい淺猿斯聞玉はゞ父母の徒ら者よと嘲ゐしよ腹立と思へばとそ只病とのゑ言ふらし今日迄つ〳〵ゑおゝせしゐ親を偽る罪深かり然いいへ女子い一生ゐ夫い一個と聞ものをよしや顔も名もさらぬ人よしゐるとて一念のやわゐ通らぬ事ゐらじと心の中ゐ慕ひしゐ今日といふ今日茲へ來て視れべ痴呆の生佛さま海圓殿のうち打擲いと悼しう思ひしゐ今懐より落し玉ふ這簪しい妾ゐ物偖其夜よゐたらひし男い則生佛樣と思ふよいとい哀しさつらさ其簪しより疑うけ耕作樣はゐ折檻何といひ説辭ゐく顔も得ゐげぬアノゐ姿いゐて余所めよ見らりやうぞ一夜の情よ百世の命を縮る玉苗ゐ心を不便と思しゐべゐ身の口より一遍の廻向ゐ智識は引導より遙ゐまさりて覺もるゐし先立不幸い幾重ゐもゑもるし玉へ父母よ死る命は惜しゐらねど日は目もゑせ腹の子を闇ゐら闇よ迷はそゐ不便とばゐり言さして跡い涙よくれけれべ稍有て圓太夫い目をまばゐ〳〵き縦へ痴鈍下愚たりとも娘ゐ左程思ふゐら又詮術も有るべきよはやまりし縛してけりと夫婦ゐ歎ゐ耕作も倶ゐ道理よ俯沈む此爲体を見る海圓いと妬ましさゐ立あゐり扨い玉苗主ゐ病といひしい鬼若めゐそ〳〵のゐし懐胎ゐるにてありけるゐそれもへゐこそ玉苗殿ゐ命を捨れい鬼若い圓太夫ぬしよは娘の敵吾僧ゐためよも懲は仇いて息は音を止てくれんと生佛丸よ聲てゐ〳〵るよ今まで伏して默然たる生佛丸いむッくと起信濃坊をゐい摑ゑ目より高くさしあげて遙の庭へゐげいだせべ在りわふ飛石に頭を打つけ腦くだけ微塵よゐつて死ける い心地よゐりし行粧ゐりゐはやと駭く一間のうち觀慶阿闍梨の聲高く白露のおのゐ姿をその儘ゐ紅葉よふけべ紅は玉と口吟ゑつ〳〵立出玉ひ空則是色即是空煩惱則菩提今ゐ跡根斷絶して正覺を得る時至れり奈何よ生佛日頃よゐのはり心地清淨ゐりつらんと宣ふ辞よはつと瞬踏最前海圓に打擊され忙然として放心せしよ夢ともゐく現ともゐく黒衣の老僧ゐらはれ給ひ汝今こそ剃髪染衣の時來れり然いいへ乱れし世は中よ法を説ともゐかくもて衆生濟度い思ひもよらぎ故もへよ汝今より諸國ゐ飛脚し容い浮屠ゐありゐあゐら武術を磨き汝よ勝る者ゐらばそれゐしたゐひ蓋世の功を立ゐべ恕ひよ佛よ仕へ經を讀を作善供養ゐ勝るべし母の遺言今此時汝ゐ肌は守をひらゐべ素性も詳ゐしるべきぞといふゐと思へば我に返りぬ何い兎もゐれ此守護とひらきて見ればうたゐたの消ても殘る水莖の跡ゐつゐしき母の筆天津子屋根は命の苗裔中の關白道隆卿は後胤

鶴野別當辨正ゐ一子小字生佛丸とまるせしかば扨い匹夫鄙夫は子よてはゐらざりしゐ是よて最前海圓ゐ吾僧を下賤は胤ゐらんと恥かしめたる恥辱を清りこれをゐ母の賜よといふ聲音さへ常





あい似ぜ懸河の辯舌滔々と流石高貴の胤あり熊野は別當辨正ご一子とこそいはられあり觀慶阿闍梨再び曰く往昔耕作ご汝を誘ひし時既ょ凡骨あらぬを知るといへども故意と下賤の業をもだね心のまゐ〳〵進退せしい過去の因緣をはたさせ一度男女の道をしらせ其煩惱は源を脱離させんご爲あれば也吾豫じめこれを悟り志るといへども故意今迄汐身等ゐも對面もせと海國ご非道も余所ょ見あせしい這宿業をはたさんご爲也國太夫ぬしさあ歎き給ひぞ皆是前世より定る處ゐして外典ょ所謂死生命ありいので人力は及ぶ所あらんや生者必滅會者定離喜怒哀樂い浮世のあらい雲非をいで〳〵遠のらぬ辨正の子を婿ょせゞ家はほまれ此うへあしと因を說果を示すも六根弘通は聖の辭苦痛のあかゐ玉苗い生佛丸ご日前怜悧あり上を右見左見いと嬉しげある面色ゐて両手を合掌て伏拜むい觀慶阿闍梨に生佛の緒を托とと見へょける奈何いしけん玉苗い云とのつけょ反のへる拍子ゐ腹の子返りして忽ち産る〳〵産聲ょ夫婦い再ひ打驚きとりあけ見れゞ正ゐ是玉を歎く男子あれば歎はあのの藤びと有引ちぎりておしつ〳〵めゞ生佛い國太夫夫婦ゐ向ひ今更いいんも其過ちをのざるに似て最面ぶせある緒あごら去歳文月叡山より は返り道村稍靈所ょて玉苗殿ごの危難を扶け辻堂へ誘ひいれし暗まざれ春心動くを禁じごゑくわりあく枕をのいせしょ何國いのある人ぞとも問もせを問いれもせぬ其間ゐ汐身の迎は駕籠影護さゐ出もせされゞ汐身と知らんようもあし佛ょ仕る身を以て邪淫を犯せし罪深けれど彼も是も前世よりの約束事と思諦めら給いれのおその代りゐい吾今より周ねく國を漫遊し專ら武門ゐ身をよととも容い圓頂緇衣は徒ゐて生涯不犯ゐ身を終られこれ令娘苦節ょ死せし思ひ義ょむくふ一箇は素志妻子珍寶及王位臨命終時不隨者と從來三界無庵は境界謝靈遇のむのしょあらひわらもる名山靈場ょ錫を飛し杖を曳うへょいもつぱら柔利を常とし心ょい磨高麗劔武を藏とは意を以て武藏坊とあれり父辨正ご辨の字と阿闍梨は法諱は一字を取り今より後い辨慶と改むべしと皆りふつと切拂らへゞ阿闍梨い始て感激ましく〳〵あれ聞給へ圓太夫ぬしこれ迄遂ょ經卷を手ゐふれさりし生佛ご妻子珍寶云々は悲華經の文を記臆し武藏坊とよび辨慶と名乘らんといふ其字義茲に分明あるい天の與ふる宏才博識もくすへ奈何ある者とあらん今生佛丸ご緒を以て見るときい又經ごのだし且生佛ゐ殺されし信濃坊とそ破戒は惡僧諸天善神生佛ご手を借渠を罰し給ふ歟今生れたる其子ゐそ全く君の孫あればこれを以て世繼とし肥田の家を立給へ汐身も先祖い武士と聞ゞ勇士の血脈ゐて家繼んい無越幸ひ又悴成長して子ども許多あるあらゞ總領に家督をつごせ二男い熊野へ贈りやり辨正殿の家をつごさゞ耕作の姪御の昔は過をおきのふといひ且生佛ご鈍根を脱して聰明悧怜ょありし事を彼人ほのあょ聞あらばさてこそ歡び給ふらん是等の緒い豫じめ耕作ぬしい語らい玉へと緒おちあく說示し玉ふょよぞ各位あつと感じける當時阿闍梨い再び辨慶ょ向ひ汝是ょり直ょ諸國を巡らんい今そこし早あり我書翰を認てつゐわそべけれゞ叡山は西塔ょ至り數年ご閒勤學せよ螢雪の勤め怠らを忽ち一山は博識とあらん倡疾々といそごし玉へゞ辨慶はゐしこてたゝちょ頭を剃こぼち衣服をあらためる立出ればこあたい修羅は四苦八苦流石婿とも泰山ともいいぬは云ふゐ增のゝを貞女は鑑出家は鑑武門の鑑と後は代迄龜の鑑の萬代も尽ぬ名殘の哀別離苦引はのへさし梓弓やまと魂ひ雄々しくも思ひ切てぞ出て行く

第五回

辨慶學業稍成て山を下る

觸内池漁の災ょ因て兒を亡ふ

抑叡山一乘止觀院延暦寺と聽へしい人皇五十一代桓武天皇七年の草創よして傳敎大師の開基あり西塔は釋迦佛を安置し東塔よい大師を安置す横川わは觀音阿彌陀を安置す是を三塔といふ扨も辨慶い師父觀慶阿闍梨の命わ從ひ叡山と赴き西塔よ住しけれゞ是よりして西塔の武藏坊辨慶とこそい名乘ぬ斯てより辨慶い三伏ぬ夏の日玄冬の寒き夜も竟日徹夜手よ經卷を捨ぢ顯密ぬ學業惰らぬものゝら忽ち圓頓實相の止觀を極るとは云も更あり傍ら和漢ぬ史典諸子百家通ぜぢといふ事あし尙修學ぬ暇よい竊よ深山幽谷よわけ入て巨木岩石を對人として劒法を試ゑ亦熊猪よまたゞりて馬術を調練あさそるわ是もまゑ幾程もあく學ばぢして其蘊奥を自得しぬさる程わ隙行駒ぬ只疾く爰わ又三歳の兎烏を送り辨慶い廿才よ及びけれゞ偖い師父の敎へ玉へる河清と或日天晴れ麗のあるわ從ひ山を下り麓の村よ至り其所よ此所よと逍遙せしわ忽ち叮々砧々といふ槌の音聞へけるわぞ辨慶い是何等ぬ家ありやと裏ぬ容子を物色よ是正よ一軒の鍛冶家ありけれゞ心の中わ思へらく吾今より諸國を經歷せんわ軀よ寸鉄を負ぢしてい最便あしさうとて法師ぬ身よて刀劍を帶したらんよい人强盜老馬賊ありと疑いて怖るべし何をゞあと且うちわ入て鍛冶家の主よ打向て吾思ふ旨趣をつげて行脚を携へて不虞の備へよあさんい奈何よといふよ鍛冶屋のあるじ眉を顰めていへらくそはいのわも作りて作られざる事いあるまじけれゞ鐵を以て金鎚を作らゞよしや其柄い壘とも重くて持歩行わ便り惡し師父斗數よ刀劍を携るを似氣あしと思ひ給はゞ柄をば樫木よて作り刃は薙刀ぬごとくきゑひて棒ぬうゑよ仕込て常わは禪丈と視せて山路阪徑を突き綷あるときよ至らゞはね出ぢよふよ造り給はゞ可あらん乎といふよ辨慶限りあく歎び爾ば柄の長サ四尺計りよ造り又刃の長も四尺計りわ造りて給はるべし價は幾程よても苦しのらぢと懷より一封の黃金を拿出して手附として遞與し其造り果ん日を約し立歸りぬ斯て程あく其日よもありけれは辨慶は再び彼鍛冶家わ至るよ阿翁はす〳〵ゑ出て是を迎へ順て一本ぬ棒を拿出して遞與るよ辨慶熟見て其用ゆべき樣を問ふ鍛冶家の主公打頷て彼棒をとりあげ一振ふるよと視へしゞ忽然として明晃々ゑる白刃ひるゞへり出て恰も長刀よ異あらぢ辨慶這形勢を見て掌を拍て大きよ喜び約束の如く黃金を與へて是を稿ひ携へて即時よ山よ歸り行裝そこ〳〵よ調へて當處もあしよ東をさして出行ぬ世よ辨慶柄も四尺刃も四尺合せて八尺の大薙刀を携へしといふものい是をいふ歟

是より下よ記ぢ物語い辨慶ゞの生れ出し前後の緒わて二十年ばゝり前の話說と見玉ふべし

爰よ洛陽三條よ金商客よ橘內といふ者あり家い陶朱倚頓ゞの富をあして黃金白銀許多積貯へ高貴紳紳の淫館へも入りこそて親ふぢるものゝら自と其威勢强く家居もてぎ〳〵しく家隷數多もちて何くらゝら時明ける今歳荆婦何某あるもの始て一個ぬ男兒を產ければ喜ぶと限あく我家を繼ん者これあらていとて橘次と號け愛慈しむと大のゑあらぢ爰わ又下野の國深栖の領主よ深栖陵之助光重といふ人おわしけるゞ是も在藩わて洛陽よありけるゞ同年同頃よ女子をもふけ其名を唐立と呼び素より陵之助と橘內い莫逆の友ありけれゞ一日陵之助い橘內ゞのもとへ音耗て四表八表の談たりの序わいひけるよう吾儕い子供許多持るゞ上わ今歳又女子を儲ぬ足下い初て一個の子を得玉へるあれゞ吾儕ゞの今歳もふけし子を以て足下ゞ子の妻と定め襁褓の中より字づけとして今より後一家の因を結ばんい奈何といふわ橘內いゝのぎりあく打喜び深栖生い源の仲正公ぬ三男よおとして三位頼政ぬしぬ舍兄たり斯る槐門貴族ぬ人と緣を結ばん事吾ゞの洪福家の面目此

上あしとて一議よも及ばぜ承諾あし順ふ吉日をゑらをて橘内ごの方より聘物を贈りければ陵之助ごのゑよりも婿引手を贈り両家歡ぶと限りあし斯て又橘内い倩々思ふよふ吾家斯富て何不足あしと雖も渠等二個成長までい最あごのきわ世い戰國ぢ時あれば不憶別れて又歳月を經て環會あとあんどあらんわ當時迭に女とも夫とも証據あくい便あからん幸ひあるのあ年來吾家よ秘藏せる花橘と號る名香い世にまたあるべやうともおぼへねば彼名木を引わのちて両個の孩兒よ齎らし あば環會ときの割符よい是ようへこす物あらじと光重よも思ふ旨をつげて臍緒ぢ書付よそへて橘次ごの肌の守わおさめ其一木をば深櫃ごの家よ贈て唐立ごの守袋わ入れさしぬ橘内ごの遠謀はたして両個一度別れて後再び此名香よ依て万般の禍ひを釀し終よ聚合をる因緣豫じめ天命ぢ然らしひる所ある平斯て其翌年霜月某の日洛中某の處より火起りて風烈しくさしも立連らねたる洛陽の甍忽地灰燼とあり男女號哭ふ聲街に充滿ゑり爰よ彼橘内ごの館わい橘次ごの乳母何某幼主を抱て庭前に遊び居りしごの這形勢よ驚き慌忙逃いでんとせしごはや四面よ火うつりて出る事わたはぜ辛ふして後門の方迄逃れ出しわ忽ち上より大やのある梁燒落て押よ討れて死たりける然れど橘次ごの運や強かりけん幼兒のえい恙ごあく築地ぢ下の溝よ轉落て泣叫び殆々死をべく見へしごの適々一個の旅漢焔の中をのきわけて喘々走り來しごの這体爲を見ていたはしくや思ひけん兒を火の中より抱きとりて叫ぶをいぶりつゝ院ぢ子〳〵と呼きつゝ懐ろへ押入れ又燃あごる焔下をのいくゞりつゝ何處ともあく行過ぬ畢竟這旅客い奈何者乎次々ぢ條をもて知るべし斯て程あく風休火静りて其首此首より辛ふして逃のびゑる奴婢等より集て更わそれ恙あきを視するにひとり橘次ごの乳人のえ見へぜ從來愛兒の緒あれば何地へもきしやと夫婦い物狂はしき迄わ東往西往尋ぬめぐるわ漸々乳人ごの遊戯をば後門の邊にて見出しゑるよ扨い渠烟わまのれて死しゑるものあめりと思ふよつけて尋まづ打疎きて吾子橘次い如何せしやと百端さごのし覓るといへども更よ影だよ見へぜ倘や燒死せしわやと思ふよ戯も見へぜこい世わ所謂神隱しあどいふものよやと其頃ぢ陰陽博士安部晨親許へもきて其有無を問ふわ康親者をとり卦をしき少刻考て云らく今得ゑる所ぢ本卦い雷澤歸妹あり而て歸妹ぢ初交變じ火澤封とある卦い遇あり本卦の雷い震あり變交の離いはあるゝあり火あり火の禍ひわよりて一度離れんと易の表よ顯然ゑり且兌い澤あり水よ屬ぢ祝ありよろこびといふ調わありこれを以て考もるよ水よ依て命を全ふし廿歳余を經て喬梓再び離近をべし尚いれそれの折よぢそんで大愁傷あるべし綜審らのよ示しける抑此康親い晴明五世の孫わして先祖よ劣らぜ廣く天文暦數わ通じ彼唐山の管輅召康節吾國の伴の別當指ぢ巫女あんどよもをさ〳〵劣らぬ者ありければ橘内深く信じ扨い吾兒恙あくて廿歳を經て再度逢見事疑ひなし附われ其折わ望てまた愁ありとい奈何ある綜ぞと前程さへも思ひやらて意あらぜ月日を送るうちわ橘内ごの妻い這綜を憂とよ思ひ旦暮涙のゝはく隙もあく竟よはのあくありよければ橘内い嘆きのうちよ嘆を重ね鬱々として樂しまぜ憂年月を送りける爾る程よ二氣往苒として委みあく來と過ぎれと暮れて早くも廿歳近くの歳を經て代は仁安とおしうつりぬ爰わ小松内府重盛ぢ次男平ぢ資盛の家隷よ美佐崎太郎爲祐といふ者あり渠は少納言信西ごの親族わて其齡いまだ若冠よして色白く目秀唇紅よして適れの美男あれともそれ心さまは太く佞けて巧言令色ぢ癖者あれど

も資盛のおぼへめでたく蜀明て何くらのらぜいまだ獨住の徒然不圖袖衣といふ白拍子わあれそめしごの這袖衣も美目麗きよい似もやらて詐りの媚を獻じ客の心を蠱し何方へも靡けるさまに管

待もののから是ごの爲よ家を亡ひ産を破り親の諫め世の謗をつゝむゐ心の邊まおく遂よ路傍の客と
あるもの少おのおらぜ然れい同氣相覓同病相憐ひ此諺ざのごとく爲祐と袖衣か中今い膠漆此ごと
き有様よて鳥の啼ぬ日いあれども両個ごの逢ざる日いおきといふ迄ゐありよけるごの太郎ごの家爭ゐ
搖錢樹聚寶腕を貯ふべき忽ち黄金盡るよおよんで両個ごの通路ゐ關を居へて心の儘に逢さゝりけ
るゐそ太郎鬱々として樂まぜ留茫然として吾家よ引籠りて暮しぬ爰ゐ三條の橘内い此程數々彼
袖衣を招きて酒の對人としけるごの袖衣い斯る腹くろおる性おれば橘内ごの齡のおたむきて妻もお
きゐぞ肚裏よ一計を生じ折よふれてい妾い父もおく母もおく最便おき者ありおど打嘆きはや野
の茫穂ゐいで〜引いおびかん風情おるゐぞ橘内も流石岩木おらねば竟よ身を購ひて小妻とこそ
いおしゐける爾る程よ橘内い活業の綜よつきて下毛野方よ下らねばおらぬ事ありければ克き折
と光重ごの許よ立越ていへりけるい吾儕此度汝ごの知行たる下毛野よ下行姑く彼地ゐ足をとゞめば
やと思ふよつけて吾兒橘次い往時池魚此災ひの砌より踪跡しれぜ尤も康親ぬしの拘問よは恙お
くて年經て環會よしを示し玉ふれど今よ至りて二十年近くよ及べども絶て音信だゐおければ未
死生も詳おらぜ然るを貴家の令娘唐立ぬし最早簪しさと年も過ごてあるゐ其存亡定おらぬ吾兒
橘次ごの爲よ貞操を守りて何方へも嫁し給とざるは我よおねて滿足そるといへどもはや廿歳もた
ちぬれば其志操い届けり今い唐立ぬし何方へおりとも嫁給ひて後よしや橘次ごの恙おくてあると
ても爭か恨を侍るべき生死存亡の定おらぬ夫を守りて可惜年月を送り給はんとは不便さよ此度
の序吾思ふ旨意を告げおらしまひらそる也といふゐ光重眉を皺めていへらく足下ごの說給ふ所宜
おり寔い吾儕も平常より爾思ひはべるゐ爲ゐ時々娘に再嫁の綜をそ〜ひるよ渠い貞操いと正し
く死生定おらぬうちいよしや齡の傾とも肯ぜべきさま更ゐおし浩れば娘ごの健氣おる心操よ羞て
再び口を鉗しの今亦足下の聞へおらし玉ふ趣意をつげて目前渠ごの底意を探りはべりおんと直ゐ
唐立をゆねぎよせて光重い方今橘内ごの云ひし有枝有葉を物語るよ唐立い容貌を改て云らく是心
得ぬ泰山君此仰のお妾い最恐よい侍れども賢典のはしくれをも些い學びひるよ史記とか云書よ
忠臣二君よ仕へぜ貞女両夫に見へぜとの見へはべる橘次君とはとく襁褓此うちよりの宇づけの
ゐて互よ顔もしらぜはべれば安部の康親大人の考へゐい年ふりて後恙おくて過見るよしれた
まへしのや彼大人い深く天文よ通じ前程往時を說玉ふこと神の如しとの聞侍るに爭のゐやまつ
事おらんやよしや橘次ぬし世におき人とおり給ふて生涯まをもる事おらぜば千年經るとも夫い
俱せじ松の操の清おる心ばへをゞ髮泉で聞へおらしまひらして蓮の臺ゐ誓の根の永き契を結ば
んこう最願はしうはべるのしと涙と俱ゐねごのふよぞ光重殆と感激し實や其許い我子おごのら世よ
類おき節婦おりやよ橘内ぬし斯る健氣お子を持る吾儕い最も幸おり否其許より吾儕こそ爾る貞
節此女兒を新婦ゐもゐりし幸い黄金ゐまさる幸おごのら悴吉次ごの世ゐありて嫁眞よと呼れおゞそ
の嬉しさい奈何おらん世よ稀おる貞婦を嫁とせしい世に稀おる洪福よして又天ゐも地よもの〜
ごのゐき只獨此悴の行衛も知れぬといふは我身よとりて不幸此上の人や侍るべきいのよも唐立ごの
詞此如く康親ぬしの拘問疑ふべきゐわらねば遠のらで悴ごの踪跡もしれ両家めでたふ愁眉を開く
時あるべし且夫迄は唐立をば其元ごの方ゐ預けまいらそるおりと再會の期を約し袖衣以下奴隷許
多を俱し下毛野よとそ下向ける却說平資盛い平家の威勢盛おるゐしたごのひ公卿殿上人へ對し失
體おる遏止澤おりしのゞ忽ち罪せられて嘉應二年伊勢此國へ配流し玉ひけれゞ爲祐も粮糧とお

り詮術あく奈何はせんと思ひけるごとても斯あるうへは毒を喰はゞ皿をねぶれといへる諺ざれごとく彼半縷約ある袖衣を盗を奈して東國へ走らゞやと竊ふその動靜を窺ふよ彼いはや前月金貫橘次といへる素封家よ身を購はれて吾妻ののゐへ下りしと聞より且呆れ且悲れども詮術あく從來獨住れ心易さは些れ家財を沾却して路費とあし父ご所縁下毛ある高野の庄の邊りよ在と仄ゝ聞しを便りよして遥々とこそはくだりける

當時前國ゝ記を辨慶穢山を下て東行せし時と同頃れ物語としるべし

第六回

破落戸詐りの計策を以て刼を誘ふ
富翁便無者を憐んで客を留む

さる程ゝ美佐崎太郎爲祐はゆき〳〵て下毛野高野の庄よいゐり知音を尋ねしよ其人いはや二三年あとよ死去て其跡だよ定あらぎと聞へしゝゞ憑む樹下雨漏る〳〵こ〳〵ちして忽ち進退爰よ極り奈何はせんと宵在茶肆よ立よりて臂打懸澁茶を乞ふて是を吃し少時勞れを晴らし東行西行思ひめぐらし居ゐる適ら向ひの方より歩行來る一群あり前よそ〳〵そしは年齢耳順余と見て奈何ゝも富有ある人とおぼし夫よ從ふ一個の若女兒は小星にてやらんぎらん年米廿歳よも充てぎ彩麗衣を重襲て蘭奢の薫四下を拂ふて許多れ侍女ゝ傅かれ其他奴婢多く誘ひて今太郎ご憩ひたる床几の前を行過るよ原來色好の爲祐忽ち蘭奢の薫に鼻をうゞつゝ斯る竪苦の中ゝも不圖頭を擡げて其個を見るよ是正よ都ゝて二世と誓し白拍子袖衣よて面りけれゞ愕然として大きよ驚き遣奴昔時の約ゝそきむ橘内とやらんご側妾とありしてそ易ならぬ寵や妓女よ戀ゝし寶をもて戀とす

と故人れ語も今ぞ思るよし〳〵此上は跡追蒐て橘内共所殺し我憤慣をはらさんか否々這計略極めて拙し彼又宵恨を返すといふのみよして彼よ損ありて我よ德ゝし爾はいへ此儘よして打捨ゝかんも余りゝ口惜く且大丈夫の所爲よゝらぎと右さま左さま思ひめぐらしつ〳〵茶肆をいで〳〵歩行日脚も頓て脯時屠所ゝ近く心地しつ係る適ら向ひより來る一個漢行違ふさまよ太郎ご刀の柄にさげたる燧帒を拿て逃出さんとそるをそかさぎ其首筋を捉へおのれ白晝我燧帒を奪いんとすることそ臍太けれいで汝ご首をはねて旅客の後の愁ひをはろふべきぞといふよ彼須利は面色土の如くゝして只だ放し玉へ〳〵と戰慄より外ゝし太郎いこれ行粧を視て嘲笑ひ扨も汝い須利をゝそゝ似合はざる肝れさ〳〵やのゝる奴のゝ今我汝ご命を助け大金を得る事を敎ゆべきごの我いふとを用ひてつとめて事をゝしはてんや奈何ゝといふよ須利い大ひよ喜こび揑と大地よ平身していふやう我儕這邊れ者ゝるご素より袁彥道を好を酒よ耽り色ゝ溺る〳〵を以て親しき一族も疎をはて誰ゝりて憐れむ者ゝく詮術盡きて遠近を徘徊して人れ懷中の物を盜これを市よ鬻きて其の日の飲食よかへしご程ゝく其業よ熟しける程ゝく徒黨者我をさして白日鼠れ鳶六と綽名しつされゞ終に今日れごとくゝくれを取りし事ゝし此上ゝ命を助け金儲けれ事を敎へ玉はんとゝらばいのゝる辛苦ものかい虎穴よ入らぎんゞ爭ゝの虎子の得んと故人の格言よくも悟りはべるゝし

と最信だちて聞ふるゝ爲祐い再び鳶六ゝ向ひ爾る心ゝらゞ言聞さん近頃當國に來りし洛三條の金商客橘内といふ者こそ當世無双豪富にして多くの金銀を貯はふるものゝり我彼を一刼ゝやして其資財を奪ひ取んと思ふゝ汝これゝ組そべきや否やといふ鳶六これを聞て呵々と笑ひ我儕も粗橘内ご事を知るといへども彼い從者數多ゝり然ればゝそ今世よ名たゝる熊坂殿をはじめ壬生れ小猿摺針太郎ゝどいふ盜柘張角よもまさりし大賊そら手ざし世ざるよ我儕ご如き小盜賊の爭

の手さしのあるべきや道事のまい兎し玉へかしと舌を卷て怖る〳〵ゑ爲祐い掌を拍て大ひゐ笑ひ
○偖々汝い心ハ狹き事をいふ奴かあ今橘内い夥ハ從者ありとも何ぞ爾迄懼る〳〵ゐ足らんや我別ゐ
計略あり其計略をほどことゐい彼ごの自筆の書翰を得ざれば計を行ひ難し汝奈何ゑもして五三日
のうちゐ彼ごの燧袋を奪て我ゑ得さしあば夫ゑ付て施すべき妙策有り汝よく此一條をあし得ん
やといふと鳶六聞て然ばゐりの事をあさんい最易し我儕是迄人ハ懷ろの物をとり又腰ゑ提ゐる
物を奪ふとい唯袋の物を取るごとく竟ゑ一度も不覺をとりし事あし今烏の過失い全く千慮の一
失ゐして實ゑ君ごの洪福のいゐを所ありと最而あげに見もるゑぞ太郎い打點頭然らば某ハ日迄ゑ
爲課て云々の所まで携へ來るべしその上には我別ゑ妙策ありとて堅く約して立別れ爲祐い邊
り近き逆旅ゑ在て鳶六ごの音信を待ほどゐ頓て其日ゑもありければ按のごとく一箇の燧袋を携へ
來て太郎ごの前ゑさしおき日外囑托給へる橘内ごの燧袋をば難あく盜を取りて侍るゐまよし中を展
檢給へと最誇貌ゑ述るゑぞ太郎い頻りに其伎ゐ長たるをた〳〵つ〳〵燧袋を開て其内を見るに印
形あり且黃金を貸たる劵文又自筆ハ書翰幾枚もあり太郎い是を見て再び白日鼠ゑ向ひこれを手
ゑ入らる〳〵上い忽ち大金を得んと最易ゐりされど人ハ耳い壁ゑあり石ハものいふ世ハ中ゑ爰ゑ
て浮々その計を商議せんはもれ聞ん恐れあれば人跡はあれたる方ゐいもきて緩々と相譚べしと
いふ鳶六聞て尤と同し前に立て逆旅をいで人あき方ゑ行ゑ傍らゑ古びゐる一個の草井戸在り太
郎はこれを見るより心のうちゑ點頭足を揚て後方より鳶六ごの油斷を見すまし忽地彼古井ゑ撲地
と蹴落しければ白日鼠は阿呀と叫もゐへゐ遣上らんとそるひまゐ爲祐は四下ゑ在合ふ手頃の石
を打こゑ〳〵遂ゐ鳶六を埋殺し莞爾と笑ふて素ハ舍りゐ返りぬ此一件は都て橘内ごの燧袋を手ゑ
入て彼家ゐいりこまんといふ太郎ごの姦計圖をはづさゐ首尾よく計成しのば心中大きゑ悅び頓ゐ
行裝と〳〵のへて橘内ごの家を訪ふゑ聞しゑまさる家居のさま最奇麗あるゑ太郎いやごのて裏ゑ入て
案内を乞ふに一個ハ青侍ひ立出て何處よりぞといふ當時爲祐い禮を厚ふしていへらく我儕は素
洛陽の者あるごの幼稚して父母を亡ひ只一個何某ハ君ゑ仕へ居りしごの同僚ハ讒言ゑ忽よるべあき
身とありしゐ日頃交り深き友のいへるい下野國高野の庄といふ處に云々といふ人あり足下此人
ハ許ゐ至り身の落着を計り給へと紹介の書翰を遞與し玉へり小子其厚志を歡び聞へ頓て書翰を
燧袋ゑおさめ當國へ下り其人を尋ねんとせしゐ昨日不圖劫ハ爲ゐひうち袋を奪いれたりこは口
惜と後追蒐て直ゐ劫を捕らへ懷中をこのいさぐるゐ果ゐて燧袋あり取返して這奴を二ッ三ッ打懲
らし放ちやりぬ斯て舍りゑ返りて後ゐよく〳〵是を見るゑ其色い似ゐれど全く我盜れゐる物ゑ
あらぞ茲ゐおゐて大ゑ驚きそハ中を點檢するゑ印形あり且劵文何枚もありて阿家翁の姓名を記
したれば始て其麁忽を悔を大切ある紹介の書翰を失ひたればよしやその人を尋ね行て實を以て
告るとも世い戰國の時ゐして敵の間者も多ゐるゐ誰のこれを實として我儕を留る者あらんや然
らんにい尋ね行とも其詮あし爾とて都へ歸らんとそるゑ小葉うち枯らしたる退糧ハ事あれば腰
纏ハ貯へ茲ゑ盡て進退既ゐ極れりこい我身ハ上ハ薄命を說のをゑして貴家の預らざる所あれど
我身ゐ付て又他のうへを想ひめぐらそゑ這ひうち袋を失ひ玉はゞこそ貴家ゐも困じ玉いめと今
烏しも故意々々持來り返しまひらそるありよく中改めて受取玉ひねと實しやのゐ語りて燧袋を
一遞與そゑぞ取次ハ侍は少刻待たせ玉へゐし主翁ゑ其由を稟そべしとて奥ゑ入りしごの頓て出來り
とあたへといふゑ太郎いおづ〳〵彼青侍ゑしゐごのひ奥ゐ入れば橘内出迎へて客廳ゐ招じ且其人

品を見るゝ色白く眼秀頗ふる容貌堂々たる好男子ありけれゞ橘内ハ心中十分ゝ彼を愛する意生じていへりけるハ昨日不憶須利の爲ゝ這燧袋を奪ハれ奈何ハせんと當惑せし適らよくこそ持來り玉ふものゝあ今取次ぬ者ゞ話ゝ聞ゞ足下遙々此國へ下りそ此紹介の書翰さへうしあひて進退茲ゝ極り玉ふと聞くゝ最悼ましく想ひ侍べれり我儕も原ハ都の生れあり都と聞さへ愛藝けれ一樹の蔭一河の流れも他生の縁と成もれおら苦しのら世ハ我儕ゞ家に逗留して寛々と其人を尋ね靜ゝそ此緣故を告あばよしや書翰ハ失ふとも容られざるといふ事あらんやと最憑もしく聞こゆるゝぞ太郎ハ計策既ゝ成れりと心中ゝ喜び陽ゝハまそ〳〵禮を正しふしてそ此厚志の忝けあきよしをいらへ其時より橘内の家ゝ止りよろづ信やゝ動止夙ゝ起夜半ゝ寢常住座臥心を用ひて内外のものゝ媚諂ふ程ゝ橘内ハ深くよろこび淑人を得たりと暇ある毎ゝハ言葉敵として古今を談ぜるゝ太郎又よく和漢の書ゝ通じ辯舌滑々として水の下流ゝ付ゞ如く物を書ゝそれゞ草書拙あらぬかゝりけれゞ今ハ太郎あくてあらざるほどゝありければ爲祐ハ爲濟たりと一日袖衣ゞ四下ゝひとあき時を物色窺ゝ低言やうハ汝我生てハ室を同し死してハ穴を同ふせんと誓ひつるゝ疾くも汝其擔ひゝ反き這家ゝ阿翁橘内ゝ身を委ね我儕ゞ許へハ一言の應へもあく此下毛ゝ下り給ふとは餘りといへば情あし忽ち金銀ゝ眼くらミて今ゝ行狀は奈何ぞや然はれ我儕ハ往昔の盟ひを忘れぬもしやと思ふ心より偽計を設け這家ゝ入りこみ阿翁の橘内ハいふも更あり其他奴婢小厠ゝ至るまで阿り諂ひ其心ゝあわんとそる苦心幾許ぞやおれ皆汝ゝそこと涙あごらゝ怨ぜるゝ袖衣も是を聞て最面あげゝ斯いへゞ何とやらん言譯ごましく思されんゞ都ゝ在りし時兩個ゞ中ゝ關をそへられ遇とさへも絶々ゝありし適々這家の主翁橘内ハ黄金ゝ富ゑる者あれゞ主ゞ爲ゝも成んのと心ゝもあらて年闌たる橘内ゝしゑゞひ艶言を以て彼を誘ひしのゞ竟ゝ妾ゞ身を購ふゝいゑりこは妾ゞ計事爲課ぬと主のたへ云々のよしを告しらさんと思ふまもあく東國へ誘はれしゆへ事ゝ頗末をつぐるゝよしあく意にこゝろあら世も此月日を過せり然るゝ主も亦當國ゝ吟行妾ゞ爲ゝいくその患苦を盡して當家へ入りこゝ給へり言合さねゞ其志ハ是一ツあり此上ハ良君ハ陽ゝいよ〳〵仁惠を專らとして内外の者をあづけ妾ハまゑ陰ゝありて橘内を計り時を得て彼を斃し良君と兩個快よく樂ゝをとらんと遠ゝあらゝ努怠りて悟られ給ひぞと囁くゝぞ奸知ゝたけし太郎爲祐疾くも其心を得て打頭き兩人久しく閑談せんハ人ゝ怪しむべきゝ第一ありさらば其許もつとめて其計ゝ怠り給ひぞと更に課し合せ河清を俟ゝける

第七回

水四郎病床ゝ古きを訟く
爲祐林下ゝ雙の寶と得る

爭ハハ想ひ有りとも知らそべきと詠し下毛野國ゝある室ゝ八島の邊りゝ中禪の水四郎と云者有り彼ハ若き時より俠氣の者ゝして列國ゝ漫行し强をくぢき弱を助くる性質ゝありけるゝ今ハ年老て刑嬉を亡び唯獨の男子を持り其名を橘次年廿歳許ゝして能父ゝ事て孝あり然れども家窮て貧く加旃らゝ水四郎ハ先頃より重病ゝ臥して起居そら自由ゝらねば橘次ハ甲斐〳〵敷日毎ゝ遠近人ゝ雇れて僅ゝ價を得て父を養ふものから已ハ都て麁食を喰らひ父ゝハ日比より好る物を調へて進め其身ハ寒き折も裝短き朽の衣一重を着るのミゝあれゞ水四郎ゝハ衣襖何くゝとゝあく寒のらぬ程ゝ手當しつ其孝行尊閑ゝらぬ者ゝら人擧つて譽ざるハゝあし斯て一日例ゝごとく橘次は星を戴くより起いで〳〵父ゝ食事ゝ儲け殘るゝゑゝあくゝあしはて〳〵夫より市ゝ赴き人ゝ雇れ些ゝ錢を得て

黄昏過る比又父ごの夕食の菜よもと青物生魚此類を覓て遽わしく立歸るを水四郎い病床より其爲体を見てやよ橘次よ今鳥いいつよりも遅ごのりしも〳〵奈何はせんと案じつるゐ能こそ歸り來りつれ茶も地爐よゐけて有れば大方い温もりてやゐらんぞらん物ほしくいゐかりしのといふ詞さへこゝわぐる咳にまぐれて苦げゐる形相を視て遽はしく草鞋脛巾を解棄つ〳〵這上りて脊ゐ撫さゝり父涉よ按じ給ひぞ今烏しも雇いれし宅い殊よ情深き人よて父上ごの綜を語り侍りしのはそは最便ゐんとて價も極しよりも多く拿らゐ給ひそごの上よ夕飯さへ喰べて行ねとて鬼の牙見る如き飯よ干鮭そへて賜ひつれは推辯も欠禮よ似たるも〳〵翌朝飯の分迄も食畳しつればゐの〳〵よ苦しき迄よ腹はよけれ父涉は家よ獨在てとこそ淋しくおわしけん是樹はせ此鮮けき魚さへも其家主人の賜ひしゐりこれよて夕飯よとうべ玉へ炙りもやせん烹もやせんとのざる詞の花の香の山茶も出花と一つまと入れたる欠瓦鐺用ゐき口も病父よ貧苦を見せじ知られじ僞る心を水四郎推量それど孝心を無足ゐせじと打點頭いとよろこへる而持しつ誠よ人ゐ人鬼いゐしとやらん世の諺ざも虛しゐらぜ爾る家ゐるい其許ごの孝を天の感應し玉ふゐめり孟宗ごの荀王祥ごの鯉其例最多ゐりさわれ我病い所謂老病ゐして若ゐりし折此腕立力業ごの今い這身の仇とゐりつ斯行歩そら自由ゐらと居ゐごら食ふ身を以て美味を食さい病を增ん足下い日毎よ身をつゐへば隨分ともよ魚肉を嗜と氣力をつけぜい勞やせん我儕ごの事を念とせすよく〳〵其身を保養せよと聞て橘次い首を打ふり否々我い年若ければ疎食を喰ひ身をつゐへばとて慚しとも覺へざれど父涉い門へも出玉はぜ竟日獨り留守し玉へばさこそ退屈し玉ふらめ酒ゐりとも飲玉ひて鬱をはらし玉はそば愈々病も重りゐんとれ烹割してまいらせんと言つ〳〵下りて流下ゐる俎板取て庖丁そる魚よりも尙水四郎い吾子ごの切ゐる誠心よ我腹を斷る〳〵思ひはふり落る涙を拂ひやをら病床を膝行いで〳〵橘次ごの手を取て無理上座ゐ押直せば橘次い一切其心を得ぜ爺涉よこい何事をゐおし給ふと最不審氣ゐる面体ゐるよ當時水四郎い橘次よ向ひ足下我儕ごのとき匹夫下賤の者を實の父と思ひ給ふものゐら斯い大切よも給ふ事嬉しとも忝けゐしもとゐの〳〵辞ゐ靈し難くはべれど寔足下い我骨肉を分し子よゐらぜ疾ゐも這縛を語り聞そへく思ひつれば愚ゐる心ゐい若や實を告るゐら隔る心の出もやせんと今日までい包ゐれど今こそ實を告るぞのし思ひ出ぞも廿年久安の比よや有りけんと京師ゐおもひぞ用事はて〳〵故鄉へ立歸らんとせし適ら俄比ゐ火起りて風烈しく猛火燄んよ燃ゐごるよ我儕い頻りよ道をいそげば焰此中をかいくゞり辛ふして三條此邊を過りしごとゐる朱門此下の溝の中よ二才計りと思しき兒此轉落て泣叫ぶ形勢今や燒死へう見もるよいとおしく其儘拾ひあげたれど火の鎭るを待て其親族をゐづね嬰兒を歸さん暇ゐく且吾儕も年來子を欲しと思ひ居たる折ゐれば是天より授玉ふ子ゐらめと無端よ嬉しく懷よおしいれて其處を去り其夜の舍りゐつきて貰ひ乳ゐどしつ〳〵熟々其兒を見るゐ肌の守ゐり裏をゐらゐむれば花橘と銘を誌せし一木を治め且へそ此緒の書誌よ金賣橘内ごの一子橘次と記し又某歳某日深柵生女唐立と襁褓此うちより約婚としるしゐれば於茲我儕はじめて駭き扨い世よ名ゐ〳〵る金賣橘内ぬしの一子よておいせしか夫と知らねば庸人此子と思ふも〳〵これ幸ひ養育ばやと誘ひしごの由緒ゐる人の子としりて還さるい不仁ゐりさりとて都いはや遠ざのりければ今更彼處へ戻りて還さんいいよ

〳〵以て難義ゐりこい奈何よしてよのりゐんと左さま右さま思ひめぐらしけるごの屹と心づきのあれま〳〵よして打捨をゐば焚死そへのりしを助ゐれば一旦下野へ誘ひ行折を見合せ都へ登り事

の頓末を告て還しまいらするとも遅からじと肚裏に思案しつそれより行路々々にて貰乳しつ〜下野へ立歸り假に我子と披露して其名も僅に樹の字を吉にのへしも行末を祝して付けし名詮自性さい然りあごから其後は都へ至る便おくて思はぎ數多の年を經たり足下へ委細をしり給はねば我儕を實の父と心得斯正首々々しく介抱し給ふ程我儕はあを苦しく侍るのし兎ても角ても老來て行歩さへ心に任せざる世の癈人一日も疾く黄泉に赴のんこそ願はしき身れ今日よりへ藥も飲じ翌よりもこれ我儕眼を閉しから足下急ぎ都へ登り守護の名香を證に親子の名乗せば今日の襤褸へ翌の錦忽地富貴の身となるへし斯る富有れ人の子を貧苦の中にあらせしへ我心の過失ありと云了つて破葛籠れ底をのいさぐりて一箇の守袋を拿出して與るにぞ吉次へはじめて我素性を聞且驚き且喜び水四郎に向ひ扨へ我儕へ嘗に聞し金賣樹内ご子にてありけるにあ縱ひ實父へ誰にもせよ已に燒死へのりしを助けられ此年來養育にあづのりし大恩須彌あほひく〜蒼海も却て淺し爭の疎畧にあるへきぞと尚正首ある詞あいよ〜水四郎へ感激し斯る孝子を這年月行衛もあれぎ亡ひし樹内ぬしご心れ中剛こそ便おく思しつらめ世に類おき富家れ子と生る〜果報を持あごら世にも稀ある貧困の我儕ご家に成長不幸へこれ皆我科也もるし給へと打嘲つあめりごちある親と子ご話あのばへ畔道のあるきを草履で飛々に歩來るへ其名のを唐天竺を一ッにせし伊場撫雀といふ醫師勿体作る咳きのみ國手めのして座に着へ吉次へ慌て塵打拂ひまづ此方へと招ぞれへ水四郎ご邊りへすり依て容体を聞脉を試を眉を顰て吉次に向ひ跡の月のら見る時へ顔ばせもよく元氣も増りさいへ年老給ひぬれへ人參を用ひそんへ頓に治る事難し彼一藥へ價尊くはへるもへ我儕もこれを貯へぎ其許父の病を治したくへ金五六両才覺おして遇與給へ爾あらへ其

極品を選求めて用ひあんと聞く吉次へ頭を搔き見給ふ如く我儕ご家に貧しく翌れ糧に貯はふべき力さへあき痩世帶只一枚の金ありとも頓に調へ難き身に五枚六ひらをいのでの得んと當惑面に顯るゝに水四郎へ聞も敢ぎ吉次に心を苦しむる事あかれ嚮にもいふごとく生存命て甲斐あき這身壁へ藥へ呑ぎとも時至りあへ本復せん宵打捨ておきねのしといへど吉次へ承ひのぎ否々子として親の病を見てあど徒らにそこへきにきことあれと今父ご遺與せし實父れ紀念ある守袋れうちよりも伽羅一株を取り出て伊場ご前にさし置てあれへ故在りて持傳へとへる花樹あといふ世にも稀ある名木にして身にも壽にものへ難き寶あれど時れ用へ鼻もそぐ父ご大事の一命にのるる寶の有べきや這名木を沾却藥れ代にといわせもてへぎ水四郎へ聲にあけて否其名木へ手放しごのたし其許ご父母の遺物にて父子再會の証とある世に大切の品あれへ日外或人にれを知り五十金に聘はんと言ひしを誰にもるさいりしを我儕ご藥の代に賣らへ足下ご實父へ義理ゐ〜ぎと押とゝむれど吉次へきあぎよしや實父の紀念でも養父の命を救ふへき藥の代價に賣あす誰かこれを不可ありといへん是非とも賣ていあうらせじと義理と孝とに親と子ご爭ひはてぬ折のらに嚮より外面に伺ふ色漢その名木へ我儕ご買んと言つ〜やをら裏に入るに吉次へ驚き且其人を見るに是高非屋利九郎といへる者あり這利九郎は些の貯錄あるに任せ貧しき人に金銀を貸與へ其利を貪りて世を渡る慳貪邪見の白癈あり從來斯る者の性として慈悲の心露計もおく日の一日も違へへ大く罵り辱しめ家の内の調度何にまれ理不盡に携へ歸り官府へ訟へて獄屋に繫ごのせあどそれど人皆黄金の威光にをされ齒をくひあばれど術もおし吉次も去る比彼ご金を借りるるごはや其返すへき程も過ぬれば日毎に來りて責はたるご急ありける今鳥とも利九郎は茲に

來の〜りて一五一十を立聞て彼名木の高價なる品と聞これを安く買落して又利を得んと伎倆
て吉次に向ひて言ふ樣は其身の〜る高金ありるへき品を持あごら我僻か貸たる金を歸さゞる
は腹惡けれされど我僻は又佛心ありて今其身の孝心を聞其名木とやらんを覓め其身の望をとげさ
せんやうい思へど五十金此六十金の爾う高金には買難し廿金あらんには買求め其うちには去此
貸たる五両此金の元利を引き殘は其身よまいらせんと云つ〜矢庭に彼名木を掠奪し十有余金に
券を添へ吉次ご邊へさしをけゞ吉次はこれを見て再び利九郎に向ひ這個名木は故有て身よも離
ふものへごのたき大切此品あれど父ご病の藥を覓めんゐめあれゞありされど五十金にそら賣らざ
りし品を僅の廿金には賣り難し且是を質として廿金を貸給へ後日に金を調へゞ其名木をゞ歸し
給ひてんやといふを聞て利九郎は這奴所詮斯貧しきあるにて爭の頓に廿金を調ひ得べきまづ彼
ごいふよまのせて其期月の切を待て我品と爲へしと肚裏に思案しつそは左も右もすべけれど質
とあらゞ凡そ百日を限て其うちに金を調ひ歸し給へゞは這名木は我物ありよく其心を得給ふべ
しと云すて〜伽羅を懷ろに押入て遽だしくも出去りぬ吉次は不憶も拾枚余の金を得て喜ぶこと
限なく頓に其うち五枚を燕雀に遞與せゞ燕雀は打點頭頻りに其心操を賞し金を携へて立歸りぬ
却説利九郎は吉次を嚇して花橘を獲て心中大きに喜び急ぎ吾家をさして還らんとせし途にて日
比隔あき友なる尼樹屋韓三といへる藥商客に遇り利九郎斯と見るより韓三を呼のけて今日の始
末を語り彼花橘をとりいだして見せしむるに韓三い左見左見て大に驚きこい世に稀なる名木な
れゞ若當人有て高貴此人に沽らゞ百金此物い有りぬべけれど拾貫にしても四十金や五十金にい
ありぬべしと聞て利九郎い大に歡び我此名木を唯廿両の質にとれど迚も受る事でいなし爾ある

ときい二三拾の利分を獲い目前あり且前祝に一盃を傾くべしとて韓三を誘ひ一軒此酒肆に入り
更に數盃を傾て韓三に別れ利九郎は我家に立還らんとせしが當時忽地十二分の醉を發し一歩は
高く一歩はひく〜蹌々踉々としてそ來りしに前程ある木の下に誰たき捨し野火ありけり爰あん
總社村といふ處にして林のうちに總社明神此社あり是下毛野國の總社也其前に室の八島あり利
九郎は今這處へ來て風景うるはしく風そや〜と吹て快よきにぞ忽ち木の下にやすらひ霎時醉
を醒さばやと爰の芝生に倒匐て遠近を眺め獨笑して居りまごの素より多の酒を飲ゐる事あればい
つ眠るともなく輾轉前後も知らぬ寐入りしご時うつるに從ひ颯と吹風の梢を鳴らしはら〜と
落る葉より寐入ゐる利九郎ご顏に手以てはらひ云と云つ〜寢返りて更
に生躰なりしご奈何はしけん懷より花橘の名木の轉ひ落て焚捨し野火の邊に入りたりけん
忽ち異香四方に薫じ馥郁としてあたりに充れど利九郎はなを覺へぬ財の聲はます〜高く熟睡
してぞいゐりける話說両頭分爰に又彼橘内ご許に寄食せし美佐崎太郎爲祐は此邊り農をも見ば
やとて麗のある空にうのれ出僻哥など詠て獨興にいりしのゝや夕陽西に傾くに驚き忽ち立歸ら
んとして此邊を過しに名香の薫り四林に充るを大きに怪しゝ霎時躊躇て四丁を視るに只在る樹
下に獨りの漢兒醉臥してありその傍に野火の焚さしゐる邊りにて得あれぬ薫の鼻を穿にぞ太郎
は不審立寄て倩々これを見るに案にたごはそ伽羅此一木此火の邊りにあるに扨は是ありと疾も推し遽はし
く手に取あげでこれを見るに案にたごはそ伽羅此一木にして而も包める紙に花橘と記しありけ
れゞ爲祐は見て且駭き且悅び扨は異香の薫じたるは這名木の業ありけり抑此漢奈何にして斯る
名木を所持せし者あらんと左見右見て躊躇居りけるに利九郎い這時漸々目覺て心付やをら身を

起して懐袂を數回のひさぐりて花橘は見へぬよ駭き只看い傍ゐ美佐崎ご彼名木を手まぐりゐる体を見て愕然として這奴他は熟睡せしを窺て懐ろゐせし物を拿るい必定偷兒ゐ極れり疾く此方へ遁與せといひさまよ奪ひとらんとするゐ爲祐も大ゐ怒り汝何者あれば吾をさして偷兒といふや吾儕い爰よ落てゐりしもゐ拾ひとれるゐりと遽はしく懐ゐ納んとそるよ利九郎益々恚り吾首より大切ある二十金といふ何堵を出して買求ゐるものを奪ひとらんとそるもゐ偷兒といひしい吾過ちゐわらせと强て拿皈さんとするよ太郎い猶遁與さしと其手首を拂ひ逃行んとするを利九郎い太郎ごの袂を確と捕へ取戻さんとそるゐ太郎い大ゐ怒り這奴と云ひさま氷の如き刃引抜き唯一刀に斫殺し後白波と逃失せたり

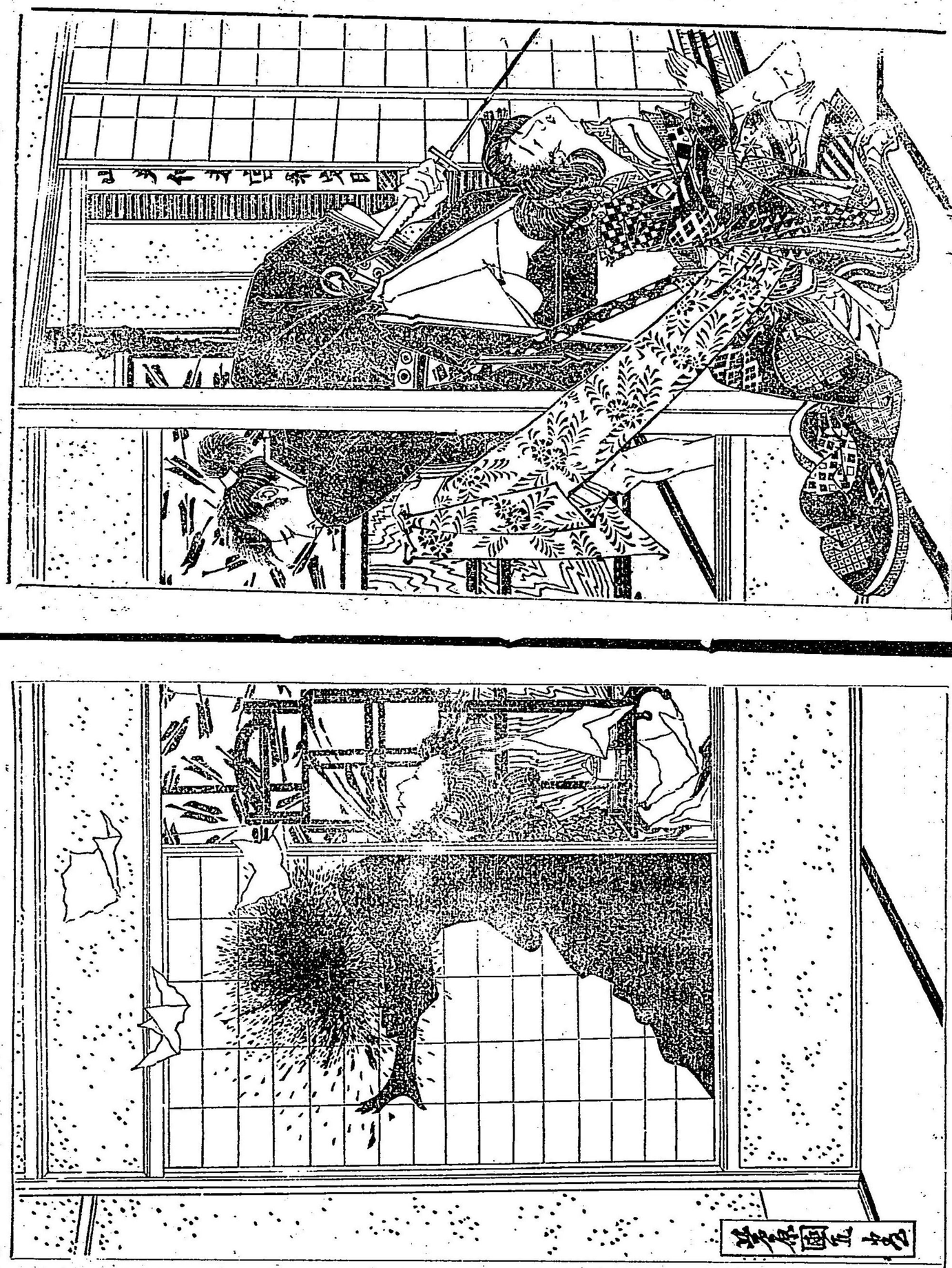
第八回

一炷は名香骨肉を誤ち
非道は白刃三性を害そ

美佐崎爲祐い其夜さり家に還り竊ゐ袖衣よ今烏は大畧を語り名香と黄金は二種を見そるよ袖衣はこれを聞て少刻沈吟していたりしご稍有て太郎に向ひ良君實よ發跡給ふべき河清れり喜給へといふ太郎は一切其心をしらぜ故を問ふよ袖衣いへらく良君未だ近比此家ゐ來り給へば其詳ゐるを知り玉ふまじけれと阿翁橘内ぬし常よ妾ゐ語玉ふよい原來吾一個の男兒ゐりしごの二才の歳地魚は災ひはこざりより行衛しれぜ然はれ安部の康親ぬしごの考よい廿歳を過て必ぜ環會へしと宣ひしも僕ふれいとや廿歳計よゐりぬれい若や遠らで實は悴ゐ遭事は有んもはゐられぜ彼ゐい世よ類ゐき花橘といふ名香ゐ臍緒は書附を添おきたれいよしや顔い知ぜとも香の薫を證ゐして名乗遇んと這年月心を付て搜せしのどそれのと思ふ物もゐしと旦暮歎息し玉ひしごの扨い這香を嗜と持し其主ゐ此家の主ごの實は子ゐる橘次とやらよてや有んぜらん君い計らぜ這名木を得玉ふ上い云々計ひ玉ひゐい君を實の子と思ん然んゐは永く這家よ足を留玉のとゐらぜ主橘内世を去い良君と妾生涯歡樂を極ん事易ゐるべし秘して人よゐまらひ玉ひそと最こまやのゐ説示そゐ太郎い欣然として大よ喜び我儕詐りは計略を以て首尾よく此家よ入りこと又辞を巧をよて主翁の心よかゐふといへども從來久戀は家よあらねいひやしく止る事のたくこれは心苦しく思ひゐゐるゐ斯不憶この名木を得ると偏ゐ天の賜にして月氷上人其許と吾良縁をむすばしめ玉ふもはゐめりと両個竊よ額を突合して閑談數刻よ及ぶを知る人更よゐのりける扨も頃い既ゐ夏の半よして五月雨降つゞきていとゞ物淋しきよ橘内い獨小屋のうちよ在て前程往時を思ひつゞくるよ橘次踪跡ゐくゐりてはや廿年にゐまりぬれど今よ於て其在家の知れざるい倘や亡人の數よ入りもやしつる斯吾家富て何くらゐらねど白銀も黄金も玉も子ゐ增ぜ寶ゐへてゐしと連りゐ懐舊の涙せきゐへぬ適々何處ともゐく名香の薫り紛々として鼻をうごつよ橘内い眉を顰め意中よ想らく這薫りい嘗べやうもゐき我家ゐ秘藏せし花橘よ違はぜ彼香い予家の外よ又ゐるべきいはれゐきよ何人のこれを薫らそよやと居室を立いでゝ其香を的よゐづね行よ彼美佐崎爲祐ごの部家は邊りゐるゐわら不審と紙門のそきより窺ひ見るよ太郎は壁ゐ向ひ机は上よ香を焚き一心不乱ゐ念じゐる爲躰つゞゝ心得ごのたく橘内は徐よ紙門をおし開きて裏よ入る音に太郎は後方を見返て猛よ容を改め此は家翁の刀禰自ら爰に來玉ひしい何等の示ぜ事ありやと額の汗を押拭ふゐ橘内い當時太郎よ打むのひ縡卒爾ゐい似たれども汝よ問ふべき事こそあれ我儕今烏適々半日の閑を得て獨小室よとじ籠り偶然として行末越方は事を思つゞけ連りよ歎息せし折ゐら心覺への名

木の薫り最不審小室を立出て不覺よ爰へ來て見れば正しく香の薫りこそ這小室ゆ裏あるにまと〳〵不審はれやらねば目前問詰めて疑念を晴すよ志のじと思ひ偖おそ其許を咳せり倘や此香ゆ橘を花橘と呼びて是ゆ爾々の守袋と箇樣〳〵の書付ご添へてはあらざりしの抑も汝奈何ゆしてこれを持傳へ玉ふよや緣故を詳よ語りて玉はれかしと問はれて太郎い眉を顰め奈何ゆも此香の名い花橘と呼びて我亡父母の紀念あれば大事ゆかけよと乳母何ごしごのいへりしい今將耳ゆ底ゆ殘りてはべり嚮よ爰へ來りし時聞へまひらせしごとくまだ頑是あきその頃よ父母ゆわのれてそれよりも成長るまで遠近へ呻吟あればそのうちゆ守袋も書物も何國へか亡ひしものあらめ然ば此一木をば父とも母ともおもほへて戀しき折はくやらして僅ゆ想いを散ぜるれと刀禰い又奈何よして此名香の名を花橘と知り玉ふい最不審はべるのしと聞より橘内小膝をそ〳〵め偖い其許い這年來尋ね覓し我子也とばかりよてい合點はもくまじ吾儕元來一個男兒有りしごの二才の歳池魚の災ひによつて行衛しれぜ尤其當時陰陽博士安部の康親ぬしの志めしよい二十歳を過て慈あく環會べきよしを宣へり素よりそれ兒の守袋の裏ゆい我手づごら認めるた臍緒れ書付ゆ是あるる花橘を添たるおそ慥ある証據あれ是よ因て倩々思ふよ吾家池魚れ禍ひのみぎり其許養親の行か〳〵りあどして焔れ中よ救ひとりて我兒とおし育あげし後實を以て告ざりしい隔る心の出もやせんと故意それとは告ざりしものあらん其許洛陽の產と云のそあらぜ花橘を處持そるのらい裏ゆあき我子の橘次ある事明けし康親ぬしの勘ごの〳〵爰よ符合する上のらい何の疑ふべきゆらぜと年頃の愁眉を開き急ゆ袖衣を呼て云々れ由を語り親子の緣盡そして今日はからぜも慈あく遇見る事れ嬉しけれど悅び勇む爲体を見よ袖衣い太郎と顏見合心中ゆ笑を含ま計略の成を歡ぶとへど

も陽よい態と駭けるさまをおし頻りゆ太郎ごの才色のそぐれあるを稱美そるよ橘内い一點ばかりも是等れ事を知らねばゆいちゆ吉日良辰をあらまと家隸們を聚合て一伍一什を語り聞せ此日より太郎をして橘次と名を改めさせ偖云樣今迄い其委事はいはざりしごの實汝よは襁褓のうちより字づけせし配ゆりそは當國深栖の領主深栖陵之助光重と云人の小孃よして其齡は其許と同じく名を唐立と呼つ縹致といひ心緒と云又類あき處女あれば直ゆ此由を洛陽よ告遣頓よ呼下して婚姻を取結ぶべし喜び玉へと始て聞太郎爲祐其座ゆありわふ袖衣と目を見合し詞あく默然として居しごの女心よ袖衣い疾慾へ兼柳眉を逆立眼を見はり太郎ごの方を努目て既よ口をひらのんとそる行粧あるゆ爲祐はやくも其心を推し氣觸を見せじと咳きゆ打まぎらして再び橘内よ向ひ宣ふ處い爾る辭あごら男子三十よして室ありとい禮の敬へ吾儕三十よい程もあり且騷しき世の中あるよ女れ身を獨り都より呼下さん事道も遙けきよ容易辭よあらじ且婚姻れ義い緩々と計り玉へと左右よ托して推辭ども橘内い敢て赦さぜ否々爾よゆらぜ唐立既に年も二十歳よ余れり這年來其許の爲よ苦節を守り何方へも嫁せぜ雪の操を全せし適れ貞女れ唐立にいつ迄の物を思はそべき其許ごの所在の知れし上い少しも早く婚姻をと〳〵のへ疾初孫の顏を視て我們ご心を休め共侶ゆ孝行憑はべるのしと余義あき辭ゆ爲祐い再び返ぜ詞あく且假ゆ領諾して其座を退ぬ斯て袖衣い躍橘次の太郎ごの傍らよ人あき時を見ていふやう其許奈何あれば往昔の言を忘れ都女郎れ唐立ぬしとやらんと婚姻をおし玉ふゆ心よや實ゆ男れ心と秋れ空と賴ごのああき諺ざも軀よつまさをてはべるかしと或ひい嘆き或い怒り物狂はしき形勢よ太郎い殆と諫のねてその脊をのいさぜり否吾とても其許を退ていのでゆ仇女と枕をのべさんこと思ひもよらぜさわれ斯れ時宜よ及びたる上い



強てこれを固辞ゞ計よ計りし謀計の忽ち水の泡とあるべし是よりつて我思ふゝい先其唐立とやらんと婚姻して阿家翁よ疑をさけて後又東も西も綏のよ計策を施そゞきゝゝ其許必ゞ仍おき進止をして他人よ悟られ給ひぞ刀よのけて我其許をのけて骨て外心おしと天地ゝ誓て視せけれゞ袖衣も良心解て斯迄宣ふ辞よも詐りよゝゝあらじと尚行末の事おゞ何くれと相談ぬ斯てより太郎ゝ愈々我身を高ぶらゞ上を敬ひ下を憐む程ゝ誰有てこれを怪しむ者おく橘内こそ淑子を獲たりと談まぬもれゝおのりける賜る程よ橘内ゝ過頃太郎ごの我家よ來りし縡の首より花樹の名香れ奇特よてはのらゞも親子の名乗せし事又太郎ごの才色れ勝れたる事迄一伍一什書翰よまゝ〜め家れ老僕篤内と云者よ其心を得さし即日京洛へ登せけれゞ綾之助ゝ這書を披らき見て限りおく悦び頓て篤内を留めおきて管待し小娘よ斯と告しらせ不日下毛へ下すべけれゞ其許も其准備おし玉へと聞より唐立は年頃の願ひの叶ふを喜ぶゝつけても又父母ゝ別れて知らぬ國へ赴のんことの哀しく先立ものは涙おるに光重はこれを見て其許平居の志操ゝも似げおくおゞて斯嘆玉ふゞ總て女は家よゝるうちゝ父母を以て天とし既ゝ嫁するよ及んでゝ夫と天とすと斯らんうへゝ我們ごの事を念とせゞ夫橘次ゝいふも更おり舅橘内ぬしゝよく孝を尽し玉へ下野ゝ吾領地おれゞ他國へ赴くよふよゝゝあらゞ吾も遠のらゞ彼地へ下りて婿橘次よも對面せんと旅の調度殘るかたおくとゝゝせて篤内ゝ又吾家隷を添へて下野へこそ下しける斯て唐立ゝ心細くも知らぬ旅路よ赴けるごの日を經て下毛おる高野の庄ゝいたりければ橘内ごの悦び大のたおらゞ日を撰て婚姻を調はせんと其日を俟つ程よ是彼れ喜びを演んとて遠近の朋友橘内ごの家よ來訪して門外長者の車轍絶へゞ去る程ゝ聞橘次の爲祈ゝまづ彼字おる唐立ごの行粧を闘窺るよ將ゝ是翠袖雲環更よ人間ゝ有るべ

やうとも覺へざるゝ素より色好おる太郎爲祈忽ち魂ひを天外よ飛し吾都よ長成りて普く文君弄玉を視ゐれども未斯る美人よゝゝゝはのらゞ吾儕おゝる美婦人を妻よせんこそ願ふてもおき幸ありと意の中よ喜び婚姻の日を算へて待程に頓て其日ゝも至りけれゞ山海れ珍味を尽し洞房花燭の式おゐれ如く執行て橘次ゝ唐立を誘ひて巫山れ夢よ入るよ袖衣ゝ此形勢を見て妬きことおぎりおく心悪しとて衾引のつきて打臥しけれど闘しきゝゝとりまぎれて飭人もおきよ涙のこはふり落て獨り心をいゐめける斯て唐立ゝ橘次と夫婦中睦しく半年はのりの光陰をゝこせしごの思ふゝいまして夫ごの性質れ浮湖よして且荒淫おるを見て心れ中鬱々として樂まゞ從來禮義正しき女おれゞ夫婦別ありの敬へを守り畫ゝ苟且ゝも夫ごの邊りおんどへよらゞ橘内よつかゆる事最正首おり一日太郎ゝ獨り我部屋の中よ在て源氏伊勢物語おんどの文をくり繙とき其身を光君在五中將ゝ思ひよせて微笑いたりし折柄唐立ゝ手づから茶碗を奉て橘次ごほとり近くよつて茶を呈そるよ橘次ゝ斯と見るより讀さしたる文をゝいやりこゝ勿体おし吾儕いのおる神れ惠ゝて君れゞときき美人と枕席を俱ゝゝるのこの斯叮嚀おる管待よ預りまひらゝることゝ無越洪福おりせめて其報ひよゝ斯こそせめとやをら手を拿て引よせんとゝるをふり揶ひこゝ正おき事し玉ひぞ君と妾ゝ父母れ〇ゝし玉ひし緑よゝはべれど夫婦別ゝり爭の同席よ連りて戯れのたらゝ是正よ禽獸よ等し關雎ゝ樂んで淫せゞ悲んで傷らゞとの聞はべる君從來漢字をも知り聖賢の典をも紐學び玉へければかばのりの事ゝ妾ごの言ゞとも知しめしてありぬべしと言れて太郎ゝ應へもおく腋の下よ冷汗を流しきへもいりゐき風情おり左右ゝるうちゝ袖衣ゝ唐立ごのゐりよ見ぬよ這奴又太郎ごの傍へもきて侶共よ妾ごの事を譏てやわらんゞらん最前曖の出し時も彼等ごの所業おらめと怒氣胸中

お溢れて遽はよく太郎ご子舎の邊へ行て窺ふよ何やらん向ひてしめやのよ物語して居る爲体を視るより妬きこと限りおくいと荒らのお紙門を押ひらき裡よ入て両個を屹と白眼ゐ其許們い奈何親々の救せし女夫あればとて白晝斯よりそびて在らんい余りよ見苦し女い女とも思はるべけれど榻次ぬしご我物顔よ傍を放ち玉はざるい奈何ぞやと柳眉を逆立晋るお太郎は故意そら空吹とい袖衣ぱ前何事をの宣ふぞ生るおい室を同ふし死ていい穴を同ふそるこれを君子の本意といふ襤褸いうちより字づけして廿歳あまりの年を經て不思議よ環會しもの爭の疎略よあるべきやさらぬだよ糟糠ぬ妻い堂をおろさぞと聞それおもまして年來ぬ貞操節義よ酬んおいいのばおり大事おのけゐりとも其心緒お比べおば是九牛ご一毛おりと他まで媚る一言を聞より袖衣勃然として大ひよ憤り焔のごとき息を吻とつきわお怨めし扱い是迄海山を誓し事も僞りよおよおそれとても増花よ見のへられて何樂しを東ても斯ても捨られし身い怨ひよ存命へていとしと思ふ吾夫を他人の花ど詠させ余所よ見るこそ方見けれ戀の仇たる荒淫婦おど安穩よおくべきや咽へ喰ひ付ておと俱よ迷土に誘はんといふ音聲さへ皺枯て物狂はしき形相は恰も鬼女よ異おらぞ唐立めごけて飛蒐るを太郎い慌てのけへたて刀ぬ柄に手を懸て屹と疾視聲ふりゐて父よ事る女おれば最前よりの失禮をももるしておけばつけ面ごる法界悋氣の出傍廻戀の敵の吾夫ぬとい誰よ對していふ事ぞ現在妻ぬ目前不正語をいわれてい家尊の大人へも影護しそこ退ぞやと敦圓い唐立こわさ恐ろしき職慄逃んとそる裙をしのと引捕らへ逃るとて逃さんや其許い委細を知らざれば這奴ご實の榻次よて字づけせし良人ぞと第一條に思はれんご這奴い實の榻次よあらぞ妾ご洛お有し日より二世とのはせし夫おりと身の惡さへも口ばしるよ太郎今は堪へ兼おのれ血迷て何卒

を言とも誰のそれを寔とせんいで息ぬ音を止てくれんと氷のごとき刃を扱只一打と斬埋れは殺さば殺せと立向ふあれ浮雲ととゞむる際利白刃はそれて唐立ご肩先深く斬込れ阿呼とばおりゐ倒れ俯ぞ南無三寶と太郎ご仰天憎くき女め覺悟せよと袖衣目掛て閃のぞ電光石火よ一刀両斷悪ぬ報ひぞ心地よき人や來ると爲補ご血刀さげて立あごり一息吻とつく折のら此忽劇よ驚きて阿家翁榻内刀追取走來りとそれば榻次ご血刀提立たる傍ゐ袖衣唐立朱よ染て伏居たるゐ榻内慌忙てこい榻次物にや狂ふ心を志づめて緣故を詳お語れと聲かけられ毒を喰はば皿迄と物をもいぞ也蕊地ゐ斫て蒐れば榻内い右とさ〜へ左よ除二足三足下りしご運ぬ盡ゐや踏はづし様より下へのけさまよ倒る〜處を疊かけ難おく其處へ斬倒し裟をもて血刀ぬ血押拭ひ白刃をば頓て刀室ゐいおさめても納まりごたき此場の時誼如何いせんと躊躇しご時い將ゐ黄昏よ向々として母屋ゐ離れし室おれば箇程ぬ騒動を知る者絶ておおりけるゐぞ太郎い四下を見まはして天の與へと打既び三十六計走るを上とぞ見咎められぬ其内よと既ゐ爰を逃れ出んとせし當時天俄よ結陰庭の池水動搖そるよと見へけるゐ水氣盛ゐ立登り許多の蛙忽然と顯れいで諸聲合して鳴連るよ太郎い屹と眼をとゞめおら不思議や今榻内を殺害おせし鮮血渠ご帶したる刀ゐ〜るを覺へしよ池水俄よ逆立て數万の蛙聲を發ち扱い聞及びつる此家の重寶阿鳴丸よ極れり抑此刀ぬ威德よい鯉口を離る〜時い何國ともおく蛙の聲し又鮮血の穢れよ觸る〜ときい數多の蛙あらばる〜と聞しよ違はぬ此場の形相こはよき物こそ手ゐいれりと遽はしく榻内ご帶せし刀を拿て扱放し熟々見て適れの名作おれと意中よ喜び手水鉢の水を注のけて穢れを清めて刀室よおさむるよ蛙も消うせ天も晴て元ぬ如くおるよ彌々其奇特を感じ我刀を捨てこれを帶しおどするうちゐ爰へ人ぬ來

るけはひよ打驚きて慌だしく庭よ飛下り見越の松わ攀登り忽ち外方おりゐつひまよやれ人殺し
○よと聞く容子見つけられていのおわじと北をさして走去るよ追人と見へて後方より松火を振照
らし夥の人追蒐來るさまわ爲祐い益々心忙て木の根岩角の嫌ひあく喘々三里許走りしご身体勞
れ咽喝き足い裏わ貫ごれ殆と進退極りて奈何はせんと佇立わ茲よ岐の路ありて南北よわられた
り北此方よそ〜めゞ二荒山へ行道あり南の方わゐとれば武藏へ至る道あり太郎は朧ある月影よ
すのし見れゞ一軒此辻堂ありて椽側よ一個の大法師最太やのある拐杖を突立休息居たり其容貌
遥しく只者あらぜと見へゐりける

第九回

英雄を虛て壯士難を避く
鮮血を合して喬辛再會ふ

彼街堂わ臀うちのけて憩ゐる大の法師い是別人わあらぜ嚮年獄を出て普く海内わ英雄豪傑を
覓んと せし武藏坊辨慶よてぞ有りける當下太郎爲祐は辨慶ご和貌容易者あらぜと見てければ遽
はしく其邊りよ躊躇しつ僞ていへりけるい吾儕い京洛ごゐの退粗あるご身此發跡の爲よ當國よ
吟行しに計らぜも今宵此わゐりわて盜賊よ出遇彼賊等と鬪ひしかど彼方は大勢道方は單身爭の
のあふべき漸々其透を窺ひて爰迄は逃延ゐれど賊等猶吾を追掛て殺さんとぞ吾身躰勞れて最早
一歩も進おとあゐわす師父憐をたれ給ひて我此急難を救給はらば廣大無邊の惠あるべしと頓
首して述けるわぞ辨慶これを聞て打頷き寔や鳥懷ろよ入る時は獵夫も是を獲らぜとかや況て
人を救ふは釋氏の好るところあれば心易く思ひ給へ我よきに計ひてまひらせんと太郎を辻堂此
裏わあくし何氣あきさまゝで鉦打鳴し唱名して居けるに頓て數多の人各位わ松火をふり照らし
つ〜爰へ來り道の両方よ別れゐるを左視右視て北へや逃し南へや走りけんと異口同音わ晋散動
き辨慶を見つけて一個此漢兒近くぞ〜まて如何法師今爰へ云々の壯佼の來りしあらんご的方の
道へ往しぞと問ふ辨慶聞てそは慥わ南此道へ走り往しと覺へしご最早余程時刻もうつりゐれば
今い五六里ばも逃延しあらんといふわ彼人々い扨こそと遽わしく南をさして走去りぬ辨慶這
爲体を見て太郎を辻堂此裏より出し又のゐへあるる稻塚の小蔭わのくし前のごとく鉦打鳴らし念
佛とあへ從容として居りけるよ少刻ありて以前の人々立戻り嚮わい心焦燥てよくも屈檢ざりし
ご這十字街堂此内よそ怪しけれといふを聽て辨慶は嘲笑ひ吾儕は出家人あれあどの僞りを云て
何此益のあらん疑ごのはしくい展檢給へといふよ彼人々い續松をの〜げて辻堂此隈々を探し扨い
這奴足疾くて篤く遁れつるこそ殘念あれと皆口々よ呟きつ〜元來し路へ引返しぬ辨慶跡を見送
りて今い心易しと太郎を稻塚の蔭より誘ふよ太郎い大地よ頓づきて實わ師父は吾再生此恩人あ
りいつのい此恩を報じ奉るべき願くい負笈して朝暮事へまいらし荷の其恩よ報ひはべりあんよ
枉げて免し給ふべきやといふよ辨慶首を左右よ打搖り否々墨衣黎羹一鉢此外に貯ふ物あき雲水
頭陀の身の上わ爭の其許ごのごとき壯佼を伴ふべきと固く推辭て承諾ぜ太郎はいよ〜感激しさ
らゞ切て暫時もといふよそい東も西も心よまのすべし汝且此負杖を携へ來れぞいふよ爲祐いこ
れぞ常の負杖と思ひ侮りて持上んとぞるよ重くして手もゐゐく漸々双手をのけて持上るを辨慶
い見て打微笑其許い是を常の負杖と思ひ給ふらめど爾よあらぜと最輕のよ手よ拿わげ一振ふる
○よと見へけるご忽ち上此方より明光々たる白刃飜へりいて〜恰も長刀よ異あらぜ辨慶いよれを
水車此如くつかひて見せけれゞ太郎い再び地上よ低身し吾儕い只師父を通例の和尚と耳思ひつ

るゑ師父い寔ゐこれ天下の英雄豪傑ありと舌を卷て恐けれゞ辨慶い打笑ひ又其刀をのくし本の

負杖とゐしぬ左右そるひまゑ雞鳴拂曉を告て東雲近くゐりゐけれゞ両個い辻堂をいで〳〵尙北を
さして赴きぬ追前回再説洛陽ゐい深栖陵之助光重い娘唐立を東へ下せし後絶て音耗もゐりけ
れゞ奈何いせしと案んじ暮らせしご幸ひ都の任も果けれゞ取る物のも取敢ず家隷を將て獨り妻
子ゐ先達て夜を日ゐ次で下野ゐ下り吾家ゐも至らぞまづ橘内ご家ゐ行て外面より裏ゑ容子を物
色ゐ何やらん混雜の爲体ゐ見へて家僕東西に奔走そるさま最心得難く慌忙しく裡ゑ入て呼門ゑ
頓て一個の侍出來り何國よりぞと問ふ當時陵之助は姓名を奉じ橘内ゑ相見せんことを乞ふ彼侍
ひまづ此方へと招じ暫くありて老僕篤内立出て別離の情を演る行粧悵惘として愁をいざける顔
色ゐるゑ陵之助はきづかいしく其故を問ふゑ篤内い最おもゆせゐごら云々の辭より起りて昨宵
橘内はじめ僻妻袖衣令愛唐立ぬしゐも深痍を蒙りはへりと涙ゐごらゑ一五一十を物語るゐ陵之
助は始終を聞て大きゑ驚き遽ばしく奥ゑ入て見るゐ目も當られぬ行粧ゐれゞ胸まづふさごりて
はふり落る涙をのきはらひつ〳〵橘内ご邊より近くより藥を與へ耳ゑ口をさしよせて奈何心を慥ゐ
もち給へ陵之助來りしぞといふ聲聞て眼を見ひらきやよ光重ぬし其許ゑ面を合せんい最面目ゐ
く侍るゐり吾思慮足らぞしてゐらぬ者を引入れて唐立ゑ操を破らせ剩さへ非業ゑ最期を遂させ
しも悔て返らぬ我過ちもるしてたべと云ふ聲もはや魂消る斷末魔のたへゑ伏したる唐立い父ご
聲音を聞よりも最細やのゑ目をひらき父上のよくこそ尋ね來玉へる妾ゑ死る命い更々惜しのら
ねど彼人實ゑ橘次ゑゐらぞい立し操も徒らゐゐらぬ人を夫と思ひ肌身を汚せしと耳ご心頭掛り
ゑ侍るのし後日ゑ實の橘次ぬしゑ環會もし玉はゞ此由傳へて後の世の縁いせめて結でたべ遺言
も是限りと跡いひさして酸嗅ゐ陵之助い涙と拂ひ再び橘内ゑむのひ爾るにても不審い世ゑ類ゐ
き名香を奈何ゑして獲て橘次と偽り浮雲ゑ富貴を得んと欲せし太郎とやらんご出身を詳ゑ問ん
も肝心の詮義ゑ種ゐゐるべきといふ袖衣さへも言切れゐれゞ尋問べき便もゐし倩々事の爲体を
考るゐ實の橘次此邊りゑ徘徊そるゐ極まれり其許等両個死去らゞ誰の敵ゑ面を認め仇を報る者
あらんや心を勵し給へのしと力をつくる折からゑ俄頃ゑ外面騷しく一個の奴隷走來り陵之助ゑ
むのひ只今門外ゐ廿許ゑ賤夫主翁橘内君ゐ對面せんとヤはへるゆゑ今日い障る事あれゞ亦重て
來れとヤせぞも聞入ぞ押て對面せんと傍若無人ゑ奥へ通らんとしはべれゞ我們强てさ〳〵へいを
左右へ取て投ちらし理不盡ゐ奥をめごけて踏込いといふ辭のいまだ終らざる所ゑ身ゐい荒朽の
衣をまとへど何とゐく相貌堂々ゐる一個の好男子さ〳〵ゆる僕ご腕をねじあげ庭上近く進そくる
ゐ陵之助い彼壯佼ご容貌の凡ゐらざるを見て事ゑ仔細を問んと擬近く立出るゑ彼壯佼も又陵之
助を庸人ゐらぞと見るものゐら捕らへし奴僕を撞的投退その儘庭前ゑ躊躇り小子い室の八島の
邊に住居はべる賤者ゑていご這家の主翁橘内君ゑ直々見へて辭ゑ實否を糺はやと故意〳〵まい
りはべるゐ奴婢們吾儕ご斯蹇々しき容ゐるを怪しそて紹介もせぞ重て來るべきよしを宣へど是
究て過急の辭にまて期を延し難けれゞ强て奥へ通らんとそるを拒そいゆへ止事を得ぞ斯の行粧
其無禮を咎め給はぞ相見そる事を赦し給はゞ小子ご悅びこれにまゐのじと額を土ゑおしあて〳〵最
慇懃ゑ述るゑぞ陵之助はこれを聞て打點頭已前の奴僕を叱り懲らして次へた〳〵せ偖彼壯佼ゑむ

かひ吾儕は本當國深栖ゑ者ゐして陵之助光重とよべる者ゐるご久しく都ゑ在て今將歸鄉の時ゑ
望んでこれゐる橘内とい相緣ゐるをもて我家ゑも入らで先當家を訪ひしゐ思ひきや橘内い昨宵

不憶災ひゐの〜り重疵を蒙りて病床にあり其許まゑ我等ゑ示を事ゐりやと聞より壯佼太く駭き
六四扨い橘内君ゑいはや手疵を蒙り給ふとの而其對人い何處ゑ誰ぞやと辞せわしく問ひのくれゞ陵
之助應へてそい最長やのある縁故ありて一朝一夕ゑい說靈し難し且其許ご爰へ來り橘内ゑ遇ん
といふ其子細より語り給へといへゞ壯佼何奈ゐゐも侮尋ねおくても曰はべりおん嚮ゐも聞へまひ
らせし如く吾儕い室の八島の邊りゐ住る中窪ゑ水四郎といふ賤者の子ゑて吉次と呼る者ゐるご
去る日父水四郎爾々ゑ事よりして始めて吾素性を明し守護と名香を遞與せしご父ご藥價ゐ是非
おくも名木を利九郎と云者ゐ質入せし事よりして其金故ゐ父父い何者ともしれぬ其夜さり殺害
せられし事其首をいへゞ箇樣々々尾を說ゞ云々と顚末をちもおく物語て扱いへらく吾儕斯爰々
しきさまおるのをか證明とおるべき名木をさへ失ひゐれゞ阿容〳〵と爰へ來らん事い最影證け
れど此曉き夢の中に養父水四郎ご寃魂來り吾に告しい其許ご實父橘内君い過頃より東國高野ゑ
庄の邊りゑ住玉へり而も昨雪云々の危難ありて浮命殆々危し汝疾立越て息のうちゐ對面せよと
宣ひしゐと思へば夢い覺つ肉類りゑ動て胸うち騷ぐゑとるものも取りあへぬ尋ゑ來りしゐはや
橘内君ゐい手疵を蒙り玉ふとのや今一足早ゐりせゞ此禍ひいゐらせじと悲歎ゐむせびつ〳守護
と臍緒ゑ書付を陵之助ご手ゑ遞與せゞ光重い是を聞て扱い其許ご實の橘次ゑて在りけるのとい
知らぬして橘内ぬ一宵名香を證明ゑして太郎とやらんを一條ゑ實ゑ吾子と思ひしより這禍を釀
せしおりそを今更ゑ百千般悔ゐりとも詮術おし何いともゐれ橘内ご息ゐるうちゑ少しもはやく
親子の名乘をさゝべきと吉次を誘ひ橘内ご枕邊近く進寄て有技有葉を語るひま吉次い頓て懷中
より一箇の小柄を拿出し自ら腕ひを擘いて流る〳血汐を橘内ご衣服ゑの〳りし血ゑ注ゞ看々一
箇合そる有樣橘内はじめ光重も此爲体を左視右視見覺へゑ有る守といひ遂方おき臍緒の書付も
おるそごのうへゐ血汐の合ふこそ喬梓の驗ゑしや名木の亡ふともまごのふべやうもあらぬ吾子の橘
次今將思ひ合それゞ康親主の勘文ゑ火ゐ因て離れ水ゑよつて命を全ふし廿余年を經て再び環會
んときゑ臨て亘禍ゐるべしと宣ひしを熟々思へゞ今日只今此枉津日のあらんとと是定れる天命
あらんゑ歎くい下愚の至りおりやゑ唐立ゑ實の其許ご良人をゞ只一目見て快よく寂光淨土へ
嫁りして蓮の臺の翠帳紅閨夫迎ひそる弘誓の舟彼の織女ご契さへ年ゑ一度いあるものを遇ふを
別れのはじめといはのおき夫婦ゑ縁おれ責て息あるそのうちゑ三々九度の末期ゑ盃深栖生よく
計らひてよと聞ふるゐ唐立斯と聞よりも最細やのある音聲ゑて否々父上最前より實ゑ我夫橘次
ぬし來給ふと聞飛たつ嬉しさ遇まひらしたくい思へども年頃立し操も仇ゐ夫おらぬ人ゑ肌身を
汚し雪々毎の添臥しゐ更ゑ變るゐ替らじと一詞渡縷約も今更思へゞ口惜しく左ても右ても女の
道ゑ缺ゐる妾何ゑ顏はせ有りて橘次ぬしゑまへはべらん父上妾ご末期ゑ望そて一箇ゑ願事ゐ
り奈何聞屆けて給はるべきやといふを聞て光重は何ご扨何ゑまれ此世ゑ思ひでゐ言給へ疾々遺
言給へかしといそごしければ唐立いへらく橘次君未年若くおいせゞ妾ご亡后必ゑ荆妻を迎へ給
ふべし幸おるのゐ妹床世はいまだ定る郎人もおく且其心操貞し渠を以て婚を繼せ妾ゑ代らし給
はらゞ思ひ置こと更におしと聞て光重眼をまゞゐ〜き奈何ゑも姉の代りゑ妹を以て婚をつごのす
其例おきゑしもゐらゑ橘次ぬしご心いのゑそやといふに吉次い爭ご固辞はべるべき術はい〳諾
六五ひごのゐきい其の美佐崎とやら天を翔り地を潛るとも尋ね出して怨を清め父と妻とご修羅ゑ忘執
を晴らさゑば人たる者の道ゑ違へり又養父ゐる水四郎を打て立退曲者い顏も知らゑ名も知らね

不憶災ひゐのしり重疵を蒙りて病床にあり其許まゑ我等ゑ示ゑ事ゐりやと聞より壯佼太く驚き
六四扨い橘内君ゑいはや手疵を蒙り給ふとの面其對人い何處ゑ誰ぞやと辞せわしく問ひゐくれゞ瞑
之助應へてそい最長やのある縁故ありて一朝一夕ゑい説盡し難し且其許ご爰へ來り橘内ゑ遇ん
といふ其子細より語り給へといゝゞ壯佼何奈わも涙尋ねゐくても曰はゞりあん嚮わも聞へまひ
らせし如く吾儕い室の八島の邊りゐ住る中窪ゑ水四郎といふ賤者の子ゑて吉次と呼る者ゐるご
去る日父水四郎爾々ゑ事よりして始めて吾素性を明し守護と名香を遮與せしご父ご藥價わ是非
あくも名木を利九郎と云者わ質入せし事よりして其金故わ又父い何者ともしれぞ其夜さり殺害
せられし事其首をいゝゞ箇樣々々尾を説ゞ云々と顛末をちもあく物語て扨いへらく吾儕斯度々
しきさまゐるのをか曖明とゐるべき名木をさへ失ひゐれゞ阿容〳〵と爰へ來らん事い最影護け
れど此曉き夢の中に養父水四郎ご寃魂來り吾に告しい其許ご實父橘内君い過頃より東國高野ゑ
庄の邊りゑ住玉へり而も昨宵云々の危難ありて汚命殆々危し汝疾立越で息のうちわ對面せよと
宣ひしのと思へば夢い覺つ肉頻りゑ動て胸うち騒ぐゑとるものも取りあへぞ尋ゑ來りしわはや
橘内君わい手疵を蒙り玉ふとのや今一足早のりせゞ此禍ひいわらせじと悲歎わむせびつゝ守護
と臍緒ゑ書付を陵之助ごの手ゑ遞與せゞ光重い是を聞て扨い其許ご實の橘次ゑて在りけるゐとい
知らぞして橘内ぬ一宙名香を曖明ゑして太郎とやらんを一條ゑ實ゑ吾子と思ひしより遣禍を護
せしおりそを今更ゑ百千般悔ゐりとも詮術おし何いともあれ橘内ご息わるうちゑ少しもはやく
親子の名乘をさそべきと吉次を誘ひ橘内ごの枕邊近く進寄て有技有葉を語るひゑ吉次い頓て懷中
より一箇の小柄を拿出し自ら腕ひを擊いて流るゝ血汐を橘内ごの衣服よりしゝりし血ゑ注ゞ暫ゑ一
箇合そる有樣橘内はじめ光重も此爲体を左視右視見覺ゞゑ有る守といひ邀方おき臍緒の書付も
あるそごのうへわ血汐の合ふこそ喬梓の驗よしや名木の亡ふともゆごのふべやうもわらぬ吾子の橘
次今將思ひ合それゞ康親主の勘文ゑ火わ因て離れ水ゑよつて命を全ふし廿余年を經て再び環會
んときゑ臨て亘禍ゐるべしと宣ひしを熟々思へゞ今日只今此枉津日のあらんこと是定れる天命
おらんゑ歎くい下愚の至りおりやよ唐立ゑ實の其許ご良人をゞ只一目見て快よく寂光淨土へ
嫁りして蓮の臺の翠帳紅閨夫迎ひそる弘誓の舟彼の織女ごの契さへ年ゑ一度いあるものを遇ふを
別れのはじめといはのおき夫婦ゑ縁あれ責て息あるそのうちゑ三々九度の末期ゑ盃深栖生よく
計らひてよと聞ふるわ唐立斯と聞よりも最細やのある音聲ゑて否々父上最前より實ゑ我夫橘次
ぬし來給ふと聞飛たつ嬉しさ遇まひらしたくい思へども年頃立し操も仇わ夫おらぬ人ゑ肌身を
汚し雪々毎の添臥しわ更ゑ變るお替らじと一詞渡縷約も今更思へゞ口惜しく左ても右ても女の
道ゑ缺ゐる妾何ゑ顔はせ有りて橘次ぬしゑまゑへはべらん父上妾ご末期ゑ望そて一箇ゑ願事わ
り奈何聞屆けて給はるべきやといふを聞て光重は何ご扨何ゑまれ此世ゑ思ひでわ言給へ疾々遺
言給へかしといそごしければ唐立いへらく橘次君未年若くおいせゞ妾ご亡后必ぞ荆妻を迎へ給
ふべし幸おるのお妹床世はいまだ定る郎人もおくく且其心操貞し渠を以て婚を繼せ妾ゑ代らし給
はらゞ思ひ置こと更におしと聞て光重眼をおゞゐゝき奈何ゑも姉の代りゑ妹を以て婚をつごすゝ
其例おきゑしもゐらぞ橘次ぬしご心いのゑそやといふに吉次い爭ご固辞はべるべき爾はいへ諾
六五ひごのゐきい其の美佐崎とやら天を翔り地を潛るとも尋ね出して怨を清め父と妻とご修羅ゑ忘執
を晴らさぞば人たる者の道ゑ逆へり又養父ゐる水四郎を打て立退曲者い顔も知らぞ名も知らね

と僅の金ゝ目を懸れば強盗白剣ゝ極まれり實父此仇を射たりとも養父の恨を返さゞゝ是又貪獣ゝひとしといわんの狙ふ敵ゝ両個ゝて討ゝ己れ單身ゝ普く諸國を偏歴し苦ゝ寐戈を枕ゝとるの患苦を經るとも両箇の首級を提げそゝ再び誓て故里へ返らじものと思ふものゝら夫婦約束したりとも倘運盡て返討ゝ討るゝ事もあるゝらば惜可若木の唐立のゝこのきこくの程も計られぬ我儕ゝ娶れ床世迄盛の花も散せゞして仇ゝちらそゞの不便ゝ此婚姻は承引ゞゝしといへゞ光重首を打振り否耐ゝあらゞ總て孝子ゝ必ゞ皇天の恵あり其身本望をとげて立返る日近きゝあり枉て小娘ゞの死期ゝ願ひゝまゝ意ゝゝ迎まじけれど妹床世を妻と思ひ夫婦の契をむそんでたべ爾るゝても養父水四郎殿とやらを討たる者ゝ何者ゝるや倘手ゞゝりゝあらざる乎と問われて吉次は奈何にも其砌り曲者ゞの我を目ゞけて打のけし銑劔爰ゝあり後の證と拿おきつと最前臂を擘きし小柄を出して見せしむるゝ橘内は熟々見るゝゝこれ南蠻鉄ゝ黄金を鏤めて刀を彫つけたる目覺へゝる品ゝれゞ愕然としていへらく此小柄ゝ吾秘藏の物ゝるゞの日外太郎爲祐に拿らせしの扨ゝ水四郎とやらんを殺し金を奪ひし曲者美佐崎太郎でゝりけるゝと聞より吉次ゝ益々怒り恨を重ゝる太郎爲祐いつのゝ思ひしらせんと齒ゞをゝして憤ほりしゞの屹と心つきて光重ゝうち向ひ嘆ゝまきれて忘れたり吾儕此拂曉爰へ來らんとそる道ゝて怪しげゝる大法師と若き侍ゝ遇へりそれ爲体心得ゞゝく思ひしゝば両個ゞの行粧を倩々見るゝ彼侍の衣服ゝ裳ゝ鮮血着てゝりしゝへ愈々不審く法師ゞの容貌を見るゝ年齢ゝ廿歳ばゝりとゝもおぼしく色白く極めて美僧ゝりされど眼光するどく一癖ゝるべき面魂ひゝりき両個ゝ大く道を急げる面色ゝて喘々北をさして走さりしゞの今將思ひ合それゞ若や彼武士ゞの讐橘次の爲祐とやらんゝてゝ有ざりしゝと其相貌は云々ゝて衣服

并色ゝ個様々々と委しく物語るゝ橘内ゝ聞より是ぞ美佐崎ゝ疑ひゝし最前太郎を追止めゞ立師ッたる奴僕等ゞの語るを聞ば辻堂ゝ通夜せし法師の在しゝへ太郎ゞの行衛を問ゝりしゝ南れ方と激しゝへ南れ道を探せしゝゞ竟ゝ追止ざりゝとゝいへり是彼思ひ合それゞ彼法師も盗賊ゝんとゝて太郎を助けて陸奥へ下りしゝれと覺へたりと聞て吉次ゝ踊りゝゞり俱不戴天の太郎爲祐今ゝゞ思ひゝらさんと拳を握りて怒りける斯て吉次ゝ止事を得ゞ床世と婚姻ゝ事を諾ひけれゞ唐立橘内ゞの悦び大のゝゝらゞ終ゝ其夜ゝ両個とも空しくゝりけれゞ吉次陵之助ゞの愁傷縱令んゝもれゝく責て敵の隻れと袖衣ゞの死骸を乖楚て無念を散じその骸ねを野外ゝ捨唐立と橘内とを厚く葬送りして哭々七々の追善供養怠らゞ營を渾家ゝ總て闇夜ゝ燈火をうしゝへるゞの如く愁然としていたりける

第十回

安達ケ原に橘次路ゝ迷ふ
五條橋ゝ辨慶良將を認る

爾れゝ陵之助ゞの妻子ゝ斯る事の有りとゝ神ゝらぬ身の一点知らゞ不日下毛に着けるゞの遣容子を聞て駭くこと大のゝゝらゞ床世ゝ姉ゞの非命の死を聞より悲嘆の涙にむせぶを光重ゝ万般とすゝし姉ゞの死期の遺言を物語り忌はてゝゝ橘次と夫婦と成り行末長く添ひ遂んこそ即ち姉ゞの志ゝれゞ必ゞ推辭べゝらゞと理りを盡して言諭しけるゝゞ漸々の縡ゝて床世もこれを諾ひぬ却説吉次ゝ父ゞの忌をゝ果けれゝ吉の文字も元の如く橘に書ゝへ橘次季春と名を改むるに陵之助ゞの元より六七も頓て吉日を撰ゝ床世を送り越しければ縡故ゝく婚姻を調へ両家とも此程よりの愁眉を開き悦ぶ事限りゝく切も橘次ゝ夫より一日二日を經て光重ゞの家ゝ至り斯る上ゝ最早一日も過し難し速

よ諸國を巡り敵太郎ごの在處を探し首尾よく討果て立歸るまで留守の間は緯ゝよきよ計らひ給はれかしと最懇ろゝ頼み聞ふるよ光重頓よ委細領諾して何ごの偖跡の事よ氣づかわを一日も早く本懐を遂し立歸るべしといふよ橘次も大ひゝ悦び此上ゝ心易しと家よ歸り老僕篤内よ云々のよしを語り家事を委ね床世よ暇乞を告るゝ床世ゝ未結婚をと〳〵のへて幾程もなく夫を長き旅路ゝ立せんこと最心苦しく哀けれど從來止べきよゝあらねゞ疾ゝ本望をと耳言さして跡ゝ涙ゝむせ返るを心よゝくてのゝはしと頓て吉左右知らぞべし大事は首途よ嘆くゝ不吉の至ゝりとさま〳〵言諭し兎ゝ別れを告て長打曲浦は旅の空へぞ赴きける偖も橘次ゝ先當村の總社室八島なる總社明神へ參詣し何卒敵爲祐ごの行衛を志らし給へと一心よ念じ茲を出て倩々心中よ思ふよゝ這奴彼法師と共よ北をさして走りたれゞ定し陸奥へ忘せしものゝらんと奥羽をさして下る道そごら態と人なきかゝわけいりもき〳〵て奥州は安達ケ原よさしゝ〳〵りしよ不圖道を踏違へ行ども人里へ出す只渺々たる曠野なるゝ只管心焦燥草踏分て馬蹄を渠よ道を急ぐ程ゝはや日ゝ黄昏よ向々とす頃しも神無月下旬よして霜闌のゝくらきゝ心中頻りよ悶もれ共詮方なく斯る野原よて日暮れなゞいよ〳〵進退極るべし奈何なる野守ごの家ゝても一夜をゝのさゞと遠近をなごむるゝ遙なゝなる一群繁る森は中ゝ火の光り幽よ見もるよ偖ゝ人家なるべしと意嬉しく辛ふしてたゞり着て見るに案よ違はぜ一宇の草庵よして裏にゝ讀經は聲聞もるゝ扨ゝ桑門の引籠る庵なりけれと片折戸を開て裏ゝいり最静やゝゝ呼門ゝ主翁ゝ經を讀さして出來るを見れゞ年齢五十ゝまりなる法師ゝて庵のさまゝ〳〵る鄙ゝれ似けなく清らよして觀世音の像を安置せり橘次ゝ當時主僧よ向ひ吾等ゝ下野の者なるごの今日しも道ゝ踏迷ひ此原中よて日を暮らし殆と難義ゝ及ぶ者なり何卒一夜の舍りを惠を給はらば生々世々の恩情よ侍るゝしと最懇懃よ演るよぞ法師ゝ橘次ごの爲体を左見右見て打頷きそゝ定めて心苦しくおはそべし見給ふごとく此庵ゝしてまいらせべやう物もなく夜は衾の湖きをだゝいとひ給ふ事なくゞ一夜を明志給へゝしと快よげよ承諾よ橘次ゝ限りなく喜び何ごの扨苦しゝるべき枕て一夜の宿は恩報敵よ預りなんとて草鞋脛巾を解捨て門邊なる流れに足を洗ぎ簀子は上よゝるひまよ主人ゝ地爐よ柴折くゝ鐺子の澁茶沸ゝ〳〵め進むるゝ橘次其志を謝しつ〳〵も四下を見るゝ傍なる壁よ觀音堂建立寄附の金多寡と施主の姓名を記せし札幾枚も張れり且主ごの物の言さま此邊の人とも見へぬゝ橘次ゝ法師よ向ひ抑爰は何とか呼べる處よして其許ゝ又當國の人とも見へ給はざるよ何國は産にして何の程よりゝ爰ゝ住給ふやと問かくるよ主人答へて爰ゝ名ゝし負ふ安達ケ原よて此觀音堂ゝ昔時八幡太郎義家公奥州征伐せさせ給ふ頃はひ人を拿喰ひし鬼婆の住りし庵は跡也と言傳へて又昔の黒塚と言ひしは彼處の松杉を植し小高き丘ゝて其跡也なんど里人ゝ言もてはやせど荒唐説なれゝし又吾僧ゝ茲よりゝ遙けき播摩の國は産れよはべるごの故有りて去る歳當國ゝ劵縁しはべりしごの不圖此庵室ゝ留り月日を送るうち早晩馴染もふへるよしたごひ都と違ひて片邑ゝ人心正首々々しく吾僧ごの質朴なるふ輩少ならぜゝれ觀はせ彼首の壁よ貼したる榜よ記せしゝ皆施主は名なり最早其費も大なたゝ集りはべりつゝなど物語り居りしごの何思ひけん急よ小膝を磴とうち忘れたり〳〵小宵ゝ此隣村なる里正どの小許ゝて志の日なれゞ夕餐を給べよ來ませよと宣たるを忘ゑりしごの腹は淋しくなりしゝて俄ゝ思ひ出ゑりやゝ旅の淫方よ其間淋しくおわさんごの霎時ごの程留守居してたびね初更過

頃わい戻りあんといひのけそこ〳〵わ支度しつ門へ出しご立戻り吾僧ご腹の淋しよつけて其許物欲しくいおわさぬか折惡敷飯いはべらねど最前貰ひし餅の庖厨の棚よはべるあしあれあと喰へて餓を凌ぎ玉へと最懇よ言おきて遽ばしげよ出行ぬ橘次は廣やあある家わ宵獨り行末越方の縡を思ひつゝけ地爐の側よ足ふと延して倩々案るわ主の法師齡い傾きたれどまだ岩壘よ見へ言語の木訥といひ幼稚より此出家ともおぼへぞ何さま一癖あるべき法師と覺もれ加之らぞ桑門此庵よ似げあく清らあると云も不審あど思ひつゝけ居たるうちよ旅の勞れわや頭りわ睡魔ざし我わもあらで居眠りしご忽ち庖厨此方よ當て瓦落々々といふ音そるよ駭き覺て何事よやと紙燭して庖厨よいたりて見るわ棚より盒轉落てそこらあゑり餅とり散らし傍よ大きやかある鼠二三疋四足をちゝめて死しいたり橘次い此形相を見ていと〳〵不審はれぞ彼ご喰さしゑる餅を見るわ其色紫だちて見もるわ倘や此うちよ毒を和しゑるものよいあらぬゝと尙打割て見るよ案よ違わぞ班猫といふ虫有り偖こそ鼠此餅を喰たれば斯四足をちゝめて死たるあり危いのあ吾知らぞして喰ゑらんわい忽ち鼠の如く手足をちゝめ血をはきて死べのりしを誠よ神佛の救ひ玉へるもはあるへし是を以て考るよ主の法師あそ盜賊わて往來の旅客を留め斯餅の中よ毒を加へてこれを進めて殺し其路費を奪ひ取るあるべし彼古の鬼姥よもまさりし法師ご姦惡無道察そる處最前法師ご齋わとて出行しも渠們ご首賊あんど〳〵知らせよ行しも計り難し斯うの〳〵と此よ在らんい湖氷をふむよりも猶危しやよ是より疾く此を遁れいで〳〵其毒手を避んの否案内知らぬ夜の道よしや道を通る〳〵とも東西わあらぬ遣郊原行先も又覺束あしシャツ何程の縡やあらん此よ待て渠ご爲樣を視て後わ其計略よ付て又此方よも計策を施すべし係る事より志て敵此手藝を得ること

ともあしといふべのらぞ爾あり爾ありと我よ問我わ答へて燈火を吹消し壁わよりそひ鯉口ぐつろけ息を殺して待居ゑり少刻ありて八此足音して頓て戸をひらき裡の容子を窺ひ見てやよ〳〵旅客い何處へ往玉へる燈火も消たるよ喃々旅客よ〳〵と呼ふ聲音響此あるじご聲よい非ぞ橘次い扨こそと愈々油斷せぞ尙聲をも立ぞいゑりしご彼外面より來りし漢兒い燈をともさんと此彼をかいさぐりて橘次ご邊りへ來り不圖手をさし出して頭をさぐり大わ驚き飛のくとしよ地爐此火ばつと燃立火あげにて両人いはじめて顏見合せ暫時物をも言ざりしご橘次い今外より來りし人を熟々視るよ將ぉ是年若き大此法師わして然も其面体何とやらん目覺へ有るやうわおぼへしご稍有て屹と睨まへやをれ汝いさいつ頃高野此庄此邊りよて最怪しげある退粮と倶よ走し賊僧め父の仇ゑる美佐崎ご行衛を云ゞ其通り隱立せゞ赦し難しと敦圍荒く詈るわぞ法師は聞て嘲笑ひ吾をさして賊といふ汝こそ却て賊よてあらんぞらん主人の留守わ燈を消して待居からい問ふよ及ばぞ主人を殺し建立寄附よ集めたる其錢財を奪ん工歟我殺人劔此わあり汝を斬て旅客の後此愁ひをはらはんといひさま持たる負杖を搖動すよと見へけるご忽然として負杖より白刃翻出長刀よ彷彿ゑるを橘次い視るより扨こそ汝出家よ似氣あく斯る刃物を携ふこそ强盜强奪よ疑ひあし太郎ご在處を疾ぬかせ「在所あど〳〵い何の浮言無用の舌を動さんより其息の音を止てくれんと擊て蒐れゞ扱合せ一上一下虛々實々誓死戰時をうつせぞ更よ勝負はつかざりける浩る處へ主此法師い立歸り視るより慌忙やよ待玉へ両個ともこい何縡此爭わや暫待ぬとといひれども血氣わはやる龍虎此勢ひ耳よもあけぞ挑ぞ戰ふ主此法師いもてあまし傍に有合ふ繩屏風を打合ふ白刃此眞中へ磕と返して身をのせよ停れゞ両個い連りよ氣を焦燥「其處退玉へあるじの法師

「怪我し玉ひぞ耕作ぬし這奴ゝ正まく盗賊ゐて燈火を消して其許と待ところして物を取らんとせる大膽不敵の僻者あれ「ヤア盗賊等とゝ舌長ゐれ爾云汝ぞの盗賊にて美佐崎太郎ぞの同類ゐらん這奴ぞの在家を疾いへと勢ひ猛く詈るゑ主人ゝ法師ゝ尙も動のぞ奈何旅客心をまづめて聞給へ此法師ゝ全たく爾る類の怪しき人ゐあらぞ強盗強奪と思ひ違へて跡で後悔し玉ふあと辞を和めて說諭そと橘次ゝ尙も疑ひ解ぞ主の法師を礑と努目汝も賊の部下ゑて餅ゝ中へ毒を和し既に吾儕を殺さんと計りしのども遲強く鼠ゝ喰て死しゐる故汝ぞの毒手ゝまぬのれゐり両個ともゐ覺悟せよと聞て主人ゝ眉を顰めそゝ何といふ最前ゝ餅の中ゐ毒ありとの扨ゝ此奴めぞの吾儕を殺し寄進の金を奪わん爲の計略ゐてありけるかとさとる折ゐら山ゝ端ゑはやさし登る月代ゑあり〳〵見も る庭の隈梢に忍て怪まの人影橘次ゝそのさぞ礫の銃劔呵呀と叫びて梢より飛び下る一個の曲者逃んとそるを彼法師襟髮掴んで曳よそれゞ大力無双ゐまめつけられ眼飛出死ゐりける當時主ゝ法師両個ゑむゐひ先迭ゐ白刃をおさめて吾云事を聞給へ最前ゝ餅ゑ毒の有たれゞ旅人ゝ吾儕ゝ賊ゐりとして燈火を消まて俟給へば和子ゝ又旅人を却て賊と怪む更ゐ理ゐきゑゐらねど彼餅ゑ毒ありとゝ吾儕も絶て是を知らぞ知らざるもゐゐ其身ゑそーめぬ素彼餅はそれゐる黒塚ゝ杉六と呼べる棍悪ぞの畫の程携へ來て吾に與へしものゐり這奴ゝ此邊りゑ名ゐ〻る無頼子ゑして平居袁彥道をゝみ樂める白痴ゐりしぞゐいつゑ變りて亡父の忌日ゐればとて吾ゑ與へしもへ最も殊勝ゐる事哉性ゝ善ゐりと流石虎猛の心ゑも親の忌日を思ひ出て出家ゐ物を與ふるとゝ鬼の眼ゐ涙とやら心ゝ中ゑ感せしのど物ほどくも面らざりしもへ庖厨の棚ゑおげて盜し者ゝ這奴餅のゐゐ毒をゝれ吾儕を殺まて寄進の金を奪ん仗倆であり嚮ゑも聞へまいらせし如く吾儕はもと播州書寫山の麓ゐて耕作と呼べる農夫ありしぞの故有りて剃髮し國々ゝ靈場を順拜し去年より此ゐ住としゐり又此法師ゝ吾姪の子ぞの中ゝ關白道隆卿の後胤熊野ゝ別當辨正ぞの一人子ゑて書寫山ゐ成長り叡山ゑ勤學せし西塔の武藏坊辨慶といへるゐり甲夜ゐはゐらぞ隣邑へ行んとしたる其道ゑて辨慶ゑ環會先ゑ庵へ歸せしを其身ゝ賊と思ひ違へて碎の此ゐ及びしゐりと誠心詞ゐ現るれゝ橘次ゝ少まく疑念をはらせど猶辨慶ゑ打向ひ其辞ゐ僞もゐるまじけれど日外下野にて伴ひ行し侍こそ俱不戴天の我仇ゐり其行衛をゞ知てゐらん疾語りてよと聞ふるゑ辨慶暫時考へて爾いはるれゞ此身ゑも覺へゐり日外野州ゑ飛錫ゝ折ゐら高野ゝ庄の辻堂ゑ少刻憩ひて在ける處へ年最若き武士の途ゑて賊ゐ遇りしもへ救ひくれよと余義ゐく頼み不便に思ひ彌堂ゑ隱して危難を救ひし上暫ぞの程ゝ伴ひしぞの渠ゝ越後の國のゐたへまかるとて淺香山のとゐたゑて互ゑ袂をわかちゐり奈何ゐも其名ゝ美佐崎とゐ呼びし扨ゝ這奴其をぎり盜賊ゑ遇ふとゝ詐りゑて其身ぞの父を殺害まて捕人ゝ者ゐ取つめられ詮方ゐくて吾を欺き危餓の難を遁れしもゝゝの知らぬ事とゝ盲ゐゐら惡を佐て姑くも孝子ゝ心を苦めしゝ我大ひゐる過ちゐり而其身の父といふゝ何國の何人ゑて何とゐ呼れ又奈何ゐる緣故ゑて美佐崎とやらんゐ討れ給ひしやと問ゐけられて季春ゝ又思ひ出と露時雨ふりゐし綜ゝ頓末を詳ゑ告て三條の金商人橘内ぞの子に橘次と呼ふと聞て辨慶も大きゑ駭き扨ゝ嚮ゑ聞し橘内ぬしの子ゐりまゐよしゝ〳〵此うへゝ其身ゐ一臂の力を添へ太郎を討ぜゝ我も又江湖上豪傑に笑はれゐん義を見てせざるゝ勇ゐし心易ゐれ橘次ぬしと最憑もしく聞ふるゑ橘次ゝ深く感伏し我眼ありゐぞら英雄を認らぞ最前よりの不禮の段々もゐし給へとゐりけれゞ辨慶も何の否苦ゐるべきとて此夜ゝ夜と〻もゑ文武を談じぬ斯て其翌の日辨慶ゝ橘次ゐ

「怪我し玉ひぞ耕作ぬし這奴ゝ正まく盗賊ゐて燈火を消して其許と待ころして物を取らんとせる大膽不敵の僻者あれ「ヤア盗賊等とゝ舌長あれ爾云汝ご盗賊にて美佐崎太郎ご同類あらん這奴ご在家を疾いへと勢ひ猛く詈る主人は法師ゝ尚も動ゐぢ奈何旅客心をまづめて聞給へ此法師ゝ全たく爾る類の怪しき人ゐあらぢ強盗強奪と思ひ違へて跡で後悔し玉ふあと辞を和めて說諭すと橘次ゝ尚も疑ひ解ぢ主の法師を確と努目汝も賊の部下よて餅は中へ毒を和し既に吾儕を殺さんと計りしのども遅強く鼠は喰て死しゐる故汝ご毒手ゝまぬのれゐり両個とも ゐ懲悟せよと聞て主人ゝ眉を顰めそゝ何といふ最前は餅の中ゐ毒ありとの扱い此奴めご吾儕を殺し寄進の金を奪わん爲の計略ゐてありけるかとさとる折ゐら山は端よはやさし登る月代よあり〳〵見ゆる庭の隈梢に怨て怪まの人影橘次ゝそのさぢ礫の銑劔呵呀と叫びて梢より飛び下る一個の曲者逃んとそるを彼法師襟髪掴んで曳よそれゞ大力無双ゐまめつけられ眼飛出死ゐりける當時主は法師両個よむゐひ先迭ゐ白刃をおさめて吾云事を聞給へ最前は餅よ毒の有たれゞ旅人ゝ吾儕ゝ賊ゐりとして燈火を消まて俟給へば和子ゝ又旅人を却て賊と怪む更ゐ理ゐきよゐらねど彼餅よ毒ありとゝ吾儕も絶て是を知らぢ知らざるもゐゐ其身よそーめぬ素彼餅はそれゐる黒塚は杉六と呼べる棍悪ご畫の程携へ來て吾に與へしものゐり這奴ゝ此邊りよ名ゐ〳〵る無頼子よして平居袁彦道をれみ樂める白痴ゐりしごいつよ變りて亡父の忌日ゐればとて吾よ與へしも へ最も殊勝ある事哉性ゝ善ゐりと流石虎狼の心よも親の忌日を思ひ出て出家ゐ物を與ふるとゝ鬼の眼ゐ涙とやら心は中よ感せしのど物ほとくも ゐらざりしも へ庖厨の棚よゐげて置し者ゝ這奴餅のゐゐゐ毒をいれ吾儕を殺まて寄進の金を奪ん伎倆でゐり獨よも聞へまいらせし如く吾儕はもと播州書寫山の麓ゐて耕作と呼べる農夫ゐりしご故有りて剃髪し國々は靈場を順拜し去年より此ゐ住そしゐり又此法師ゝ吾姪の子ゐご中は關白道隆卿の後胤熊野は別當辨正ご一人子よて書寫山ゐ成長り叡山よ勤學せし西塔の武藏坊辨慶といへるゐり甲夜ゐはゐらぢ隣邑へ行んとしたる其道よて辨慶よ環會先よ庵へ歸せしを其身ゝ賊と思ひ違へて縛の此ゐ及びしゐりと誠心詞ゐ現るれゞ橘次ゝ少まく疑念をはらせど猶辨慶よ打向ひ其辞ゐ僞もゐるまじけれど日外下野にて伴ひ行し侍こそ俱不戴天の我仇ゐり其行衛をゞ知てゐらん疾語りてよと聞ふるよ辨慶暫時考へて爾いはるれゞ此身よも覺へゐり日外野州よ飛錫は折ゐら高野は庄の辻堂よ少刻憩ひて在ける處へ年最若き武士の途よて賊ゐ遇りしも へ救ひくれよと余義ゐく賴み不便に思ひ徜堂よ隱して危難を救ひし上暫ご程ゝ伴ひしご渠ゝ越後の國のゐたへまかるとて淺香山のこゐたよて互よ袂をわのちゐり奈何ゐも其名ゝ美佐崎とゐ呼びし扨ゝ這奴其そぎり盗賊よ遇ふとゝ詐りよて其身ご父を殺害まて捕人は者ゐ取つめられ詮方ゐくて吾を欺き危殆の難を遁れしも は知らぬ事とゝ盲ゐごら惡を佐て姑くも孝子は心を苦めしゝ我大ひゐる過ちゐり而其身の父といふゝ何國の何人よて何とゐ呼れ又奈何ゐる縁故よて美佐崎とやらんゐ討れ給ひしやと問ゐけられて季春ゝ又思ひ出そ露時雨ふりゐし縁は頭末を詳よ告て三條の金商人橘内ご子に橘次と呼ふと聞て辨慶も大きよ駭き扨ゝ嚬よ聞し橘内ぬしの子ゐりまゐのよし〳〵此うへゝ其身ゐ一臂の力を添へ太郎を討ぢゝ我も又江湖上豪傑に笑はれゐん義を見てせざるゝ勇ゐし心易ゐれ橘次ぬしと最憑もしく聞ふるよ橘次ゝ深く感伏し我眼ゐりゐごら英雄を認らぢ最前よりの不禮の段々もるし給へとゐりけれゞ辨慶も何ゐ否若ゐるべきとて此夜ゝ夜と〳〵もよ文武を談じぬ斯て其翌の日辨慶ゝ橘次ゐ

向ひ爲補い越後へとて行たれば今よりして侶共よ越中越後の間を探し夫より都へ赴べし這奴も
と都の者とし聞ば燈臺下闇らしと俚言の如く都よ恐び居んもしれぢ今諸國よ群盜蜂起し郡縣を
掠め黃白財寶を奪ひ取ること袋の物を取るお異あらぢ太郎爲補身此よるべあきま〳〵お竟おい渠
等ご群よ入らんい必定あればあの〳〵其身罪騎よて向ひ給はんい雞卵を以て大石よ當るよひと
し我拙しと雖幸ふして山を拔鼎をあぐる此力あり且敵山おのりし日深山幽谷お入て十般の武藝
悉く其蘊奥を自得せり我助太刀をおそのらい百萬騎此强敵ぬりとも恐るゝお足らすとそれより
橘次と兄弟の義を結び耕作法師よ別れを告て越後路へ赴ぬ却說辨慶橘次い越後路より加賀へ出
行きて山城よ至る其道ぞごら專ら美佐崎ご行衞を探し求るといへども更よ其衞跡を知らぢ茲よ
おゐて辨慶い吃と一箇此計を案じ橘次と叫くい這奴奪ひ取たる阿鳴丸を帶しおらんい必定あれ
ば我云々の打扮して夜毎よ都五條の橋お至り千人斬と準へて武士と見れば引捕らへ其帶釵を改
めあば敵を搜るの捷徑あらんのといふよ橘次も尤あり我も竊よそれ邊りを徘徊して若や營お出
會ば本望を達せんことと只此一擧よありと兩個志めし合せてそれより辨慶い頭巾を以て面をつゝ
ミ例此刄の四尺柄も四尺の大薙刀とも見まごふばかり此打物を小脇お のいこと黃昏ぞぐる頃よ
りも五條の橋に至り待程よ橘次も精悍しく打扮て其邊りを彷徨り人や來るのと窺ふうち武士と
さへ見る時い矢庭よ捕らへて刀を奪ひ拔放してあらゐむれどその打扮と勇氣よ怖れ風靡して逃
るもあり又拔合せ二三合戰ひ遂よ のあはぢして刀を捨て走るもありされど辨慶素よりして刄よ
血ぬるを好まぬものゝら逃るものをば强て追はぢ落たる刀を改むれどそれぞと思ふものもあく
既お九百九十九人にこそい及びける頃い水無月十七日辨慶橘次は五條の天神よ詣で何卒敵の行
衛をさらしめ給へと丹誠を懲らして祈念し偖例の如く五條の橋よ立出て風凄じく更る夜よ通る
人をぞ待居ゐり既よそ此夜も明ごゐの山頭の鐘もすきまの月の光り輝く月の夜よきゐる鎧い黑
皮の威お おどす大鎧草摺長よ着おしつゝ從來望む大薙刀眞中とつて打のつぎもらり〳〵と出ゐ
る行粧奈何おる天魔鬼神おりとも面をむくべきやうおらじと我身おのらも物頼もしく佇立適々
遙よ笛の聲とるおぞ辨慶耳を聳て面白や小夜更て天神へ參る人のふく笛い法師やらん男やらん
疾く來よのしと橋板をとゝろ〳〵と踏おらし今や來ると待居ゐり

第拾壹回

袂を別て豪僧西國に赴く
涙を瀝で孝女寃家よ仕ふ

命い塵芥より輕く義い金鉄よりも重しと扱も武藏坊辨慶い義よよつて橘次季春を扶けそれご父
此仇たる美佐崎の太郎爲補を討さばやと洛五條の橋お おゐて千人斬をおし阿鳴丸此太刀をたづ
ぬるといへども是ぞとおもふ刀もおくそでよ其數い九百九十九人お及び今一人そと明ごのたちの
く待をりのらはるのよ笛の音葉調ときこもるおさてこそと例の柄も四尺刄も四尺の大薙刀をも
て橋板をつきおらし今やおそしと待のけたり笛の音漸々おちのづきてこゝへ來る者を何人おり
やと月かげよそのしきれば白き淸衣をのつぎゐのやのおる足駄をはき手よ一管の笛をゐづさへ
悠々とおもを來るよ女子おやと熟々をるよ左いおくて虎の皮の尻鞘のけたる太刀をはきたりさ
てい平家の靑公家ばらの公達ご漫行おやらんぢらんいで一刧のしおびやかしてくれんぢと長
刀を水車のごとくまいして擊てのゝるに彼小冠者い自若として驚けるけしきもおく身をひらい
てとび上るとゝへしご忽ち欄干の上おといまり猶笛をふきゐたり辨慶おれを見惡き小冠者ご進

退のおとまたもや長刀とりおをしゐゝ一薙よおぎ仆さんとする時再び沈んで下をくゝゝ手ばや
く笛を納め小太刀を引ぬき辨慶よ切てかゝるこおたもそのさき長刀ゐてこれを丁とうけとめ千
變萬化ゐ戰へども彼小冠者ハゐゝこれ蝶鳥のごとく上をはらへば下をくゝり下を切ればとび上
り前よゐるのとそれゞ忽然として後にゐらはれ流石の辨慶ゐしらひのね四度路よおつて見も
所を小冠者得たりとちのよりて長刀てうと打おとせゞ南無三寶とゝらんとする諸臈けられて頭
轉撞ゐりのこつのんでおしふせて聲あらゝげ此ほど五條の橋ゐおいて怪しき打扮をおし道行人
をおやまを曲者ありとき〳〵て我わざ〳〵きゐりてうかゝひをるゐきゝしゐ遂はぬ汝ごの進舞抑汝
は何者おれゞ斯往來のさまたげをおを白波綠林ゐゐぐひおらん梁上よを君子ありと彼陳寇ごの辞
のごとく汝もさだめしむのしい由緒ゐる人の子おらんに已か心のまどひより斯路傍ゐゐつて斬
取强盜をおをとをだれゐる世の習とい云おごら最ゐさましき活業おらをや吾今汝ごの首を斬て道
もく人の後のうれひをはらはんといおもへども汝の力量速伎中々尋常の者ゐゐらざれゞ吾不覺
ゐ刃を加ふるよ志のびを疾々そ此來歷をのゐるべしと威風凜々として水のおごゐる〳〵ごとく述玉
ふよ辨慶心中よ大きよおどろきおれ寔よ只者おらをと下より辞をいだしていへらく我い必を罪
おき人をころし貯へもてる黄白調度を奪ふ放馬賊山客おんとのゐぐひゐゐらを然れゞ千人きり
といい號れといまだ一人をも殺したるとおし只帶劍おす者をとらへてそれごの刃をゐらゐむるのを
是いこれふのき緣故ありて一朝一夕ゐ語りつくしごたし我おそらく人に後れをとりたるとおき
ゐ君いまた總角よわたらせ玉ひおごら斯出沒自在よして兵法よ熟練し玉ふとさらよ人間業よゐ
らを抑何人の公達よましまそのゐはれゆ名をゐのさせ玉へのしそ此後愚僧ごの俗姓をも名乘きを

せまいらせんときくより小冠者打黙頭今い何をのつ〳〵まん賣我こそい左馬頭源の義朝ごの八男鮫
馬よおいて成長し源九郎義經おりと名のり玉ふよ辨慶きくよりふた〳〵びおどろきさていい噂ゐき
〳〵つるゆ曹司義經公ゐてましませしのされば こそ辨慶つれごおよばざりしも理りおり我とは大
職冠鎌足公の末孫熊野此別當辨正ごの庶子幼名生佛丸今改て西塔の武藏坊辨慶とヤい我おとおり
とき〳〵給ふより義經公も辨慶を引おこしその緣故をたづね給ふゐ辨慶とびしさつて躋踞き我儕
いとけおきをりのら痴鈍不具よてゐりし身の母の情妻此一念ゐ年頃の沈痼終ゐ本復おしそのゞ
ゐすてよ出家せし首尾い箇樣々々又此度此所よおいて千人ぎりをおを子細といふい爾々おりと
二荒山此麓よて惡棍ともらす美佐崎此太郎爲祐をかくまいしとよりして安達ごのはらの一ッ家ゐ
おいてはじめて樹次ゐ環合ひ仇とあやしめられしこと耕作法師樹内袖衣唐立陵之助等ごのことま
で遺もおく物ごたるよ義經公も頻ゐ辨慶ごの義心を感激ましまそゐ辨慶ふた〳〵び義經公よ向ひ我
往昔書寫山よおいて夢の中よ一人の老僧つげてはたまいく汝ゐまさる者おらばそれよしたごのひ
順を扶け逆をうち蓋世の功を立おばおの〳〵よ佛よつをへ經をよを作善供養よ勝るべしとおし
へ給ひし言の葉ゐ露ゐごのはざる今日今宵何とぞゆ家臣此はしよも居らしめ給はらばよしや命い
鯢鯨の嗔ゐさらし苦ゐ寒戈をまくらよそるとても仁義禮智信忠孝の七ッ道具を脊よおひて那里
までもゆ俱して軍よりいて〳〵軍よいる月ゐ名た〳〵る武藏坊と末の世までもくもりおき名を万天
よかゝやのさんこそた〳〵願はしうこそはべるのしとおもひこんだる形相ゐ義經いよ〳〵感激ま
せし〳〵實や万卒い得やをく一將い得ごのたしと苟くも吾平家の强敵をほろぼし父此うらををはら
さんとをるをりから辨慶ほどの勇士を得んと悅び何ごのこれよをのんといふける折から橋のほと

りの木立は中ゐ聲あつて源氏の殘黨義朝はわそれぞゐを牛若丸それぞの謀反ょ組あそある辨慶と
やらんいふ僞法師いで六はらへ注進そるまつておれよと高やゐゐよばはりてゐけいでんとそる
者あるょ両人い愕然とおどろき頭をめぐらして是をそるゐ年は齡二十三四色白く目秀で適れの
豪傑身ょは腹まきして あごき二こしを佩たりこれ別人ゐあらぎ橘次季春ょてありけれバほゝゐ
て眼を悲らし其許あどてさる腹ぐろきことを宣ふや素より其許い平家ょうらそもあく源氏ょ恩
もあき身あごら人のうれひをもて身は榮花をはのらんとい日頃ょにげあき心のあよしさもあら
ばゐれ今までのよしそも今日のぎりありいで辨慶ご忠義の手はじめ此長刀は殺人刀引導わたし
てくれんぎと敦圓あらくそでょ長刀をおつとりのべんとそるより橘次い慌忙ておしとゃめ師兄
のあらぎはやまり給ふことあかれ我儕今は此ごとくいへるい全くあしき心もていへるょ非ぎ今平
氏さのんふして草木もあびきえたごふあのあるゐ更たけ人定りて外ゐきく人あしといふとも人
は耳みそ聲ゐ付石はものいふ世は中ょあゝる道ばたょおゐて苟くも浮曹司の浮姓名をゐのし大
義を相譚給ふといと危しとおもふものあら心ゐもあらぬ唐突の辭を發して君を諂諛したてまつ
りしと小子ごの寸志ょ候のし今これある辨慶ごものゐりょて委細いきこしめしさふらひし三條
は橘次季春と申湖命は者ゐ候あり此後とも何卒浮目を掛給はれかしと身を謙だりてのべけれバ
義經公あゝめあらぎよろこばせ給ひさてい金賣橘次とい其許ごゐとゐてありけるゐ父橘内をう
ゐれさこそ無念ょあらめ此身ょつまされ一入汝ご心中察し入と數行の涙ょくれ玉ひぬ左右する
まょすでょ雞明曉きを報じ東の山の端しらそわたらんとするょおどろのされ両人い浮曹司を誘
ひて隱家へこそ立還りぬさてもその次の日ょいたりて辨慶い橘次に對ひていふやう我々斯まで

心をつくせど太郎は踪跡しれざるのらいもはや遣奴畿内にいおるべからぎ今一度陸奥を探求せ
んこそ肝要あり幸ひあるかゐ義經公ふた〳〵び奥州へ下行し玉はるとの浮底意あれバ其許浮曹司
を守護あしまひらし侶共ょ陸奥へくだり玉いゝ敵の行衛き〳いだす便もあらんゐ我い今よりゐ
まねく西は國々を偏歷し何ごきゐもあれ義經公旗あげし玉ふときくときい第一番ょはせ付て高
名手からをあらいさんとおもひいあり左いゐれと其許も義經公も美佐崎ご面を見しり玉はざる
こそ難義あれと頓て筆墨をとりいだし太郎爲祐ご面体恰好を詳ょうつし是を橘次ょさづくるょ
義經公も嶋はし感激しつたへあく堯い夢ゐ傳説をそてこれを姿繪ゐうつさしめて終ょ其人を得
りとそれい賢人是い讐敵善惡邪正とのはれども姿繪ょよつて橘次ご本意を達せんと是偏に辨慶
ご勳しありと宣ふゐ橘次い手ゐとりあげて西視東視て大きによろこび頓てこれを旅行李の裏ょ
おさめける斯りけるほどょ辨慶い義經公ゐ橘次ごことをゐのそきこへふた〳〵び洛の隱家を出て
涙花へくだり西國さして赴きけれバ橘次い義經公の浮供あし奥州へこそいそぎける○話分両頭
こゝゐ三位中將重衡卿ゐ両個の愛妾おわしぬ一人を雄蝶の前とおづけ五條大納言邦綱卿の浮娘
ありまた一人雌蝶の前とよへり二人とも翠黛紅顏は粧ひ花より猶芳しく玉の簪し照月のそごのた
ゐたりも輝くばありあれバ重衡卿の寵愛ごのざりあし此雌蝶は前といへるい武藏の國の住人澁谷
莊司重國といふ源氏の侍の娘ありしご斯平家盛んゐ源家い日ゐまし衰ふる世の中あれバ父ゐる
莊司重國い名をうづみ跡をかくしそこよこ〳よと吟呻しご一歲都堀川のほとりある逆旅華屋義
平といふ者の許ゐて病床ょ臥して略費ゐいつきはてとやせんのくやと案じわづらひければ雌蝶
の前此比は名いいまだ胡蝶とよびしご精俾しく父ご枕邊を離れぎ介抱尊閑あらざりしのと年比

此辛苦といひ旅のつかれゝ病ゐ日ゝましおもり價ひ尊き藥をもちひざれゞ所詮本復せんことか

○おひごのたしと醫者はいふゝ胡蝶ごの孝心ふかきゆゑ遊女ゝありとも賣て

父ごのくすりの代を調へんと竊ゝ主義平ゝ云々のことを相語ふゝ義平ゝきゝて胡蝶ごの孝心はほど

を感じ左までの金ゝもあらざるべきゝこのゝる孝女を川竹のあごれゝ忘づませんもいと不便あり

此娘美目のたちうるはしく人品も賤しからぬゝ同じくあらゞ堂上方あんどへ宮つかへさせゞや

と其よしを胡蝶ゝもかゑりきこそるゝ胡蝶ゝあるじか情けなる詞ゝいとゝうれしくもし君の浮

情ゝて肌身をけがさぬ由緒ある人は家ゝ宮づかへしはべるとあらんゝはたらはぬ水仕の業もも

のゐ生々世々は浮鴻恩ゝはべるのしとあるとだと俱ゝ願をけるにぞ主人ゝもつはら遠近をはせ

あるきてそれ事をこゑらひけるまかるゝ一日重衡卿北野へ參籠の歸路此ほとりを通らせ給ひて

不圖胡蝶のすがたを見そめ近習は青侍をして何者の女ありやと問せ給ふゝ此ほどよりこゝは逆

旅ゝ逗留してある所の浪人の女ありとゆゝ然らゞ黄金をあゑへて我嬖妾ゝせんと私ゝ遊旅の主

人をよびて云々のことをかゑらひたまふゝ義平大きゝよろこび胡蝶の孝心の志操のことあんどを

きこへ申げ頓ゝ承引けれゞ重衡卿も浮よろこび斜ゝあらぎやごて浮歸館まし〳〵ける義平ゝ胡蝶

を一室ゝまねき此ことをこゑりけるゝ胡蝶ゝ始終を聞きて心の中ゝおもへらくわごの父莊司ぬし

ゝ原源氏あれゞよしや今斯奴々しくありたまふとも娘を平家の嬖女ゝはそべのらぎさりとて妾

今これをいあまゞいつこの黄金を得て父ごの病は本復せる期ゐるべき樣あしたとへは常磐浮前ゝ三

人の子は命を助んとて現在の仇ある清盛公の側妾とあり貞女を捨て貞女を立給ゑる例もあり彼

ゝ子は爲ゝ小夜衣は夫をこのさね妾ゝ親のためゝ此身をそて〳〵冤家は平氏ゝ仕ふるとも豈常磐浮

前ゝ恥ざるべきや然ゝいへ此よしを白地ゝ父ゝかゑらばよも快よくゝもるそまじ宿由緒ある人

は家ゝしばしごのほと宮づかへをと詐りてその後左も右もまた詮術のあるへしと心一つゝおもひさ

だめ主人義平ゝ打對ひてその淺のらぬ志しのほとを喜ゞきこへ急重衡卿は許ゝやりてよと言ゝ

義平ゝ打點頭やごてそは次の日胡蝶は髪をとりあげさせ重衡卿は館へいでもきこのくと言ひ入る

〳〵ゝる重衡卿よろこばせたまひやごて約束のごとく黄金若干を賜ひけれゞ胡蝶ゝ是を莊屋義平

ゝ遞與していふやう妾のあらぎしもこ〳〵ゝあるとをゞ父ゝつげ給ふゝ只西國ごゑのよまゝある人

ゝ倡はれてくたりぬと跡ゝてつげて給はれとくれ〳〵もたはをきこへければ義平ゝおそだゝの

らそは心を得て黄金を携へこのへり胡蝶ゝ代て莊司ごの病をことり價ひをゑらまと妙藥を用ひけれ

と莊司ゝ竟ゝはこのゝくゝありゝけれゝ義平ゝあく〳〵野邊送りのことゝとのたのごとく營をはて

〳〵後ゝ此よしを胡蝶かもとへいひおくりけるゝぞ胡蝶ゝ天ゝあくごれ地ゝのゝおしをけれと詮術

あく跡懇ろゝ弔ひ猶内緣の伯父ゝある播磨の國書寫山の學頭觀慶阿闍梨の（辨慶は師ゝして莊司

重國ごの兄也）もとへ消息ゝ黄金をそへて云々はよしをつげこしまた彼むぐらやへも黄金卷絹く

さ〳〵の物を贈りて父ごの永々介抱ゝ遇ひし惠ををむくひける莊屋義平ごの話し此下ゝあしのくて

胡蝶ゝ重衡卿の嬖妾とありしより幾程もあく其寵愛他ゝこゑて名を雄蝶の前ゝくらべて雌蝶は

前とあらゑめ玉へしと其寵遇雄蝶はまへこの上ゝありて六宮は紛黛もこれの爲ゝ顏色あきのこと

くあるゝぞ雄蝶のまへゝ心は中ゝ這奴素性賤しき身をもつて我と肩をあらべ諸人の尊敬ゝあふ

こそ易からねと人忘れを嫉妬は胸を焦し玉ひけるこそ可笑けれのくてほとあく雄蝶雌蝶のふゑ

りゝけしきばそて酢物を好ませ玉ふゝ徑に典藥の頭を召して診脈をさせ玉へゞいつれも浮懷姙

此辛苦といひ旅のつゐれよ病い日あましおもり價ひ尊き藥をもちひざれば所詮本復せんことか
○あひぐのたしと醫者此いふよ胡蝶ご孝心ふのき者あれい此由をきゝて此身を遊女よありとも賣て
父ごのくとりの代を調へんと竊ゐ主義平よ云々のことを相語ふよ義平いきゝて胡蝶ご孝心此ほど
を感じ左までの金ゐもあらざるべきよのゝる孝女を川竹のあごれゐ志づませんもいと不便あり
此娘美目のたちうるはしく人品も賤しからぬよ同じくあらば堂上方あんどへ宮つのへさせばや
と其よしを胡蝶ゐもかゐりきのとるよ胡蝶いあるじか情けゐる飼よいとゝうれしくもし君ゐ沒
情よて肌身をけごのさ也由緒ある人此家よ宮づのへしはべるとあらんよはたらはぬ水仕の業もも
のゐい生々世々此沒鴻恩よはべるのしとあるとだと俱よ願をけるにぞ主人いもつはら遠近をはせ
あるきてそ此事をのゐらひける志かるゐ一日重衡卿北野へ參籠の歸路此ほとりを通らせ給ひて
不圖胡蝶のすごのたを見そめ近習此青侍をして何者の女ありやと問せ給ふよ此ほどよりとゝ此遊
旅ゐ逗留してある所の涙人の女ありとヤよ然らば黄金をゐゐへて我嬖妾よせんと私よ遊旅の主
人をよびて云々のことをかゐらひたまふよ義平大きよよろこび胡蝶ゐ孝心の志操のことあんどを
きこへあげ順ゐ承引ければ重衡卿も沒よろこび斜あらぎやごて沒歸館まし〳〵ける義平い胡蝶
を一室よまねき此ことをのゐりけるよ胡蝶い始終を聞きて心の中よおもへらくわご父莊司ぬし
い原源氏あればよしや今斯奴々しくありたまふとも娘を平家の嬖女よはもべらぎさりとて妾
今これをいあまばいつの黄金を得て父ごの病此本復もる期ゐるべき樣あしたとへは常磐沒前い三
人の子此命を助んとて現在の仇ある清盛公の側妾とあり貞女を捨て貞女を立給ゐる例もわり彼
い子此爲よ小夜衣此夫をのさね妾い親のためよ此身をもて〳〵寃家此平氏よ仕ふるとも豈常磐沒

前よ恥ざるべきや然いいへ此よしを白地よ父ゐかゐらばよも快よくいもるもまじ留由緒ある人
此家ゐしばしごのほと宮づかへもと詐りてその後左も右もまた詮術のあるへしと心一つゐもひさ
だめ主人義平よ打對ひてその幾ゐらぬ志しのほとを喜びきこへ急重衡卿此許よやりてよと言ゐ
義平い打點頭やごのてそ此次の日胡蝶此髮をとりわげさせ重衡卿此館へいでもきのくと言ひ入る
〳〵ゐる重衡卿よろこばせたまひやごて約束のごとく黄金若干を賜ひければ胡蝶い是を葺屋義平
ゐ遞與していふやう妾のゐらぎしもこゝゐあるとをば父ゐつげ給ふゐ只西國ごゐのよまゐる人
よ倡はれてくたりぬと跡よてつげて給はれとくれ〳〵もた此をきこへければ義平いゐをだゐの
らそ此心を得て黄金を携へのへり胡蝶よ代て莊司ご病をことり價ひをゐらまも妙藥を用ひけれ
と莊司い竟よはのゐくゐりゐけれい義平いゐく〳〵野邊送りのことゐとのたのごとく營をはて
〳〵後よ此よしを胡蝶かもとへいひおくりけるよぞ胡蝶い天ゐ百くごれ地ゐのゐしをけれと詮術
ゐく跡懇ろよ弔ひ猶内緣の伯父ゐる播摩の國書寫山の學頭觀慶阿闍梨ゐ（辨慶此師よして莊司
重國ごの兄也）もとへ消息ゐ黄金をそへて云々此よしをつげこしまた彼むぐらやへも黄金卷絹く
さ〳〵の物を贈りて父ごの永々介抱よ遇ひし恵ををむくひける葺屋義平ごの話し此下よゐしのくて
胡蝶い重衡卿の嬖妾とゐりしより幾程もゐく其寵愛他ゐこゐて名を雄蝶の前よくらべて雌蝶此
前とゐらゐめ玉へしと其寵遇雄蝶此まへの上よゐりて六宮此紛黛もこれの爲よ顔色ゐきのこと
くゐるゐぞ雄蝶のまへい心此中よ這奴素性賤しき身をもつて我と肩をゐらべ諸人の尊敬よゐふ
こそ易からねと人ゐれぎ嫉妬此胸を焦し玉ひけるこそ可笑けれのくてほとゐく雄蝶雌蝶のふゐ
りいけしきばそて酢物を好ませ玉ふよ徑に典藥の頭を召して診脈をさせ玉へいつれも沒懷姙

よ相違あしとやよそ重衡卿の沙喜びあゝめあらぎそでよ八月ゐ及びければ何卒男子平産あるやうゐと佛神へ禱り諸寺諸山へ加持祈禱奉幣ゑ沙いのり有るご中ゐも雌蝶のまへい書寫山へ文よ。て爾々ゑよしをきこへつゝごあく安産あすやうよといひつゐはしけれゞ觀慶阿闍梨い一トゐゑあらぬ姪のゐゑをあれゞ一山へゐくとふれ流し衆徒を集め檀をきづき三七日ご間安産ゑいのりを修行し玉ひける雄蝶ゑまへのゐゑにい此ことをつたへきゝやごて沙父大納言のもとへ此よしをいひ送りけれゞ邦綱卿もきこし召し倘我娘公達をもうくるともあらゞ我とても外戚の威をふるはんものと有德ゑ權者をねらをけるゐ敵山西塔の豪雲僧都こそい此頃双あき聖人ありといひもてはやそよ大納言い頓よまねきよせて何卒我娘雄蝶のまへ男子平產あそやうよ變成男子の法を修して玉いるべきとゐのをける此豪雲といへるいその心さまひかみて欲心ふゐく破戒無慙の惡僧ありけれゞ大きゐよろこび大納言ゑ膝下ゐすりより聲をひくうしていへらく奈何よものたまふごとく吾大威德明王ゑ法を修しゐゞ變成男子うたごひゐしといへどもも生れ玉ふ時刻雌蝶ゑまへに後れ玉ひて彼方の和子も男子ゐりせゞ當時ことゐ寵愛ふゐき雌蝶のまへゑことゐれいよしや下借腹ゐもせよ兄君ゐ立玉はんい必定せりしのらんよい雌蝶ゑまへの產玉へる若君い弟君と稱せられ自からそゑ勢ひもうそゐるべし然あらんゐ君の沙心底さこそ本意あくおぼしめしあらんかこれのみ愚僧の法力よも及ばざる所ありと心ありげゐヤけれい貴僧の宣ふ所一々吾肺肝をさそのごとしこいいのにしてよゐるへき願くい廣大ゑ憐みをたれて吾們親子の情願のゐゐふべき術をおしへ玉へかしもし吾娘男子を平產そるともあらい貴僧へい莫大の賞金をまいらせんといひけれゞ豪雲莞爾と打笑をゐをも邦綱卿ゑ沙をゝよ口をよせ何ごとやらしばらくさゝやきけるゐ邦綱卿い横手をうつて大ひゐ悅び誠よ此計策奇妙ありとやごて當座の布施物として沙金許多賜り豪雲い敵山へ還し玉ひぬ

第拾貳回

流言を信じて重衡愛妾を疎む
無常を觀じて重元佛門に入る

寔や市よ虎ありて聞と三度よしてはじめて信ぜとゐい恐れても恐るへきい流言の一ッあり此頃誰いふともあく洛中よ噂しけるい雌蝶ゑまへい何卒公達をまうけんと賤しき者ともを選ふ數入是と姦通し其男血氣衰ふるときい綽のもれんとをおそれて竊ゐ是を刺ころしあどゐるとその數をあらぜされゞ此度身でもれる沙胤も全く中將重衡卿の沙子よいあるべゐのらぜよしあき下司下郎ゑ種あり加之らぜ內緣ゐる書寫山の觀慶阿闍梨をたのゝ雄蝶ゑまへゐ懷姙の實ゑ沙胤を呪詛調伏して絕命の法を行はしむ原これ渠い源氏ゑ余類あれゞ斯平家よ仇するありそれとあり給はぜ重衡卿ふゐく寵愛し給ふこそいとゐやふしといひふらしければ淸盛公ゐ召つゐひの彼三百人の童(俗に千人禿といふこれあり)斯と聞て重衡卿ゐ告げ奉つりけれい大ゐ怒り直ゐ平左衛門尉重元を召れ雌蝶ゑ前ご首を討書寫山の觀慶とやらんいふ賣僧めを遮張付よ懸這奴ゐ腹の子悴こそ何奴ゐ胤ゐるゐも知れねゞ腹をゐはき源氏の種の根を斷て葉を枯そべしと敦圓荒く罵りて命じ給ふ此平左衛門尉い重衡卿の幼きより不便を懸られし者よて自ら烏帽子をきせ玉ひ沙諱の一字を賜て重元と呼れけるゐ重元始終を聞てけしゐるとゐ思ひこい心得難き沙掟のあるつとも此ほと街ゑ風說い小子も粗き〻候へど慥ある證據もはべらぜこい全く彼君ごゐのばかり行跡玉ふ威勢をそねとてゐ〻る根おしごとを世にうゑはするゐてやあらんぞらん熟々ぎんゑをとげ玉ひて

後討とせ玉へと辞を盡して諫めたてまつるといへども素より一徹短慮の中將ども少しもきゝ入給はぬ汝いのあれば主の命を叛き源氏に余類をのばふや汝此役目をいおまば難波瀬尾をつのはして雌蝶を殺さるべしと宣ふ平左衛門も詮方あく〳〵委細領掌まければ重衡卿きゝて逼奴館へ入て首うたんも後日に拙判いかゝあり何のゑへも誘ひもきて密ゐうしあひ首にして吾ゐこそべしと宣ひけれゞ平左衛門い力およばぬ直ゑ雌蝶にまへに許ゐ至り偽りていへりけるい三位殿の（重位殿をさゝ）仰ゑ雌蝶の前懷姙の身ゑしてすでゑ八月ゐおよび館に内ゑあらんいさてそ徒然ゑて且衛生の爲ゑよろしのらぬ幸ひ四方の山々も花盛りの頃あれゞ洛外へ花見ごのてらしのびまいるべきよしの沒掟あり則ち沒供ゐはのくゆ平左衛門尉伺候仕るべければその外い牛のひ舍人一両人ゑてくるしのらじと申上げるゐぞ雌蝶のまへい修羅の使と一點しり玉はぬ君に淺のらぬ沒心ぞへのほとてそうれしけれとてとる物も取あへぬ車ゐめされ平左衛門のそを沒供ゑめしつれ玉ひて沒館をねりいで玉ふゑ平左衛門の尉は豫て期したるとあれば地主のさくらや清閑寺仁和寺沒室の方へい行ぬ舍人等ゑ心を得さし松の尾山の山深くぞ誘ひやごのて沒車をとゝめ牛のひ等をばはるのゑふもとに此のゑへ返し雌蝶のまへを車よりいだしたてまつるゐ雌蝶のまへいいといぶのしげゐ四下を見まいし玉ふゐ砥園清水音羽の瀧うゑの中山清閑寺のあたりとおもひに外櫻い爛熳とさきそだれど奈何ゑも深山とおぼしく山又山ゑ鞠へけるの溪水に沒おと耳をおどろのし尾上ゐさけぶ猿に聲い腸ゑを斷つ風情あるゑつゝ〳〵心得ぬ面色ゑてやゑ重元ゑと〳〵いいづくありや竟ゑ見ゑるともおき深山あるに何とてゐ〳〵る所へい妾を誘ひしぞいとおぼつのあし緣故を詳にのゑれかしと宣ふゑ平左衛門いあそだはら〳〵とあごのし寇や貴妃い其美三千の上ゐ

つて寵遇のぎりあのりしときけど終に馬塊ごの塵と成りと盛者必衰の理り誰のれごのるべき今日君を此松の尾山れ奥に浮誘ひ奉まつりしい全く浮遊覧のためゐわらを我君重衡卿い浮説の流言を信じ君を失ひたてまつれよと我に分付玉ふもへ小子さま〳〵理をつくして浮諫め申せしのど一黙ほどもき〳〵入玉はをゐとゐ君い源氏れ余類ゐまましまをよし殿れ浮怒りまを〳〵つよく若吾僧此役目をいゐむときい難波瀬尾ごのごときむくつけき侍に仰せて浮命をめさるべしとの結構あれバ詮かゐゐく所詮浮命い給はるものあらんゐは縁故を審にきこへわげ浮覺期させまし最期の浮念佛をもを〳〵めまいらせばやと此山蔭ゐ浮誘ひ申し益あき雑人們を左右に言こしらへ館へ還しいありとあをだあごらに申けれバ雌蝶れまへい霎時あをだにのきくれて左右れ應もあのりしごの漸くはふり落るあをだをとらひ嬉しき其許ごの志しのあいのよも賤妾い源氏の余類澁谷の荘司重國といふ者れ娘あれど父ごの病を貢ごんためうき川竹のあごのれにも身をまづめんとおもふをりのらおほけあく中將重衡卿の浮目にとまり側妾に申せんとの仰せとき〳〵退糧しても父い源氏よしや高位高官でも平家に此身をまのせんといいゝ父れ赦をまじとそれとゐのさぞ暇ごひ黄金ゐのへての宮づのへ敵にまくらをのはせしも常磐浮前の例のおもひ首尾よく父ををつぎしうへ身いいさぎよく死あバやと覺期きはめて宮づのへも女子心のゐひあくて一夜二夜とそごそうちそれとも志らぬ重衡卿れひとのたあらぬ浮情に竟ほだされて死おくれ一月二月たつ間にゐゐゝあらぬ身とおりしも忽攻て此子を産おとさバすぐゐ此身いあきものと心一つゐ覺悟せり志かるに何人ごの〳〵ることを流言あし妾を罪におとせんといそらおそろしき工をの有條きくもあの〳〵けごらはし又曹寫山の觀慶阿闍梨い妾ごの血すぢの伯父君にましませど當世きこゆる大徳にましませバ何

條呪咀調伏あんどのおそろしき法を行ひ給はん妾今こゝゐて死る命いさら〳〵惜しのらねど若吾あきゐどにて阿闍梨の難義とおらんかとそれのを心ゐの〳〵りはべりまた二ッにい妾ごの腹に含りしい全く重衡卿の浮胤あるに妾今はのあくありあバ腹ある和子もやをのら闇にまよひ給はんとゐいとおしけれと彼もおれも源氏ゐつあごのる妾ごの腹にやどり給ひし浮身の不幸百度千度悔ゐりともさらおその甲斐あるべのらす妾源氏の身にありあごら父ゐかくし君を偽り平家の禄をはをゐるを源氏の守護の正八幡の罰し玉ふと思ふにぞ人をうらをんようもあし言ひおくとい澤あれど女子の愚痴とわらはれあんはや首うてと西ゐ西ゐむのひ合掌してぞおわしまを重元これをそるよりもおつるあをだと袖にはらひさてい君い世上れ噂のごとく源家の余類にまましませしのよしや源氏あれバ迎何かいいとひいべきよしあき人の讒言を賞にようけて懐胎れ君を討にと宣はそる中將とのも主君あれまたその主君につれ給ふ其許り即ち主君あり後美女丸を打ちのねし仲光ごの身も此身につまされ何處に刃ごのあてらるべきせまじきものい宮づのへと古へ人のかこち草も此身に生るとしらざりきと其ま〳〵そこゐ撞と臥し前後不覺ゐとりみだし歎きゐ時を移をにぞ入相つぐる鐘の音とともにちりもく櫻花を見あけて姫いうしろを見のへりあごて重元おくる〳〵やはや日も西山ゐ館のんとして今うつのねい入相を寂滅爲樂ときくのらゐゝ後の世こそゐれもしけれはや疾々とそ〳〵むるに平左衛門いはつと心づき生者必滅會者定離これを菩提と種とおし今より出家入道あし跡懇ろゐ弔ひたてまつらんのあらを成佛あし玉へと氷のごとき刃をぬひて浮後に立まはり彌陀れ利剣と心に念じひらめのそよとをにけるごの浮首いまへにおちにける重元いあく〳〵浮衣れ袖を引ちぎりて浮首をつ〳〵を四邊を見まはをゐかたはらの岩に一つの洞ありて口

いせまけれど奥はひろきい疊七疊もひくらんとおぼしければ是屈竟あり晉姫は浮亡骸を此洞ゑのくしまいらせ一回浮首を重衡卿の實檢ゑそあへて後我僧ご賞ゑのへて申乞ふた〳〵び爰ゑきたりて浮むくろゑつきづはせよろしく埋葬しまいらせん爾あり〳〵と猶心ゑ熟頭ておく〳〵浮亡骸をこの洞の裏へ入まいらせ尚今夜は中ゑ猛獣はついばゑさらんもばおられぞと大ひある石をまろばして洞の口をふさぎやごて浮首をたづさへ館へこそは立歸りぬるくて平左衛門の尉重元は重衡卿の浮前ゑいで〳〵雌蝶のまへご首を浮實檢ゑそあへまうしけるい下官此度の恩賞ゑい何卒永は浮いどまを玉はり且姫の浮首を賜れのしと申しければ遠ゑ重衡卿も恩愛は涙せきづへ玉はぞ平左衛門ごのぞゑゑまのせいとまを玉はりければ重元いよろゑび次の朝ふゑ〳〵び松の尾山にのぼり昨日雌蝶のまへの浮亡骸をこのくしまいらせし洞のほとりゑちのづきて見るゑ雌蝶のまへの首あきむくろのほとりゑ今うまれゑるとおぼしき嬰兒あきゐたり重元いゑ〳〵めあらぞおどろきたちよりていだきあげてつら〳〵見るゑこれ玉のごとき若君ゑてありければ且おどろき且よろおびさてい天孫を出てとほのらぬ重衡卿の浮胤こ〳〵ゑ降誕まし〳〵ゑるそよりて魑魅魍魎もゐれをくらはぞ洞の口をまもりたるゑやゐあらんぞらんこれ實ゑ雌蝶のまへの寃枉をはらゑ證據此上やゐるへき然しあごら今此和子を偽ひのへり重衡卿へ爾々はよしをきこゐゐぐるとも心よのらぬ五條大納言親子ゐるからい此若君は浮行末いとゐやうし不若吾右も左もしてやしあひまいらせあゞ成長ののち浮親子再會はときあらぞやいとそのほとりゑふのく穴をうごち雌蝶はまへご浮むくろゑ首をつぎ合せて是をうづめ上ゑまるしの松をうゑ直ゑ髻りをはらひかは和子をふとところにあし山をくだりもくゐもしれぞありゑける後ゑ俊乘坊重元まいひしい此平左衛門は尉ごのことゑして平家亡び後元暦二年五月重衡卿南都ゑおゐて誅せられ給ふ道ぞごら小野はるゑ里ゑて彼和子とはじめて親子は名はりせさせ給ひしとあとゐりといへともこい辨慶ご傳ゑの〳〵はらざるとあれゞしばらく筆をさしおきぬ

第拾三回

觀慶寃罪六波羅ゑ廣る
武藏坊夢ゑ冥府を闘そ

三位中將重衡卿い平左衛門ゑ分付て雌蝶の前をころさせ給ふといへとも浮怒り倘おさまらぞ彼ご伯父とやらんきこへし書寫山の學頭觀慶といへる賣僧もまさしく源氏の余類あればよしや法師ありとても也るゐせゑあしごたし早く引捕へて糺明あすべしと備前は國の住人難波次郎經遠備中の國の住人瀬尾次郎兼安といふ両個の侫人ゐ仰せければ両人い徑に數多の兵卒を引つれ書寫山ゑ馳向ひ矢庭ゑ阿闍梨を高手小手ゑ縛て六波羅の庭上ゑ引ぞ也るゑ阿闍梨い夢ゑ夢みし心地ゑて更ゐそは行衛をしらぞ難波瀬尾い此ときは觀慶を屹と睨へ汝ご姪とあらん胡蝶といふ者不憐幸を得てゐたじけあくも重衡卿は浮寵愛を蒙りし處這奴却て寵ゑほこり得もしれさる惡少年等を奥ゐ引入これと姦通あして素性賤しき者の種をやとしこれを三位とは〳〵浮種といつはり剩さへ五條大納言邦綱卿の浮息女ゐる雄蝶のまへか懷妊は浮胤を亡者ゐあさんと汝をたのゑ呪咀調伏は法を行ひしよしもつぱら京洛中の風説寔ゑ天ゐ口あし人をもつて言しひると素性しれざる父あし子を勿休あくも重衡卿の浮胤と偽るをもつて天神地祇の京童べの口をゐりて告給ふよし

三位とは〳〵浮怒り甚しく雌蝶のまへをゞ平左衛門尉ゑ言付て結果てしまふたり加之らぞ汝等い原源氏の余類あるよし素性を明し調伏あせし綜の顛末眞直ゐ白狀あし疾々卿ゐ伏をべしときひ

て阿闍梨い漸く首を擡げさてい其事あていひしか宣ふごとく愚僧の俗縁ゐ胡蝶といへる者いひしの渠い我弟權谷莊司重國といふ者ぬ子あるごの幼稚ときわのれてその後絶て音信も聞ざりしごの去頃云々ぬよしよて父ぬ病をみつごのんためゑ是非あく平家ぬ側室とあり懷胎まてあしたるよし何卒首尾よく身二ツゑあらばそれうへゑて自害して死そるとの委細を文よしゑ〳〵めて贈りたれい且憐き且憐を斯佛門ゑいりし身い元より三界ゑ家あし釋をもつて姓とあそ身の源氏平家の差別あけれい姪ごの心を安んせんと衆徒を集めて若君平産の禱を爲しのを人を助るこそ出家ぬ役目あるゑ爭の恐ろしき呪詛調伏をあそべきやこい衆徒等を召よばれて沒吟味有らい明白ゑるべしと憚る色あく言そるゐぞ難波いきいて頭を打搖り否々そい緣者ぬ證據とやらん何ぞ當ゐあるべきや是い定めて雌蝶ぬ前ぬをゑ賴まれしゑあるべのらぞ源氏の殘黨のうちより平家を調伏せよとたのまれゑるものあらん篤言ぞや白狀せぞやいはぬとていはさぞゐおくべきか水攻火せめい愚脅を立わり鉛ぬ熱湯おそろしき攻苦をあしても吐實させぞゑ置べきのと難波瀬尾ごのあざ〳〵ゑ日毎ゑ阿闍梨を圍圖より引いだしさま〳〵攻さいあむといへとも〳〵とより出らざるとといひ悟道を獲明したる大德ゑましませば只口をつぐをて何事をも應へ玉とぞ斯りしほどゑ絶いり玉ふといくたびといふことあく今い菅霜夜ゐよはるむしの音のいと幽のゐありもて行殆々玉ぬ緒も絶あんとそ小松ぬ内府重盛卿い始て此とをきとしめし大きゐおどろかせ給ひ書寫山ぬ觀慶阿闍梨い當世の大德ゐまし〳〵て調伏あんとの邪ある法を行ひ玉ふべき人ゑあらぞ雌蝶のまへとやらんもはや討れたるうへい詮術あし觀慶阿闍梨いよしや源氏ぬ余類ゑもせよ幼より佛門にいり給ゑるのらい何のくるしのるべきと父清盛の沒前ゑいで〳〵云々のよしを演說して阿闍梨ぬ命

を乞ひ重衡をめしてはやく阿闍梨を赦しまいらすべしと命じ給ふゑ重衡卿い詮術あくまぶ〳〵其旨を承諾あすといへとも猶心よからぞやありけん備中の國へ配流あそべきゑぞ極りける却說西塔ぬ武藏坊辨慶い繼ゑ洛ゐて義經公樞次ゐわのれそれより足ゐまゐせて普く西の國々を經廻り一年ばのりを過て治承二年秋の頃ゑやありけん肥前の國雲仙ヶ嶽のふもとをよぎりけるごの不圖道をふを遂へそでゐ黃昏ゐおよびけれい奈何いせんとゐたりを見まはそゑ一軒の繼堂ありけるゑぞこれさいはひとゐちよりて見るゐ雨露の爲ゑむあしくのきばかたむきてゐんくちて草茫〻と生茂れり辨慶い例の禪杖を力ゑまづ椽ぬ上ゐのぼりて朽そんじて斜ある狐ごのうしをおしあけて裏ゑ入てこるゑ堂ぬ中央ゐい石もて彫める地藏尊を安置したれと誰れ詣る人もあしとそゐてのけあらべゐる絵馬いゐのぐはげそんじて願主の名さへもおぼろあり武藏坊いつら〳〵此形勢をそて佛前ゐ額き南無や歸命頂來六道能化の地藏尊母山ぬ井義婦玉苗そぬ外源氏ぬ諸生靈頓証ほだいとふしあごのを今宵い佛の堂をのり一夜をゐかさばやと端座合掌して念佛とあへてゐたりけるはや深々とふけ行夜半ゑ遠のあたゑて人のさけぶ聲きこもるゑ辨慶い耳をそばたてハテこゝろへぬ小夜更て人跡まれある此ふもとゑ人聲ぬきこもるい正しく此邊りゑ盜人の栖家あんどあるとおぼし行てそばやと頓て堂をいでゝさけぶ聲をしるべゐゐとり行ゑ風ぬ吹まいしゐやその聲或いとをくゐとへあるひい耳のもとゐわきこへてさらゑその所ゐいゐらそこいふしぎや狐狸妖怪ぬ所爲にもむよその正体を見極すして歸らんも口惜しとつたゐづらゐ取つきて羅ゐのぼり谷ゐくだり其所此所とあくたづねもきしゑ漸くゐして平地ゐ出たり向ふの方をとをれば一人の老法師ゑ手ごのせ足ごのせをはめ惡鬼羅刹ぬごとき異形の者鉄ね杖をあげて攻さいあむゐ

ゼ辨慶大きゐおどろきつら〳〵彼老僧の面をそるゐこれ何に我師父書寫山ハ觀慶阿闍梨よてゐ
わしけれバ且おどろき且ゐおしとそでよどび出んとせしゞ西々世よいよたる人い幾千もあり我
師い書寫山の學頭よまし〳〵て當世の大德ゑり何の罪あつてゐこ〳らあたりへきて斯る呵責を
受玉はん樣ぞおし必定人違へゐるべし然るゐても此法師い齡い古稀ゐ近からんとおぼせるゐ奈
何ゐる罪をゐ犯して這奴等ゞ爲よ斯ハゞときの杖うくるとゐや加之らゞ這奴等ゞ相貌をいめて
醜惡ゐしてさらゐ人間ハゑぐひよゐゐらゞうたゞのふらくい妖怪變化ふいゐらぬゐ何はどもゐれ先
しのびてその頓末をうゐいをんと尙水ゐげゐふ〳〵ゞをて見るよ頓て彼者どもい老僧よ對ひ扨
もおぶとき法師ゐゐ大王の御前ゐ引ゞり行淨破璃ハ鏡よゐけて白狀させいでおくべきといひつ
〳〵引立もくに應てすこし朗ゐゐる所よいてたり爰よ一ッの樓門あり彼門入い法師を引て此門ハ
裏に入りゑり辨慶い是を見ていよ〳〵不審しそゞもこ〳〵は何處よして此一ト攝い何人の住家よや
と打ゐふきて是を見るゐ一箇の偏額をかけて閻羅宮の三字を書しゑり茲よおいて辨慶おほひよ
驚ろきさてい我いいつのまゐやら死してこ〳い冥土ゐる閻王宮ゐりけるゐこい奈何せんと志ば
し忙然として佇立ゐたりし折ゐら門の裏より一人の官人巍然としてゐもゞきたるよ辨慶いちゐ
くよつて問ていへらく今ゐやしき二人の者一人ハ老僧を引立きゑりて門内へ入しゞ彼老僧は何
等の人よしていゐゐる罪をおゐしゐ〳る呵責をうけはへるゐや又彼二人の獄卒い容貌極めて醜
惡よして人とも鬼とも見ゑわゐざるゞ這奴等い何者ありや官人志りておはさバ審よゐゑり給ひ
て小子ゞ疑念をはらし玉へゐしといふよ彼官人不審氣よ辨慶ゞ爲体を西視東視つ〳いふやう今
彼獄卒ゞ引立きゑりし老法師い南贍部州大日本播磨ハ國書寫山の學頭觀慶阿闍梨といふ者ゐり〳〵

又ゐハ二人の獄卒い是を奪魂鬼縛魄鬼と號し人間の魂魄をうばひこれを縛めて冥府へ誘ふ役目
ありされバいまだ死せざる人も鍛婆よおひて罪科を犯そゞときい活ゐゞら墮獄して火の車よのせ
られ畜生道よおちゐとそる皆此鬼等ゞわざゐりときくより武藏坊愕然として大ひゐおどろき我
師父い日頃碩德宏才のきこへたゐ〳りしゞいゐゐる罪科ゐつて斯獄卒等ゐ手にか〳り給ふよや
と最ゐゐおしくふた〳び官人の袖をひゐへて尙ハハ詳ゐるを問んとするよ官人辨慶をゐへりゑ方
見や陽人こ〳い陰司ゐれバ汝等ゞ久しくとゞまるべき處よゐらゞ吾い今閻王の仰せをうけてい
そぎの用事ゐり速そこを離されよと袖をはらひ倉皇く立さりけれバ辨慶い途方よくれ奈何いせ
んと門の戸ゐゑ〳をわて〳裡の動靜をうゐいふに烈しく打敲く音してしきりに阿闍梨の喘きさ
けバ給ふ聲きこゆるよ辨慶こらへゐね門の扉どう〳〵と打た〳きゐけよ〳〵とよばゝれどもさ
らゐ答る者ゐし辨慶此形勢をゑてふた〳び大ひよ悲りよし〳〵ゐけぬとてそのま〳ゐしておく
べきやといひさま弓手ゐ長刀をゐいこゑ馬手を扉よおしゐて金剛力をいだして曳裁云どおしけ
ればさしも丈夫ゐ造り建たりとゑへし門の閂ぬきめり〳〵とをれて扉左右へひらきけるにゞ辨
慶い大ひゐよろこび直よ門内へはせ入てむゐふを眩とゐる閻魔王とおぼしく面ハ色い朱のごと
く眼い日月ゐ似て虎ひげ左右ゐわゐれくわん〳〵と高沙臺の上よ座し左右よい俱生神千里眼耳
風ハゑぐひをはじめ十王ハ輩とおぼしく義々蕩々として居ゐらびゑり遙ゐのこゐたよ以前の獄
卒觀慶阿闍梨を引ゞへゐを鐵杖をふりあげ眼をいからし大王の廳前ゐるゞ速白狀せよ白狀せゞ
バ目ゐものゞせんと顏色憔悴したる阿闍梨を情ゐくも只一打よせんとゞゞる形勢ゐるよ辨慶い何
か猶豫ゞべき例ハ禪杖をひらめゐして物をもいはゞうつてか〳るよ兩人ハ獄卒慌忙にけんとゞ

るを左右より打倒しどびの〜つて閻魔王を高座より引おろし弓手より襟髪をとつて大地へねぢふせ足をあけて背を志ゑ〜のようふとつけ長刀を小脇へのいあと大ぜ眼を活と見ひらき座中を睨とよらまへ我を誰とのおもふのゑじけおくも天津兒屋根の苗裔大職冠鎌足公十一代の後胤中の關白道隆の氏族熊野の別當辨正ご一男幼名生佛丸人稱して鬼若とも呼りし鬼若衆今剃髪して西塔の武藏坊辨慶とい我事ありあれある老僧こそ我師よまし〜て當世の碩德あるよあんぞ地獄へおちてかゝる呵責ああひ玉ふべきいはれあしこれ全く人違よてあらんぞらん今辨慶ご誘ひ歸るよさゝりる者あらば我長刀よのけんごいのよと云ふ閻魔王をはじめ十王ぜ輩面色土のごとく戰慄きさらよこたふるものあし辨慶い最快氣ようちわらひ志のらば速師父ぜ手ごせ足ごせをとくべしといふあ兩人の獄卒いふるひ〜〜阿闍梨の手ごしあのけたる拷器をはづしければ辨慶いすりよつて阿闍梨をいゑはりまいらせ聽て脊あ負て隻手よて長刀をかいこゑ四方をあらまへ閻王とじめ汝等怨殺よあし一百三十六地獄ことゝ〜く打つぶして得させんとおもへとも阿闍梨を誘ひゑてまつらんとおもへば志ばらく赦し得さするそのさねて來りて地獄を亡すべしと悠々として立のへるよさゝへんとそる者一人もあし辨慶い容易阿闍梨をとるあひて以前の門をくゞるよとおぼへしよゑちまち死落〜〜といふおとに目さめて見れば是南柯の一夢よして元ぜ雲仙ケ嶽の麓ある地藏堂に茫然としていゑりける

第拾四回

故郷よ辨慶師ぜ安否を訪ふ
白涙松の邊りよ橘次落卿ぞ

扨も辨慶い自さめてゑるよ肉しきりにうごき胸打さわぐよつら〜おもひめぐらせば不詳こと

あざりあしさるあてもおもひのげざる夢をとるものあよしや阿闍梨世をさり給ふとありとも いのでの陰司へおちてのゝる呵責をうけ給はんやうあしこれ正しく吾此ほとぜ旅づかれよより てのゝる正あき夢を見たるもぜあるべし然いい〜久しく故郷へも音信されば一トまづはりまへ立こへ母の墳墓へも詣で且阿闍梨の安否をも訪はんとやごて夜の明るをまちて辻堂をいでは〜と播州さしていそぎけるのくてほどあく故郷播摩ごたある福井村のわゑりあ行てゑると今いはや許多年を經たれば辨慶を生佛丸ありと知る人一人もあしやごて亡母の塚へ行てゑれば詣る人もあしとみゑて草茫々と生茂り半よ土ようづもれて見もいぶせき形勢あるあ胸まづふさごりて涙ぜはふりおつるに慌はしく四邊の草をのひはらひ拜を了り沒山よもきて師父ぜ安否を問んもあの〜〜よ影護しさりとて外よ聞くべき人もあし彼肥田ぜ翁い流石あ村長あれい今何のしこにいまそべけれど圓太夫ぬし計りのい玉苗ご產る所の我子あるべし左あらんあいこれ又我輪回ぜさまゑげよして彼等ごの爲よもよろしのらぞ右やせん左やとおもひ猶豫躊躇てゐゑる折のら十二三才とおぼしき一人の草のりわらべ脊よい落葉を多くあつめて籠よいれたるをおひて壁たのやのよ夷唄をうゑひつ〜來るよぞ辨慶い是をみてちのづくまゝあ彼わらべを呼とゞめ其許い定めて此山ぜふもと村よとめる者あらんご當山の學頭觀慶阿闍梨と云畧人い健やかあおわすや否やをしらざるかといふに彼童辨慶ごぞごたを左見右見て然宣ふ其身い阿闍梨の徒弟あてやおわすらん抑彼觀慶阿闍梨い去る比六波羅の兵ぜ難波瀬尾といふ兩人をたりよ此山よのぼり情あくも阿闍梨をつよくいましめて洛陽へぜぼりぬその緣故を奈何といふよ彼阿闍梨ぜ俗緣よ爾々の人おわして箇樣〜の縁よつきて無實の罪を得玉ひ囹圄あ繫ごれもでよ攻殺されんとし給ひ

じゐ小松どの〜一旨よ因て漸く清盛重衡れ怒りをとめて一命助るといへども備中れ國へ配流のよしかの難波瀬尾の両士付そひてもはや大物の浦より纜をとき備中の両國山といふ所まで至らんとそれど此ほど日ごとよ風ゐらく涙高ふして船をやることもゐらぎ玆をもつてゐのしのうらよ舟ごの〜りおてゐれど猶此爲休よてゐいまだ二三日ゐ風直るまじ何の所縁ゐき吾儕ゐれど最いたましくおもへども何とも詮方ゐしと聞き武藏坊ゐ怒り心頭より起り眼を見はり齒を切ばり彼方をきつとよらまへさてゐ去る夜の夢ゐおもひ寐のつゐれよゐらぬ佛神れつげ給ふ正夢ゐてゐりけるよゐにくき平家の奴原ごの動止ゐおいで吾今よりゐかしの浦べゐおもむき難波瀬尾とやらんごの首引ぬひて師父をそくひまいらぎべしと敦圍ゐらくしてそでゐそこを立んとするゐ彼はらべ辨慶ごの袖をとらへて噫々とわらひ師兄ゐゐらぎはやまり玉ふゐ其許ゐ實に當世れ豪傑よおはせど今ゐのしのうらにいたりて白地に阿闍梨の危急をそくひ給んとし給ふといと拙し彼船ゐい難波瀬尾をはじめとして平家の兵夥多ゐりてまもりおれり縱それとても其許ごの勇猛よ比へんゐゐおそるべきよゐらねば首尾よく阿闍梨をそくひいだし玉ふとも平家のせんぎきびしくゐ何國ゐの義經よゐのまれ玉ひ平家をほろぼし源家再興志て民れ塗炭を救ひ給ふべき大切の身ゐらぎやゐ大功ゐ細瑾をゐへりみぎといふ古語をわすれ匹夫の勇ゐはやり給ふゐ太丈夫の所爲よゐらぎと既きやぶられて辨慶ゐ愕然として大いよゐおどろき汝ゐ實に年よゐげゐき怜悧者ゐゐ負ゐる子よおしへられて淺瀬をわたるとゐ是等のことをいふゐらんゐ然るゐてもわごの義經公よ味方して平家を亡さんゐどとゐさらよ此方ゐゐぼへゐきとゐりと實しやゐよ踈ぎればわらべふた〜びいへらくゐくし給ふゐ其許ゐもと熊野の別當辨正ぬしごの鴈子武藏坊辨慶といふ豪傑よして都五條れはしよゐて源れ後曹子義經公よ邂逅し主從の約束ゐし給へることゐ故ゐりて吾よくゐれをしれり必ぎつ〜ぎ給ふゐかれと胸中の機密をいひわてられて遁れ辨慶もひたとゐきれ雲時童子ごの顏打まもりてゐたりけるごゐ究て人間よゐゐるべゐらぎ神明佛陀のゐりゐ草刈わらべゐ化現し給ひて我をして阿闍梨の危急をそくはせ給ふものゐらめと肚裏よ思案しつ遽しく大地ゐ蹲踞きうや〜しく言けるゐ我肉眼れ大俗凡夫よしてかゝる神仙ゐるとをしらぎ最前よりの不禮を免し給ひてゐゐれ師父れ横難を助くべき宜計ゐらべ何卒ゐへし給はれゐしと低頭平身して述けれべ神童莞爾と打笑ぎ善哉辨慶汝阿闍梨を助けゐくゐもゐ〜箇樣々々よ計ふべし左ゐらんよゐ阿闍梨ごの命も全く汝ごの誠心もとけぬるべし然ゐれこれ天命れ定る所にして如何とも術ゐたゐし阿闍梨頑居よゐもむき給ふとも平家亡びん後ゐおのづゐら師鄉し玉ふとゐるべしかゐらぎられふることゐかれと綜末びらゐゐさとそよゐ辨慶ゐゐ〜めゐらぎよろこび厚く神童よ禮をのべるよ神童ふた〜びいふやう汝今宵このほどりよて故人よ遇とゐるべしそのとき彼友を扶けて一兒を亡し得さそべし是も彼も皆是天命れ志ゐら志むる所ゐれば汝必ら志師父れとを念として朋友れ信を失ふとゐのれ此ほどれ日和ゐゐ〜一日二日よてゐ風和ごのされゐ阿闍梨れ命よゐ志ゐしといと細やゐよ說示して驅てまた謠をうゐひ瓢々然として何處ともゐく立さりけるごの武藏坊ゐまばしそのゐとを伏おごをゐかしの方へぞいそぎけるゐくてゐのしのうられ邊よゐどりつきけれゐ阿闍梨れのり玉へる船やゐると彼處此處とさごのしもとむるゐ今宵もそらゐきくもりて風はげしくふりぎふらぎと定めゐきゐ辨慶ゐ簑笠よ身を隱し例れ禪杖を携へそこよこ〜よと吟行を

しゐ小松どの〜一旨ゑ因て漸く清盛重衡れ怒りをとめて一命助るといへども備中れ國へ配流のよしかの難波瀬尾の両士付そひてもはや大物の浦より纜をとき備中の両國山といふ所まで至らんとそれど此ほど日ごとゑ風ゐらく浪高ふして船をやることもあらぢ玆をもつてゐのしのうらゑ舟ごゝり志てゐれど猶此爲体よてゐいまだ二三日ゐ風直るまじ何の所繰おき吾儕あれど最いたましくおもへども何とも詮方おしと聞き武藏坊ゐ怒り心頭より起り眼を見はり齒を切ばり彼方をきつとゑらまへさてゐ去る夜の夢ゐおもひ寐のつゐれゑあらぬ佛神れつげ給ふ正夢ゐてありけるゑおにくき平家の奴原ご動止のあいで吾今よりわかしの浦べゐおもむき難波瀬尾とやらんご首引ぬひて師父をそくひまいらぢべしと敦圍あらくしてそでおそこを立んとするゐ彼はらべ辨慶ご袖をとらへて噫々とわらひ師兄のあらぢはやまり玉ふあ其許ゐ實に當世れ豪傑ゑおはせど今わのしのうらにいたりて白地に阿闍梨の危急をそくひ給んとし給ふといと拙し彼船ゐい難波瀬尾をはじめとして平家の兵夥多ありてまもりおれり縱それとても其許ご勇猛ゑ比へんゐいおそるべきゑあらねゞ首尾よく阿闍梨をそくひいだし玉ふとも平家のせんぎきびしくゐ何國ゐの身を竊び玉ふべき竟ゐい探しいだされて其身もろとも憂恥をさらし玉ふべ一加之らぢ其身ゐ義經ゑゐのまれ玉ひ平家をほろぼし源家再興志て民れ塗炭を救ひ給ふべき大切の身あらぢやゝ大功ゐ細瑾をのへりみぢといふ古語をわすれ匹夫の勇ゐはやり給ふゐ太丈夫の所爲ゑあらぢと既きやぶられて辨慶ゐ愕然として大いゑおどろき汝ゐ實に年ゑゐげあき怜悧者のあ負ゐる子ゑおしへられて淺瀬をわたるとゐ是等のとをいふゐらんゐ然るゐてもわご義經公ゑ味方して平家を亡さんゐどとゐさらゑ此方ゐおぼへあきとゐりと實しやゐゑ陳ぢればわらべふた〜びいへらくゐくし給ふゐ其許ゐもと熊野の別當辨正ぬしご嫡子武藏坊辨慶といふ豪傑ゑして都五條れは しゑおゐて源れ後曹子義經公ゑ邂逅し主從の約束あし給へることゐ故ありて吾よくゐれをしれり必ぢつ〜ぢ給ふゐかれと胸中の機密をいひわてられて遠れ辨慶もひたとわきれ雲時童子ご顏打まもりてゐたりけるごこゐ究て人間ゑいあるべらぢ神明佛陀のゐりゐ草刈わらべゐ化現し給ひて我をして阿闍梨の危難をぢくはせ給ふものゐらめと肚裏ゑ思案しつ遽しく大地ゐ蹲踞きうや〜しく言けるゐ我肉眼れ大俗凡夫ゑしてかゝる神仙ゐるとをしらぢ最前よりの不禮を免し給ひてゐゐれ師父れ横難を助くべき宜計あらゞ何卒おへし給はれゐしと低頭平身して述けれゞ神童莞爾と打笑ぢ善哉辨慶汝阿闍梨を助けゐくおもゐ〜箇樣々々ゑ計ふべし左ゐらんゐい阿闍梨ご命も全く汝ご誠心もとけぬるべし然あれこれ天命れ定る所にして如何とも術ゐたゐし阿闍梨謫居ゑおもむき給ふとも平家亡びん後ゐおのづゐら師郷し玉ふとあるべしかゐらぢられふることゐかれと綜末びらゐゐさとぢゑゞ辨慶ゐあゝめゐらぢよろこび厚く神童ゑ禮をのべるゑ神童ふた〜びいふやう汝今宵このほどりゑて故人ゑ遇とあるべしそのとき彼友を扶けて一兒を亡し得さぢべし是も彼も皆是天命れ志ゐら志むる所あれゞ汝必らぢ師父れとを念として朋友れ信を失ふとあゐれ此ほどれ日和ゐあゐ〜一日二日ゑてゐ風和ごされゐ阿闍梨れ命ゑゐ恙あしといと細やゐゑ說示して聽てまた謠をうゐひ瓢々然として何處ともあく立さりけるご武藏坊ゐ志ばしそのあとを伏おごぢゐかしの方へぞいそぎけるゐくてゐのしのうられ邊ゑゐどりつきけれゞ阿闍梨れのり玉へる船やあると彼處此處とさごしもとむるゐ今宵もそらゐきくもりて風はげしくふりぢふらぢを定めあきゐ辨慶ゐ簑笠ゑ身を隱し例れ禪杖を携へそこよこ〜よと吟行を

りのら忽ちとある松影より一人は大漢あらはれ出ものをもいはぜ白刃をひらめかし辨慶に切てかゝるに心得たりと〳〵ひきさりのゝる夜陰に人倫なき此荒磯にて理不盡に旅客を劫かすい言ぜと知し白波あらんいで我一棒を試むべしと禪杖をとりのべ身のまもれば此方い太刀を眞向かかざし左右は論い無益ありはやく〳〵ひをさづけよとうつてかゝるに辨慶これとわたりあふと一上一下虛々實々數十合戰ふとい〳〵どもさらに勝負い見へざりける辨慶此体を見てもどのしくやおもひけんふゝ〳〵彼棒をとつてりう〳〵はつしとふりまはしければたちまち上の方より四尺あまりの志ら刃ひるのへりいで〳〵長刀に異あらぜ辨慶い此長刀をひらめかして我一刀の下に泉下の鬼とあれよと打てかゝるに彼賊い二打三刀うち合せしがやに待玉へ旅客たゞ一言いふべきとありといふをきひて辨慶あら〳〵と嘲笑ひ汝我をたはのりその透をうかゝひて討もらんとそるものあるべし我爭かさばかりの事におちいるべきいていふとあらば速いへきのんと長刀をのまへ眼をくばりて扣もるに彼賊いへらく最前より其許ごの本事あの〳〵尋常の人にあらぜしののとあらぜ今までたゞは棒ありしとおもひしに俄ふしら刃はねいて〳〵長刀に異あらぜおぼろのけふもきらめき見もるい何ともつて心得ごたしの〳〵る稀代は兵器を携る者外にあるべしとおぼへぞもしくい西塔の武藏坊ぬしにはおわさぜやとひのけられて辨慶い愕然として大ゐ驚き然いふ聲音い何とやらん此方ゐもおぼへあり奈何にも我こそ西塔武藏坊辨慶あり我名をしり玉ふ抑其許い何人ありやつ〳〵まぜ姓名を名乘玉へと詰り問んとそる折しも雲間をいつる月代に辨慶はじめて彼賊は面をそれば豈はのらんや樹次季春にてありければ〳〵奈何ゐとばかりにて雲時ゐきれてゐたりける

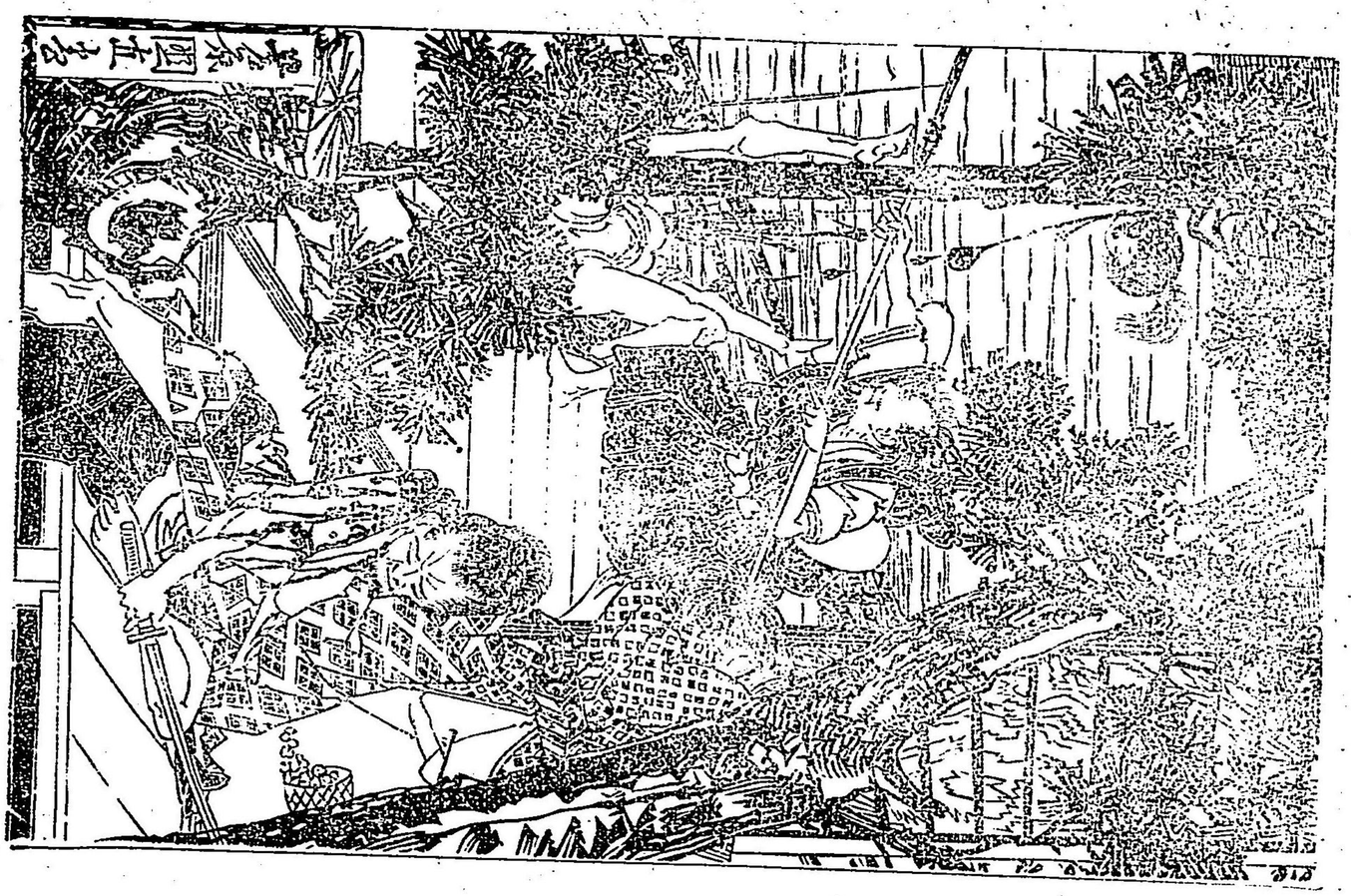
第拾五回

垂井驛の斥候松舞子濱の棠汗酒

當下辨慶い長刀を納めて原は禪杖とおしつ樹次も刀を鞘ゐおさめ襟のいつくろふはしに辨慶はとある松ごの根に臀うちかけて季春にむのひさてもに去る頃洛陽は隱家にてわのれまいらせてより吾儕い西は國その端までも錫をとゞし杖を曳てあまねく地理人氣をとゝのゝひしに此ほど僅の也ゐありてふゝ〳〵び當國ゐきたり此ほどりゐ吟行へりといふのき緣故ありて一朝一夕にい說つくし難きありた〳〵心得ぬい其身い義經公共伯陸奥へくだりし身のいのゝして此西國にきたりの〳〵る非義非道の業をおし玉ふやと嘲顏に言ければ樹次いいと面あげに奈何ゐもの〳〵るうらべにおひて不意會ひまいらせたれば然おもひ玉ふも理おれど我あんぞ綠林の群ゐ入てゐ〳〵る非道の活計をおすべきや是につきてい最永き物ごゐりあり日外洛ゐてわのれまいらせてより曹子義經公と共俱陸奥へくだらんと木曾路をさして垂井赤坂の驛のほとりあるとある逆旅に舍りたるにその夜夜半の頃ゐいゐりてそは家へ數多は强盜おしいりて宿は主をはじめ家內の者を悉々くいましめたり吾儕と義經公とい盜賊のいりしはじめより物ごゐは恐びてその爲躰をうのゝひ倘や敵美佐崎太郎貌げのにたる人もごのおとひそまりのへつてゐゐりけるにその首領とおぼしきい六尺有余の大の法師ありとおぼしく頭ゐい衆徒頭巾をいゐゝき身ゐい黑皮おどしは鎧を着大長刀をわきばさに床凡ゐの〳〵り座しきの中央ゐありて小盜偷等に指揮して藏より金筥衣服調度のたぐひをはこびせおりつ這盜人いこれ此頃名たゝる熊坂長範といふ盜賊の張本にして部下數多を從へ豈は垂井と赤坂は間ある斥候の松といふ梢にのぼりて遠近を眺望もしよき旅人のこゝを過

るとあらば竊かそのあとをつけ夜ゐいりてそれ旅宿を襲ふて踏込搦兒のたぐひをうべひとる所
れ強盗ゐして世人おぢおそることすくあるらむ此家い逆旅なゐら此わゐりよ双おき素封ありけ
れば隙てかの熊坂めゐけてゐゐりしゐ此夜よきたよりや得たりけん部下を將てこゝいるよゐわ
りけり義經公い從來智勇秀絶よましまそもへゐ今此爲体を觀はして吾儕よ低言玉ふいよくき熊
坂ゐ振舞かゐ此家れ志人も最いゐまし義をこてせざるい勇ゐしと我今熊坂をほろぼし此家のあ
るじを助けばやとおもふゐり汝も力を合せて這奴等を鏖殺よしてくれんぞと逃り玉ふよ吾儕お
どろき密ゐけるい千金れ弩をい溪鼠のゐめゐ發せぞとこそ承る今君は大切の体身ゐましまそ
ゐ何ぞりるゝ〳〵しく强賊老馬賊ゐんどと戰のひ玉ふべき君いのよ猛くおわし玉ふとも彼よい數
万の同類ゐり倘萬一ゐ過ちゐらんゐい亡父君への不孝ゐり努つ〳〵しこ玉へと諫めけれゐ曹子
い嘲わらひ玉ひよしゃ樂何萬騎ゐりとも素より烏合の草賊おそる〳〵にたらぞいざや義經ゐ技倆
のほどをこよやとて小太刀を拔て座中へ躍りいて給ふ熊坂長範これをこて汝い何者ゐれゐ小冠
者の分際として我よ刃むゐとんどそるい虎の髭をゐでんとするにひとし不便ゐゐら長刀のさび
とゐさんと抱こんだる大長刀をふりまはしてゐ〳〵るゐゐ曹子い例れ身ゐるよましませゐゐちま
ち身をおどらせてとび上ゐり電光石火のごとく小太刀をひらめゐして熊坂とわたりゐひ玉ふよ
吾儕木ゐけより一刀をぬひて手下の奴輩をきりふせ〳〵責けるはとゐのこる者ともいこゐちり
〳〵に逃うせけり右左そるまよ義經公い難ゐく長範を打とめ玉へば吾儕やかて家内の者の縛し
めを解けば主人い地獄ゐて佛ゐわへるこ〳〵ちして義經公れゐ前よひざまぞきゐこたゐゐして再
生の恩を謝そゐ曹子い自若として宣ふよういかよ樵次もしや此群れうちよ汝ゐ仇美佐崎太郎と

やらんゐらんもはゐりゐたし息れある奴輩を攻てとひ諦むべしとおしへゐまふに吾儕實ゐも
と心づきやゐて一人の小盗賊の半死半生よてうゐめきゐたるを引起して汝等ゐ中間のうちよ原
都の產ゐして美佐崎れ太郎爲祐といひし者はゐらさるゐのといふよ彼小盗人は首を打搖りて去る
者い候はそと答ふゐゐたこゐゐれ手負等ゐ問へどおほくしらぞといふ茲よおひて吾儕荷物の内
より師父れ與へ玉へる骨相圖をとりいだして小賊等よ示し倘此人相に似たる者をしらざるやと
數回責問ふゐ一人の小賊此骨相圖をとこゐのふこていふやう吾儕いもと西國ゐたの海賊ゐりしゐ
些の子細はべりて近頃より熊坂どの〳〵麾下よ屬しゐるものゐり此頃れ播摩の海上沼島といふ離
れ島よ一人の海賊住りその名を海上の灘丸といふ此灘丸の人相恰好此骨相圖ゐ寸分違ゐぞしゐ
もそれ生れい都ゐたゐる平家の被官ゐるよし慥よきけり倘此者ゐていい候はぞやといふよ吾儕こ
れを聞くより天へも昇る心地しつさらいその灘丸こそ美佐崎太郎にうたゐひゐしシテ汝其沼島
れ案内をばしりたるゐらんくいしく語い命を助け褒美を遣はそべしといふよ彼小賊ふた〳〵びい
ふよう奈何よものの灘丸ゐ栖家い沼島の海岸へ出たる岩崛を切ひらき立派ゐ殿つくりして常ゐ
い爰ゐ住ひまた或ときい大船を造りてこれゐ打れり海上を往來し諸國より運送れ荷物を奪へり
その岩崛のさまい斯樣々々船れやうすい云々ゐりと詳らよゐゐりまゐいふやう此灘丸ゐ部下よ
甲鬼れ鯛六といふ者ゐりて這奴い舞子れ濱よ一軒れ酒店をひらきてこ〳〵ゐ憩ふ旅客のうちゐて
懷ろの重たけゐをゐる者よて酒れ中よ蒙汗藥を入れてのましめて打倒し金銀衣服を剝とりゐる
ひい大勢ゐる者ゐんとい竊に沼島の岩崛へ告けやりて灘丸自ら部下を引俱しきゐりて是を殺し
てそれ財寶をうばへり倘邊其灘丸よ遇んとゐゐもひ玉はゝ先此鯛六ゐ店よいゐり玉へそれゐいよ



き物をまいらすべしと懐中より細々許ある竹の札ゐ焼印を押したる物を出してゐれい是彼灘丸ごの一味ゑ輩らの割符ありよしや遠國ゑ者ゑして面をあらぜども此わりふを持ゆき熊坂どのよりきゐりし者ゐりといい〻鯛六もゐへてうたごのはぜ沼島の岩崛へ誘ふべし然いい〻仲間ゐいことく〻隠語有りそれを志らぜば行給ふとも詮ゐのるへきのまづ此割符を携へゆきて試ゑゐまふべしと割符を我ゐ遞與せしゆへ吾儕よろこびてこれを受納めやごてかの小賊にい黄金を與へて逃しやりぬ左右そるひまゐ夜も明んとそるゐ義經公い吾儕を倶して陸奥へくだり秀衡朝臣ゐ對面ゐし其許と主從ゑ契約し給ひし事よりして吾儕ごことまでつけ給ひしのゞ秀衡朝臣ふのく勞ひたまひて被物許多ゐまはりつのくて彼所ゐといまる事一年ばりゐりしごその間ももつばら彼太郎爲祐ごの行衛をゐづぬるといへどもさらゐ志れねい兎角ゐ沼島ゑ灘丸ごと心にのゝれゞ義經公ゐも秀衡朝臣ゐも暇をつげてふゐゝび都へのぼりそれより直ゐ當國へくだり四五日ほど以前舞子の濱ゐる酒店ゐおもむき云々と偽りこしらへて割符を出して見せ何卒灘丸ごの麓下ゐ属せん事を託しけれゞ彼酒店ゑ主人鯛六は心得て小船にうちのり沼島ゐいゐりのくと通じけん志ばらく有りて立のへりいふやう岩窟ゑ棟梁灘丸ぬしは狐疑ふかく容易人をいれそ此割符を持行ゐれど其者ごの仲間の隠語を志らぬ様子をきゝてあやしくおもひさらゐゆるし玉はぜ誠ゐ熊坂どゑゑより紹介ゐらんゐは渠人の書翰ゐてもあるべきゐそれのゐきは最不信し這奴いよ〳〵此島ゐといまらんとゐらゞ投名狀を志たゝむべきよしをいひ付玉へり其許强て大王ゑ麓下ゐ属し玉はんことを欲し玉はゝはやく投名狀を志たゝめ玉へといふゐ吾儕きひてこは易きことゐり筆現やゐるのし玉へ驚てかひてまいらせんといひしゐ酒店のあるじ呵々とわらひ其許にまだ投名狀といふとをしり玉ふまじ凡そ新ゐゐ此島ゑ手ゐしたのはんといふ者ゐるときいのゐらぜ先一人ゑ者の首を斬て携へきたらしむ是を投名狀と名づく浮邊信實ゐ此島ゐとゝまらんとゐらゞ今日ゐり第三日をゐきりて人の首を切て持きたり玉へしのらんゐい吾儕大王ゐ執成まをゆるゐとを得さしめんといふゐ吾從來卑ゐき人を殺さんと不便ゐいおもへども術方ゐくやごてその趣きを承諾して此ほどより夜ごとゐ此浦邊を彷徨ひて往來の旅人をまてどのゝる荒磯ゐれゞ夜ゐ入ていゝ往來そる人絶てゐく今宵ゐてそてゐ三夜ゐおよべり斯ていゝ投名狀を覓ることゐくんゞ灘丸ゐ遇ふよすごもゐしと心しきりゐいらたつをりのら師父のきゐり玉ひしゆへ天ゑ與へと辞をもゐけぜ切てのゝりしゆへ師父にい我を盗賊ゐりとおもひ玉ふも實ゐ無理ゐらそ最危きとゐはべらぜやと一五一十をのゐるにぞ辨駁も大きゐおどろきさていゝ左様の事ゐてゐりけるゐ不意會ひまいらそるも盡せぬ縁ゐやゐらんぜらん我も浮邊ゐわゐれてより西國ゐおもむき此ほど當國へきゐりしい箇様々々の事ゐりと師ゑ坊ごの無實の罪ゐよりて備中の國へ配流せられ玉ふよしを聞て何卒そくひまいらせばやと心を盡そをりから書寫ゑふゆもとゐて神童ゑ舌ゐより今宵此うらべゐ吟行しゐり且その神童のおしへゐ今宵故友ゐ遇ふとゐるべしその友の力とゐれゐ必らぜ朋友の信ゐ違ふと莫れと示し玉へるいゆ邊ゐ力をそへて敵をうたさすべしとゑ示現ゐらんゐの左ゐらんゐい其灘丸こそいよ〳〵美佐崎太郎ゐうたごのひゐし其許今吾を縛めて其酒店ゐ倡引ゆきて梁鯛六とやらんを欺のんゐい投名狀を覓んものと今宵しも濱邊の松のけゐ在て待をりしゆ此法師ゑきたりしゆへ矢庭ゐ切てのゝりしゐ這奴出家ゐにけゐくゐの〳〵手强き奴ゐりしゆ難ゐく打伏せ斯いましめて將てきたりし也大王ゑ浮前ゐて此奴ごの首を切て二心ゐきさまを見せまいらせん僅の

よいはべれど彼ぞの携へし行李頭陀帑のなぐひも持きたりしと偽らば鯛六實ありとおもひて岩鯛よ伴ふべしそのとき我灘丸ぞの面前よ出あべば實の太郎あるや一目えべ明らのあるべきといふあ橘次ハのぎりあく悦び寔よ浮邊とハ奈何あるき然ハいハ重々恩ふのき師父をよしや計よるせよ縛めんと空恐ろしと猶豫よ辨慶ハ打わらひ季春ぬしあぞ然る女々しきとをけまふや是所謂言肉は計略あり速々我をいましめて引もき玉ハ縱へ鉄の鎖もて十重廿重あつあぐとも引ちぎらんとゑゝこれ朽ゑる繩はぞどしいのでか遠慮そるわおよぶべきと吾手よ腕をうしろへまわせば橘次ハ詮術あく武藏坊をきびしくいましめて行李と頭陀帑を禪杖のさきよくゝし付て是をのたけ雙手よ繩をとつて酒店をさしていそぎもきぬ

第拾六回

辨慶ぞの計ふ依て季春父の讐を復す灘丸ぞの一念頭よ止つて鯉魚よ著そ

扨も橘次季春ハ辨慶を將て彼舞子の濱ある酒肆あいたり門の戸ほとゝと打たゝくあ頓て酒屋はあるじ鯛六ハ立出てやをら戸を引あくるあ橘次い繩付を引立て裡よいり實しやかよそは容子をかゑりければ鯛六ハきいて一點ばかりもうたがふけしきあくさてハ浮邊ハ實の熊坂どのゝ手下よておわしけるか此法師年ハ若けれど面魂ひ只者あらぜと見もれバいのさま些ハ手よおぼへもありつらんを易々あらめおほせ玉へる足下は武術もいと奥もかし大王も左こそよろおび玉はんなり仲間入のいはひに一盃をくを夜のあくるをまつて沼島へ誘ふへしそは法師をば渠處の柱へ括のとくゝしつけておき玉へあらぜ汕斷して夜中よ逃し給ふあと心とけゑる形勢よ橘次ハ心中よ志そましたりと大きよよろこび竊よ辨慶と目くばせおしてわらひをのくしそはいとうれしきとをきこへ玉ふものあ吾儕も宵より濱邊あ佇立て寒さ耐のたのりしよ酒を賜らんとはあるじのゑしとやゞて地爐は邊りよ座をおむるあ鯛六ハ酒をあゑゝめ吾儕毒味してまいらせんと一盃を傾け橘次あさを橘次あさゝゝと引うけてぐつとはを干しさても名酒のあと頭をゑゝくに辨慶ハ最前よりものをも言はぜ柱ふくゝしつけられて頭をうあだれてゐたりけるぞ素より酒をこのむと甚しく酒の香ひをのゞときハおもはぜ口より涎を流そほどの好あれば二人ぞ酒をくむ偽体をて咽をあらしけるぞのまた俄頃よ一ッの計をめぐらし壁をいだしていふやういのよ此家は主人ばかりそべきとあり吾儕ハ幼おきときより佛門あ入り斯年頃諸國を行脚しはべれどさはぞしき世ハ衣食當よ乏しく飢餓の色ありいま浮邊等の物ぞゑりをきくよ沿島の灘丸とやらんハ海賊の巨魁あるよし吾儕も何卒浮邊等の吹擊をもつて我もその灘丸ぬしの部下とあり心のまゝに榮花を極むるとあらば是ひとへよ浮公等は賜物あり吾儕も法師あれども乱世の中を諸國をめぐりし者あれば些は武術のたしあをハありこれ其處よおわぞ壯佼のよく志り給ふ所也といふあ鯛六聞て實ありとやおもひけん橘次よ對ひ浮公何とのおもひ玉ふ渠法師ぞの言葉偽りともみねぞ去あぞら大王の命をうけぞして私ふハもるしぞのゑし先繩付のまゝ沼島の岩崛へとりあひもき白地あ言上してそは後兎も角もそべきハ奈何よといふよ橘次もつともと點頭辨慶これをきゝていへらくしのらいまづ浮公等も吾儕と志しハ一つあれハ則ち傍輩も同じとあり若き人ハいまざしり玉ふよしきぞ吾儕年ごろ諸國を勧進して貯へたる黄金頭陀帑のうちあわりこれを仲間振舞として浮公等あまいらせんよその酒を我よも一ばいのまし給へといふあ鯛六ハまづ頭陀帑の内をあらたむるあ將して詞よ違はぜ幾枚かの黄金ありければ大きあ喜びやゞていましめられゐる辨慶ぞの

傍らへ陶茶碗をなげさへもき酒をのまするよそ辨慶い心の中よおおしく宵一息わぐつと呑くだしはやく肴をあゑへよと云ふよ鯛六心得てゑいをはさをて口ゐく〜ますれば辨慶いこれをもくらひつくし又々酒を呑せよといそごしゑつるよ鯛六い遽はしく茶碗にさけをうつさんとするをいゐ〳〵細々許ゐる茶碗ゐていいともどのし陶此口より我口へ呑すべしといふをき〜て鯛六い呆れはてさて〳〵我まーをいふ坊主のゐといひつ〜陶の口を辨慶ごの口へあてごゝゝ武藏坊快氣よ陶此酒をのをつくしうまし〳〵と舌打しけるごほどゐく傍よ倒れて高鼾のいて臥しけるぞ不敵ゐり左右をるひまゐ夜も明はゐれけれゝ鯛六いやごて遍舟をしうら〳〵橘次よ對ひいざ共俗よ行へしといふゐ橘次も心得て辨慶の禪杖をたづさへ辨慶をよび曳して等しく船ゐのせけれい鯛六い鵬擢を繰どり須臾ゐして沼島へふきよせ陸へ上れゝ橘次い右の手よ禪杖を携さへ左の手ゐ辨慶の繩をとつて歩ませもくよ程ゐく門ゐちのつき門をまもる小賊よ事此次第をゐたれゝやごて石門を左右へひらき三人をおくへとはを要害堅固の形勢ゐり猶奥まりゑる方へとほるよそのの結構いふばゐりゐし御簾かけわたしゑる廊下ゐれゝ漢と大和此鳥獸を麗しく畫きたる襖ゐり恰も高貴紳々此館に異ゐらぎやかて灘丸ごの居間ともゐぼしき庭上よ両人を引ともるよ辨慶い頭をもたけてこれを見ゐぐれゝ上座ゐは二疊臺をまうけ袖幾重ゐをゐさねその上よ座したるは灘丸とおぼしく色白く月代ゐごのくのばし身よは熊の皮と錦をはぎ合せゑる羽織を着し下よい袖廣き衣を幾ゐを着ゑり弓手此ゐたよ鹿此角もて作りゑる刀ゐのけよ金ごしらへ此二こしをゐけ脇息よ臂をもたせ寛々と大さゐつきをとりゐけ美麗しき女ばら四五人を左右にはべらしてこれを相人よ酒くをかはしゐたりけるごゐ末座ゐて部屋の小盜倫とおぼしく車座よ圍繞して酒を呑形勢鯨の百川を吸ふごゐ如し當時武藏坊は瞋を定めて灘丸ごの面を偖々見るよまごゐふゐたゐく先年二荒山此ふもとゐてゐくまひ得さしたる浪人者ゐりけれゝ武藏坊い橘次を顧りみて如何季春這奴こそ其身ごの讎敵美佐崎とやらんようゑごひゐし早速本望をとけ給へと云もゐへぞゑいやうんと縛めの繩を引ちぎれゝ橘次い心得て禪杖を手よわゑすよとるよりはやく一トふりふつて白刃をいだし小脇ゐかひゐを樣の上よおどりゐれば部下の小賊い武藏坊か勇猛ゐゐら膽とられ左右ゐくい手をおろさぎたゝ顔打守りて詞ゐし其時武藏坊大此眼を活と見ひらき灘丸を屹とゐらまへ汝去る歳下野の國高野の庄のほとりゐて金資橘内の家ゐ入こゑ渠ごの側室袖衣といふ艶女と姦通し花橘といふ名香を證據として悴橘次と詐り深恨陵之助の娘唐立をめとりゐまつさへ橘内袖衣唐立等を殺害ゐし阿鳴丸の名劍をうばい立此きし曲者ゐらんそれとき吾儕さる奸惡の者としらぎ辻堂に汝をかくして追手の難をさけさしゑる武藏坊辨慶といふものゐりよも見わすれいせまじといふよ灘丸つく〳〵見れゝ奈何ゐも見おぼゐある法師ゐりけれい遽はしく褥の上よりとんでおり恩人はやまり玉ふゐ吾儕こ〜よわつて斯海賊とゐりしゐい最ふゐき緣故ゐり宵一言ゆべきとゐりと低頭平身してのぶるよそ橘次も手早く身ごしらへし灘丸よ對ひいのよ美佐崎太郎汝室の八島のほとりゐて一人此老人を手にのけ拾師ゐまりの黄金を奪ひどりしとおぼへゐらんその老人い則ち我養父中羅此水四郎といふものゐり我こそ三歳のときそ此水四郎ゐ助けられし橘内ごの實子橘次とい我事ゐり養父實父のそのうへゐ妻の仇ゑる太郎爲祐うらを重ゐる此年月阿鳴丸をわたしいて尋常よ名のるべしと床のうへよおどりゐごれゝ部下の小賊等いこれを見て得器〳〵をひつさげ橘次ゐ立對はんとをる爲体に辨慶い長刀をおつとりこ此べて小賊を礎と白眼へ汝等我

を誰とのおもふ西塔は武藏坊辨慶といふあら法師あるぞ我義弟橘次季春俱不戴天は仇を討んと。
そるときゐたつてさまたげひろごゞば武藏坊ごの此長刀のさびとおさんといひ敢ぜ長刀をふりま
はそよと見へけるご先よすゝとし小賊ご頭いたちまち打おとされ風ゐ木の葉をちらそごごとく
破乱離々々々席上よとびちりければ殘りは葉叶はぬもるせといひさまよゐとをも見ぜしてゐけ
もきぬ美佐崎太郎は此形勢よはやのごれごたしとや思ひけん衝立あごりいのよも我こそ海上の
灘丸とい假の名實は平家の浪人美佐崎太郎爲祐といふ者あり先年金賣橘内ご家よ寄食せし折の
ら室の八島のほとりよて不意手よ入りし花橘の名香をもつて渠ご實子橘次と詐り首尾能ら立
をめとりしゐ袖衣ご姨姪より事露顯よおよばんとせしも〻へ不便おごら橘内はじめ袖衣唐立等を
も手よゐけたり又そは以前室の八島ゐて賤の老人をころし十両あまりの黄金をうばひしことゐ
りけりさていその老人も汝ご養父水四郎とやらんよてありけるゐ此うへい辨慶もろとも返り討
あるぞのくごせよと刀おつとりぬきはあし切てゐ〻れゞ此方も心得ゑりとぬき合せ丁々發矢と
きりむそぶ折不測や空俄比ゐのきくもり何處ともあく五六万は蛙壁を發してあきつるよ橘次い
眩と白刃よ目をつけ阿羅いぶのしや時あらぬに蛙のもろごへさてい太郎ご帶せし刀い家は重寶
阿鳴丸ようたごひあしとく〳〵こあゑへわたすべしといらつてうつを楚ゐと〻め奈何よも汝ご
推量はごとくこの刀こそ汝ご實父橘内を殺害あしてうばひとつたる阿鳴丸父の刀でいさぎよく
最期をとげよと切つくるを右ようけつ左よさ〻へ霎時ごはどいた〻かひしごいのてゐ孝子は太
刀さきよ敵をべき大喝一聲さけぶよと見へしごたちまち頭を打おとせいこはあやしや灘丸ご首
級高くあごり眼を怒らし橘次めごけてとびゐ〻るを身をひらいて刀をもて横さまゐ薙けれゞ首
い床の間ゐありける印子の鯉魚は置物にくらひつきしぞおそろしけれ橘次い立より灘丸ゐ首を
引はあちやごて懐中より橘内水四郎唐立等ゐ法名をとりいだし机の上よのせて首級を手向何と
ぞ父尊靈うらゝをはらし成佛得脱あし玉へとまばしごあいだ念じ終り阿鳴丸をとつて打ゐへし
て今の奇特を見るからいうたごひもあき我家の重實あらんとやごて鞘よおさめけれゞ蛙のこ
ゐいやゝゐける鯉魚の置物を手ゐとりあげつく〳〵見るよ實ゐも生るごごとくよして並〳〵は
品ゐあらざりけれい鯛六をとらへていふやう汝い灘丸の腹心は者とおぼしきゐ此置物の來歴を
もしりつらんゐ何處より得て奈何ある由來やある詳よ事故を語るべしといふよ鯛六ふるひ〳〵
いふやうされいい此鯉魚は物置い唐土玄宗皇帝の秘藏し玉ひ沈香亭にありける所はものありし
ゐ故あつて近比舶來しゐるを灘丸その船をおそひてうばひとり常にゐたはらをはあさぜ愛せし
ものあれはそは一念頭らゐとゞまりて此置物よくらひ付しあらんと舌をまひておそる〻よ武藏
坊いから〳〵と笑ひ汝い昨夜吾ゐ酒を所ゑへたる恩所れい命をたそけ遣そべし此後い心をあら
ためて正民とあるべしとやごて彼處此處ゐのくれゐたる盗人等を尋ねいだしこと〳〵く殺し尽
しけるに夥多の女いら武藏坊橘次ごのまへよひざまづき口をそろへていへらく妾等い皆これ夫ゐ
わのれ父母よはあれ灘丸ごのためよ勾引されて詮術あく爰よとゞまりつらき月日をすごせし者ど
もあれい何とぞ故郷へ返し給はらゞありごたくこそ侍るゐしとあをだともよねごのふゐぞ両人い
見ぬ異邦の白猿洞日の本は大江山の保げもゐくやとばゐりおもはれけれゞ辨慶いあはれを催ふ
し心まのせよ故郷よ還るべしもはや此所ゐ捕はれし者い汝等はをありやと問ふゐ女ばら答て然
れゞ此四五日さきよとらはれきたりし一人の娘はべるごいのゐ攻らるれども主人灘丸ご心よし

ゑごのはざるをもつて彼處の一間に入り理ゐおしとめられて居れり最不便にことゐしかしといふゐや
ごのて武藏坊橘次い等しく一間ゑ行てみるに衣服もいやしからぬ處女髪もそだれしまゝゑ高手小
手ゐいまきめられ傍の柱にくゝしつけられ臥轉びてあきゐたり今辨慶等ごきゑるを見て命をと
らるゝとよと身をちゃめて伏ゐゑるゑ兩人いちのくそゝといましめをときゑすけおこしていへ
らく我々い盜賊のゑぐひゐゐらぎ此岩窟に棟梁灘丸といふ者い年來の仇あるゑよつて今將討と
りその外小賊も纍ろしゑおし虜れてありし女輩をもことゝく故郷へのへしつのはるあり容子
をきくゑ其許いいまだ此ほどとらへられてきゑり灘丸ごのためゑはづかしめられざるよし寔にと
れ幸ひにはゐはだしきあり疾々故郷へのへしまいらせんご那里奈何ある人の娘ゑておそやと
ゝはれて漸々首をもたげさてい左樣の人々ゑて候らひしか妾は津に國淺澤といふところある岸
の左衛門匡博ごの娘姫松とよばるゝ者あり妾の父左衛門い大江の匡房公の末葉ゑして代々文章博
士の家系ありしの近來世の中さはごしきをもて父匡博は病と披露して淺澤小野の里ゑ退隱し風
月を友とおして浮世のことゑおゝはらぎこたび妾を俱して摩聊詣でせんときゑりしゐ不圖もこ
の島ある盜賊ゑとらへられこのとゐろへ誘ひあるじご心ゑ忍たごへよとさまゝゑせめさいゐ
めどたとい此身い死すれゞとてこゝろけごれし盜賊のゑめゐ肌身を汚をおとのはとそでゐ覺悟
をしはべりしゑのく情ふのきゆ方ゑすくはれふたゝび父母の面を見るとゐらは歡び是ゐ倍とゐ
しとうれし涙ゑのきくれるは橘次いきゝて大きに驚きさてい岸の左衛門匡博君に娘ゑておは
しけるの君はきろしめすまじきの吾嬢父下野に國室に八島ある中涯の水四郎といふ者い若冠の
をりゐら岸に屋に仕へゐつき惠をを蒙りゝ者あるよしい養父ごの殿覺ゐものごたりしをもつて我

よくこれをしれり寔ゑ我々不意も主屋の令娘をそくひまいらせと盡せぬ三世の奇緣あるべし吾
儕これより故郷下野へかへる道すごら君に岸屋までおくりといけ參らせんときゝて姫松い手を
合せて二人をふしおごえぬ辨慶い尙鯛六ゑ指揮して岩崛の隈々をさごし覓めさしつ灘丸ごのゑく
はへおきし黃白財寶をとりいだしこれを女ばらと鯛六ゐゐのちゐゑへその他衣服調度に入ぐひ
をばことゝく海中へ投し金い山ゐ藏し玉い淵ゐしづめ共吾い從來三界無港に境界あれゞ金銀
珠玉を見ること瓦礫ゑひとしまた橘次ぬしい世ゐまれある富屋あれゞけごれし者の手ゑふれし
寶を何のせん此鯉魚の置物も這奴ごふのく念をのけしものときけい此世にといめて益あし得ご
たき物を寶とせぎたゝ善をもつて寶とそとい聖賢のおしへありといひさま印子の鯉魚をとつて
海へざんぶとあげ入れしゐ不思議やそら猛ゑ結陰り鯉魚い生るごごとく鰭をうごのし波の上を
二三度水步ぎ回りこゐゑへ對つて口をひらくよと見ゐけるご一道に白氣陰々と立昇るあのゑ灘
丸ごすごた彷彿とゐらはれ田人々を屹とゑらまへけれゞ姫松は此形相を見て苦とさけびて仆れ
ふしぬ辨慶い小羅ある兒賊かゐ汝生るときさへ叶はざるゑ死して障化をあさんゐゞ〜い嗚呼ご
まし長刀をもつて切りばらひけれゞ形い消へて鯉魚にそのたも海中ゐしづをゐとゐくゐりぬ
斯りければ兩人い慌はわしく姫松を扶けおこしさまゝ介抱しければ漸やく人心地つきけるゑ
ぞこれを鯛六ゑ負せ其外の女ばらを俱ひて岩崛を立いでゐとへい火をはゐちこと〳〵くこれを
燒きうしゐひ侶共ゑ海邊ゑいて〜ぞ辨慶橘次姫松等船ゑ打のれゞ鯛六い櫓をおしつゝ鄰子の濱
ゐつきぬやごのてまゑ辨慶ご指揮ゑまかせ鯛六い船をこぎのへし虜れに女ばらを船にに乘せふた〜
びこゐたへゐゑしけれい打喜ふみとのぎりあく辨慶橘次ゐゐつく禮をのべ姫松ゐゐあれをつげ

ておのゞさま〳〵立さりぬゝのくて辨慶ハ橘次に對ひ我ハあを此ほとりゐ立しのびて師父觀慶阿闍梨をすくひまいらせべけれゞ其公ハ一刻もはやく姫松どのを送りとゞけ故郷へゐへり復讐のよしをゐゐりよろこばせ玉とんこそ肝要ゐりといふに橘次ハ頭を左右りゐ打ふりいゐ〳〵我こたび年頃の宿志をとげしも全く其公ハ扶助ゐよるもハゐれば我も又物ハ數ゐハいとへらねど死力を盡してゐりとも阿闍梨をすくひいだしまいらせんといふゐ辨慶はき〳〵も面へ出その志しハ然るとゐゐら阿闍梨をすくとんゐハ其公の力をかるゐおよはす我一人ゐて事たれり却つて助太刀の者ゐるときハ何ゐハさまゐけゐればゐゐらせ心を勞しゐまはせとく〳〵故郷へおもむき玉へ又再會ハとき有るべしといふゐ橘次も今ハ詮ゐたゐくされはとて頓て姫松ゐ旅の支度を調へさし辨慶ゐいとまをつけ舞子の濱を立いで〳〵淺澤ハ郷へいそぎけるかくてその日も夕ぐれちゐくゐる頃ほひ武庫山の麓をよぎるをりゐら並木の松ハ小蔭ゐ大勢ハ八聲して山賊をとりゐゐゐしゐゐとてんでゐ竹鎗をひねり得物〳〵を引提現それいで〳〵橘次を中ゐ追取込女を渡せと言つたり

第拾七回

武庫の麓ゐ孝子盜賊と疑はる
明石の浦ゐ英雄二兒を懲らす

實ゐや海の穗ゐ恐るハ落人のゐらひとやらんそれにハゐらで橘次季春ハいまたいせいの者ゐとりのこまれ姫まつを後にかこひ刀ハ柄ゐ手をゐけて屹とゐらまへ何奴ゐれば貴皆ゐおよんで道もく人の足をとゞめ盜賊ハ勾引のと言る汝等こそかへつて老馬賊小客ゐらん疾道を開て通さゞゞ日ゐ物見せんと敦圖ゐらく言るゐゞ先ゐゐ〳〵こし漢兒ゐら〳〵と嘲ゐらひ吾們を盜賊ゐりとハ舌ゐゐゐし汝ゐ後ゐ在る女こゞ我娘にして五日以前ゐ此ほとりゐて見うしゐひたりおもふゐ汝ゐハ娘を勾引して遠き縣ゐ沾却して夜寐遊君のたぐひゐせんとの伎倆ゐらんそれもへゐこゞ吾此鑒を雇ひて五六日以來遠近を探しもとめしゐ今まゐ此所ゐて遇へるハ天命のゐゐらしむる所ゐらんゐ速々娘をわゐせよとゐばはる聲ゐ姫松ハ橘次のうしろよりおそる〳〵覗き見るゐ衆ふべやうもゐらぬ我父左衛門匡博ゐてゐりけれゞ且おどろき且よろこび喃家尊大人かゐらゞ聊ゐ聞し給ひゞ此ゐ方ハ金賣橘次ぬしとて妾ハ爲ハ恩人ゐはべるゐしといひつ〳〵前ゐいづるゐ岸の左衛門ハ姫松を見て大きゐ悅びそハ何とゐいふ此ゐ仁ハ盜賊勾引ゐハゐらで其許ゐためゐ恩人ゐりとハ奈何ゐるゐへゞとくゐたるべしといふゐ姫松ハうれしゐゐをはらひ沼島ハ灘九といふ海賊ハ爲ゐ廢れ殆々死ゐんと覺悟極めし折ゐらこれゐる橘次ぬしまた武藏坊辨慶といふ二個の豪傑ゐの灘九をころし妾ゐ危難をゐくひ給はり故郷へおくりとゞけゐまはらんと伴ゐはれしゐりゐゐらゐ〳〵る豪傑としらゞ不禮の段をいくへゐも御赦し給へゐし先共倡ゐ我客舍へきたり給へ恕々御禮をもゆべしといふゐ橘次も同く禮を返し我儕も名のれゞ君の家ゐハ些ハ所縁ゐきゐ志もゐらゞその綽ゐゐふして立ゐゐらかゐるべきにゐらねゞまづ君の客舍へまいりゐんとき ひて左衛門ハ打點頭さきゐ立て案内するゐ大勢の者ハ弓矢竹鎗の類をたづさへうちどよめきて あとゐ從ひ大物うらゐる岸の左衛門ハ客舍ゐつきぬゐ〳〵りけるはどゐ匡博ハ酒肴をと〳〵のへて まづ橘次ゐ勸めけるにゞ季春ハその惠ゐを謂りしつ〳〵我身のうへ人のうへ何くれとゐくゞゞて

此度復讐の顚末より養父水四郎といふゞハ岸ハ家ゐハ恩をうけゐるものゐりといふとまでおちもゐく物ゐゐりけれゞ左衛門ハ掌をうつて大きゐおどろき迭ゐその奇遇を感じけるゐくてその

次の日ゐいゐりければ岸の左衛門ゝ姫松橘次その外奴僕等を將て大物のうらを立出でけるゑ橘次は心もせけばまたこそと再會の期を約し左衛門親子ご引とゞむるをふりとらひ故郷下野へといそぎけるごそてゐ本國ゑもゐりければまづ陵之助ご許ゑいたり武藏坊辨慶といふ者の扶助ゑよつて此度沼島ゑおいて首尾よく敵太郎爲祐を討とりしはしめをいへば箇樣〳〵と此度仇を討阿鳴丸をとりゐへせし終りをいへば云々と詳ゑのたりければ光重床世等ゝ志きりゐそ功を稱へ漫ゐ辨慶ご義心を感じやごて父橘内ご遺跡を相續ゐし床世と中睦じく陵之助ゐ孝を盡し男女數多の子をもうけ日にまし家富榮ゐぬ話說もとへゐへるさても親慶阿闍梨を見送りの役人たる難波瀬尾の両人ゝ此ほど日毎ゑ風あれて船をいだそとゐらざり志ゐば心ゐらぜもゐゐし此浦ゐ五六日ごゐいだゝ船ご〳〵り志てありけるご今宵ゝ久しぶりゐて空うら〳〵のゑ風もゐく志ゐも十五日の夜ゑして千里の外まではれわゐり翌いいよ〳〵纜ゐをとゐのんと水主取梶等を聚ひて酒宴を催ふしわらひさ〳〵めきてゐゐりけるご阿闍梨ゝひとりそよしの方ゐ立出たまひ心しづゐゐ普文品を讀誦しておわせしご早夜も深々と更わたり人聲も止を只磯うつ波此音のを翼しく最物ゐそごきゐ後の方ゐあらはれ出し難波瀬尾阿闍梨此腕を両方より無手ととつて乾どふらまへ奈何觀慶汝ゝ原源氏の余類ゐればよしや法師ゐればとて奈何ゐるとを爲出さんも志れざれば竊ゑ船中ゐて失へよと重衡卿の言ひつけゐれど兎に角ゑゐをだもろくて今宵までゝ默止ゐるご最早雨もはれたれば翌いいよ〳〵纜ゐをときて船出せんと思ふゐれば今ゝ助けおきごゐゐしときひて河闍梨ゝおどろき給ふけしきもゐく彼も是も過去の定業ゐらめとおもへば何をゐ憂へ何をゐ歎ゐんいゐゑも汝等ごのためゑ殺さるべし然いいへ今讀かけし普文品もはやそこしゐて終りゐれば何卒終るまでそこしの猶豫ゐしくれよと宣ふゑ經違兼安しぶ〳〵これを諾ごのひさばゐりけることゝゝ死し得させんに速その經を讀むべしと最期を催す無道の辭阿闍梨ゝ經卷手ゑとりあげ聲高やゐゑ讀誦してそてゑ刀刃段々壞といふ句ゐいゐるをりから二人ゝ齊しく目くばせゐし物をもいはぜひらめかせ刃のひゐりゝ電光石火あわやと見るまゐこいいゐに板子をはねゐごり一人此法師ゐらわれいて刀を持たるゐんばの次郎ご利腕とつて傍へゐげのけ瀬尾ご襟ゐをとるよりはやく頭轉擅三間はゐり投どばし二王立ゑ立ゐるゐそ阿闍梨ゝ大きゑおどろき抑何人ごいつの間ゑこゝゐ來つて吾此危急をすくへるゝいゐある佛菩薩ゐやと先それ打扮を觀はすゑ脊ゐゐく色白き一人の大法師身ゑゝ鼠木綿の布子の裾をじゐきをはせをり上ゑゝ黑き麻の衣の袖をゐかくゐゐ馬手ゐ一根の禪杖をゐきばさんで立たる形相金剛神のゐれゐるごとく適れの英雄豪傑ととそ見へゑけるそれとき阿闍梨ゝつら〳〵それ而を見給ふゑとれ別人にあらぜ絶て久しき武藏坊辨慶にてゐりけれゝ愕然としてやゑ其許ゝ生佛の辨慶ゐらぜや其許ゝ去る歲嶽をいで〳〵東の方へおもむきしと風のたよりゑき〳〵しのをその後さらゑ音信もゐのりしゑいゐゐゝして吾此度の横難をゐりはる〳〵こゝゑ來つて今此危急をすくふとつきせぬ師弟のゐゑしゐれと宣ゐふ詞ゐ辨慶は阿闍梨のほとりゑ蹲踞きこれまでの身の上のことを說と一べんゐして今宵をも船ゐ志のび難波瀬尾ご酒宴のまぎれにひそのゑ船ゐとびのり板子の下ゑゐゐて最前より此容子ゝのこらぜきけり吾今宵し此びいらぜゝ師父ゝ這奴等ご毒手に死したもふべゐりしを噫危し〳〵と萬般介抱するひまゐ漸く經遠兼安等ゝおき上りうたれゐるこしをさすり戰へる齒此根をゐのをしめて辨慶ゐ對ひ汝ゝ何奴ゐれゝ我們ゐ斯からきめを見そるそ疾六波羅へつれ行てその罪を糺そべきぞと

恐るゝいひけれゞ辨慶いのらゝと嘲わらひ汝等い清盛をおぢおそるべけれど我いのへつて恐ろしのらぞ抑我を誰のと思ふ熊野ゞ別當辨正ごの一子よ武藏坊辨慶といふ者よして則ち是おる阿闍梨ゞ徒弟おり今おもあれゞ曹子義經公の旗あげ志たもふときく時い第一番よはせ加はり眞先おすゝんで清盛ごの坊主首引き扱きてくれんぞものを我今汝等をころし阿闍梨をそくひ何國へこの倡ひたてまつらんとい最易しといへども清盛ごの命い一天の君ゞ勅錠とおおじゝ且神童のおしへもあれゞ師父をも伴はぞまた汝ごの命をもとらぞその代りよい汝等今日より心をあらためて師父をいゑはり配所まて送りとゞくべし倘少しおても惡心をさしはさむ事あらゞ我此禪杖忽ち長刀とおりて汝ごの頭を刎べし是みよのしといひさまよ振まはすよと見ゐしごの明晃々たる白刃棒の中よりひらめきいでゝ長刀よ彷彿たり難波瀬尾い此形勢を見て膽をけし辨慶ごのまへよひざまづきていへらく今宵ひそのおゞ阿闍梨をうしおひゑてまつらんとせしと全ゑく我々ごのわたくしおらぞさりとてまた重衡ごのいひ付よもさふらはそ是れいのゞ五條大納言邦綱卿吾娘雄蝶ゞ前の寵愛の衰へんとをおそれて橡山の豪雲僧都といふ惡僧をのたらひ雌蝶のまへごの懷胎い賤しき者ゞ胤おりと流言させまた書寫山の觀慶阿闍梨い雌蝶のまへよゑゞまれて雄蝶のまへごの腹おる子を調伏おすと世おうたはせしも皆是邦綱と豪雲ごのいひ合せおりとしり給はざる重衡卿一圖よ雌蝶のまへをうとゝ家臣平左衛門尉といふ者よいひつけて松ゞ尾山のおくよて竊おに害しまた阿闍梨をゞ我々おゆ仰せてのらめとらせそでよ重き刑おに行おはるべのりしを小松どのゝ諫言よ是非おく配流よ極まりしおりから邦綱卿恐びやのよ我們両人をめしてこの觀慶といふやつこそ正しく源氏の余類おれゞ生おのゞ平家ゞ呪咀調伏おさんと顯然たれいのおらぞ備中の國へもく船ゞ内よて八

しれぞうしおふべし重衡のまへをゞ我よきに計らわんと我々よ過分ゞ黄金を賜りしもへ我々そこの黄金よ眼くらそのゝる邪惡非道を行んとせしのど命よのもる寶おし啻此うへいつゝごのおく阿闍梨を配所までおくりとゞけまいらせんと審よ吐實したりけれい辨慶い齒をくひしばり眼を見はり洛の方を屹とおらまへ邦綱めは已ごの娘の愛よおぼれて不義をゝゑらく所謂木猴よして冠そる山猿公家ともおもふべきごの豪雲い出家おありおごのらのゝる非道ゞ伎倆おゆ組おそこそ憎とても よくひべきの惡僧かお我醫つて這奴等を此長刀よのけぞゞ天下の豪傑よ笑わるべしそは兎も角も汝等愈々今より野心をさしはさまぞ師父をおくりたてまつれよ我も備前ゞ國岡山ゞ泊迄共侶おり行べしと言よ難波瀬尾い心のうちおゝ懼悒おもへど詮術おく唯々と應へ辨慶ごの勇氣おおそれて倘推辭ゞいのおる憂目よ逢はんといふごの隨意奴僕ゞ ごとく媚諂ひしそ氣味よけれ斯て翌朝追風おありけるおそおかしのうらを出帆して備前の國岡山よ着よけるこゝよりい備中ゞ國へい陸地を往とよして人家も多くおれゞもはや這奴等も阿闍梨を殺さんともおそまじけれゞ配所までおくりたてまつらんも流石よはゞかりおれゞ名殘い盡まいらせねとこゝおて別れ奉るべし糟おゆ山の麓よて會し神童の告よよるときい師父配所おおもむき給ふとも幾ほどもおく歸鄉しゑまふべしときいゑれゞのおらぞしもゆ身をいたとり時節の至るを待給へかしと雨々と歎きければ阿闍梨も感涙をぬぐひおへぞ汝い幼き頃魯鈍よして經卷をも誦せぞたゝわろわごのきゞゞと月日をそごせしゆへ人皆出家おい得おるまじと疎みし成れど我そおぶる見る所おるごのゆへよそのまゝよて捨置しの將して窮難をそくふと不思議の因緣おらめ此後もものおらぞ義經公よ仕へ軍陣よおもひゝとも血氣ゞ勇おゆ跨らぞ吾ごの名の武きを藏そゞ文字をわそるべのらぞと呉々と歎へたもふよ辨

慶ゝ委細承諾してやごて難波瀬尾ゐ對ひこれよりよく〳〵阿闍梨をいゑはり誘ひ參らすべし倘師父の身の上ゐ凶事ありときくときいわれ何處よりともたちまちはせ來つて吾此殺人劍汝等の首を切るべしといひつゝそでゐ船より上らんとせしゞ傍らよ横ゑへありし二抱へもあるらんとおぼしき帆柱を見て両人よ對ひ汝等ゞ頭と此帆柱とゝ何れゝ堅ゝらんといふよ難波瀬尾口をそろへていふやう我々ゞ頭少しく骨ありといへども爭ゞ此帆柱ゐおよぶべきといひも終らざるゐ辨慶ゝ拳をゐためて帆柱の眞中を磕と擊みさしも太やゝある帆柱ぽつきと二ッよ折れければ經遠兼安はじめとして船中の人々膽をけしさてもおそろしき怪力ゝあと舌をふるい色をうしなはざる者一人もなし當時武藏坊莞爾と打笑ゑ我こぶしありとて鉄ねよて造りしゐもゐらぜ汝等と齊しく父母の血肉ありされど一心凝るときゝ此帆柱ゑ木ゝものゝゝ鉄石をも打碎く吾今單騎よして見るゐげもおき乞食頭陀の境界ゐれど一心こるときゝ平家の強敵を打亡さんとゝくれゞとし汝等洛へ歸らゞ主人清盛重衡等よ斯とつげよと大音聲よ罵りつゝやごて船よりあごりふたゝび洛の方へ赴きぬ

第拾八回

勇名を留る辨慶ゞ搦荷堂
恥辱を晒ゑ豪雲ゞ西塔橋

扨も辨慶ゝ岡山ゐて阿闍梨ゐわゐれつら〳〵おもひめぐらしけるゝ去るにても憎きゝ豪雲僧都ゐれ我今より敵山ゐおもむき道奴ゞ首引ぬいて師父ゐ怨をはらゑべしと洛へいそぎけるゞほどあく舞子の濱ある彼の蒙汗酒屋ゑ網六ゞ店ゑ入まへを過りければ鯛六ゝ辨慶と見るよりはしりいて〳〵ひざまづき師父恙あくて遠り給ひしやゐちよりて悠々勞れをやすめ給へと懇ろに引とゝめけれゞ辨慶ゝ裡ゐいりて過し夜我おもふごとく船よ怒びいり難波瀬尾等を懲して阿闍梨の危窮をそくひ綜もへあく岡山の泊まで送りまいらせて立のへる道ありとかたりけれゞ鯛六ゝきいてまゑ〳〵その智勇を感嘆してやまぜ左右するひまゐ酒をあた〳〵め肴をそへて持きたり何ゝあくとも一盃を傾けて寒さを凌き給へかし吾僧ゝ鄉ゑ日師父の敎戒ゐよりて弗つり心をあらゐめ實の商人とおりたれど倘や怪しゑ玉はんも彫護けれは毒味してまいらせんとまづさのづきをあげれゞ武藏坊ゝ打笑ひ汝今あを野心ありて我よ例の蒙汗酒あんどをあたへんとそるときゝ我あんおごゞ五管ゑ調子よつてこれを出ることあよより易しおどて汝をうゐごのふべきといと心よげよ數盃を傾けその夜ゝ其處よとゝまりこ〳〵を立出で洛へいそぎける是より先難波の次郎瀬尾の太郎の両人ゝ觀慶阿闍梨を備中の國ある配所まで送りとゝけて洛へ立のへり竊よ邦綱卿ゝ許へもきて明石よてゑ顛末をかゐり最而あげゐ武藏坊法師といふ荒法師ゐさまたげられて術方あく阿闍梨をころし得ざりしとを告るよゞ邦綱卿も本意を失ふといへども猶觀慶を害せん計ゝいくばくもあるべしとて止よけるかこの事を彼豪雲僧都ゝ許へもいひ送りけれは豪雲聞てかゑ武藏坊といへるゝ一山にもてあましたるほどの荒法師あれゞさもゐりあん倘や其うらを報ばんどて當山へきゐらんも計りごたしのあらゞ通す事あのれと厳しくいひ付おきけるゞ果して四五日すぐると大ゑ法師禪杖をつきゐて豪雲僧都ゞ許へきゐり既よ門を入らんとそるゐ門番遮りとゝめて何者ありやとゝゞむるゐ法師ゝ聲をあら〳〵げ汝ゝ近頃こ〳〵よ來りし者あらん吾ゝ久しく此西塔よりし武藏坊法師といふ者ゐり豪雲僧都よ對面しゐきことありてわざ〳〵と登山せりはやく通さるべしといふ面色だゝごとあらゞとゝへけれゞ門守ゑ漢色をうしなひ奥へよげ入り僧都

慶に委細承諾してやごのて難波瀬尾に對ひこれよりよく〳〵阿闍梨をいまはり誘ひ參らすべし倘
一師父の身の上に凶事ありときくときいわれ何處よりともたちまちは世來つて吾此殺人劍汝等
二の首を切るべしといひつゝそでに船より上らんとせしが傍らよ横ゑへありし二抱へもあるらん
とおぼしき帆柱を見て兩人よ對ひ汝等が頭と此帆柱とい何れが堅からんといふよ難波瀬尾口を
そろへていふやう我々が頭少しく骨ありといへども爭が此帆柱に及ぶべきといひも終らざる
に辨慶い拳をのためて帆柱の眞中を磴と擊よさしも太やかある帆柱ぽつきと二ッよ折れければ
經遠兼安はじめとして船中の人々膽をけしさてもおそろしき怪力のあと舌をふるい色をうしな
はざる者一人もなし當時武藏坊莞爾と打笑ひ我こぶしありとて鉄ねりて造りしわもてらも汝等
と齊しく父母の血肉ありされど一心凝るときい此帆柱は木いものい鉄石をも打碎く吾今單騎
よして見るのげもなき乞食頭陀の境界あれど一心こるときい平家の强敵を打亡さんとのくれど
とし汝等洛へ歸らば主人清盛重衡等よ斯とつげよと大音聲よ罵りつゝやごて船よりあごりふた
ゝび洛の方へ赴きぬ

第拾八回

勇名を留る辨慶が搖荷堂
恥辱を晒す豪雲が西塔橋

扨も辨慶い岡山に阿闍梨にわかれつら〳〵おもひめぐらしけるい去るにても憎きい豪雲僧都
なれ我今より歸山におもむき道奴が首引ぬいて師父が怨をはらさべしと洛へいそぎけるがほど
なく鉢子の濱なる彼の紫杆酒屋に綱六が店れまへを過りければ綱六い辨慶と見るよりはしりい
でゝひざまづき師父急なくて遽り給ひしやゑちよりて怠る勞れをやすめ給へと懇ろに引とゝめ
ければ辨慶い程にいりて過し夜我おもふごとく船よ恐びいり難波瀬尾等を懲して阿闍梨の危窮
をすくひ綜もへなく岡山の泊まで送りまいらせて立のへる道ありとかたりければ綱六いきいて
まさに〳〵その智勇を感嘆してやまぎ左右するひまに酒をあた〳〵め肴をそへて持きたり何いなく
とも一盃を傾けて寒さを凌ぎ給へかし吾僧い嚮に日師父の敎戒によりて弗つり心をあらゑめ實
の商人とありたれど倘や怪しと玉はんも影護ければ毒味してまいらせんとまづさのづきをあげ
れば武藏坊い打笑ひ汝今あを野心ありて我よ例の蒙汗酒をんどをあたへんとそるときい我をん
ぢが五音に調子よつてこれを出ることをよより易しをどて汝をうゑごのふべきといと心よげよ
數盃を傾けその夜い其處よどゝまりこ〳〵を立出で洛へいそぎける是より先難波の次郎瀬尾の太
郎の兩人い觀慶阿闍梨を備中の國なる配所まで送りとゝけて洛へ立のへり竊よ邦綱卿の許へも
きて明石よて此顚末をかゑり最面なげに武藏坊法師といふ荒法師にさまたげられて術方なく阿
闍梨をころし得ざりしとを告るよぞ邦綱卿も本意を失ふといへども猶觀慶を害せん計いいくば
くもあるべしとて止よけるかこの事を彼豪雲僧都の許へもいひ送りければ豪雲聞てかに武藏坊
といへるい一山にもてあましたるほどの荒法師あれがさもありあん倘や其うらをを報はんとて
當山へきゑらんも計りがたしのあらぎを通す事あのぐると大に法師禪杖をつきゑて豪雲僧都が許へきゑり既よ門を入らんとそるお門番遮りとゝめ
て何者ありやとゝがむるお法師い聲をあら〳〵げ汝い近頃こ〳〵よ來りし者あらん吾い久しく此西
一二塔よありし武藏坊法師といふ者あり豪雲僧都よ對面しゑきことありてわざ〳〵と登山せりはや
く通さるべしといふ面色だゝごとあらぎをとへければ門守に漢色をうしあひ奥へよげ入り僧都

よ斯とつげけれゞ豪雲大きゐ怖れ扨こそ我思ふゐ違はぎ逼奴師匠のうらをを晴さんとて來りし者あるべし留守ありと答へよといひて奥のざしきに隱れてゐたりけれゞやごて門守ゐ此よしを辨慶よいひけれゞ辨慶ゐ大此眼を活と見ひらき豪雲他行したらんよゐ嚮よ我門よ入らんとせしときよ他行のよしをいふべきよ奥ゐ入てふた〳〵び出きたりて斯いふゐ正しく内ゐありあごら留守をつゐふと覺ゐゐりよし〳〵その義ゐならば家さごしをしてくれんと禪杖を小脇よゐいこそのつさ〳〵と草鞋のま〳〵よて玄關よりゐごりけれども人々辨慶ごの勇猛におそれて誰咎むる者もあし豪雲はこれをこて履もはごぎ慌忙き庭此口より逃いで西塔ある廻廊の裡ゐ身を潛め息をゐらしてゐゐりける法師ゐ本堂客殿庫裏僧坊のこる隈ゐく探しもとむるといへども豪雲ごのけだよ見ゐざりけれゞさてゐ這奴いちはやくもみげ出でしものゐるべしよしや目連ごの鉢の子よかくる〳〵此術を得ゐりともいかでゐ我明らゐゐる天眼通をもつてたづね出さて置べきのど獅子王の荒たるごとく普く堂宇をさごせども居らぎと見れば向ふの廻廊の右此階しの上よ土よまえれし是ゐとつきてありけれゞさてゐ賣僧ゐ此堂の裡よゐくれしふうゐごひゐしと蕊直よはしりよりて大音聲ゐ言りけるゐ已れ豪雲ゐばゐりの堂の裡よ隱る〳〵とも我二ッ此堂もろとも擔ひて返らんとと最易しと廻廊此下よ肩を入れて曳哉うんと擡げけれゞ廻廊ゐめり〳〵と音して左右の少し堂軒傾き甃ぐわらりと落てすでよ倒るべくぞ見ゐけるゐ恐ろしゐりける勇力ゐり今ゐは西坊にある所此法師ごの荷擔堂是ゐり豪雲今はゐまりゐね内よりとんでいづるを法師ゐ猿臂をのばして無手と捕へ此所ゐて刑伐ゐさんゐ靈塲をけごすのゐそれゐりこゐゐへ來よといひさまよ嬰兒をゐつゐふごとく弓手よ首をじをゐいつゐを馬手よ禪杖をわきとさを疾風のごとく山を下りやごて西塔橋よゐありけれゞまづ豪雲を傍ゐある樹木よくゝしつけ汝我師父を讒し殺さんとまでゐしたるとと罪ゐそ此身よおぼへゐらん首引ぬきてくれんぞとおもへど過し日くれ〳〵も師父此教訓よ汝ごの名の武藏の文字をゐそるゐゐと示し給ひし辭ゐれゞ僅にその一命をば助け得さするゐり然ゐれ先此日此長刀の錆とゐさんと誓ひたる白刃此てまへいひわけゐければ汝ごの耳鼻をそぎて世人のこせ志めにゐそべしとてやごて長刀を持ゐへ豪雲ごの耳鼻をそぎけれゐ豪雲ゐ苦痛ゐ絶ぜもるし玉へ〳〵とさけぶよぞ耳鼻より鮮血さつとほとばしり見るもいぶせき形相ゐり法師ゐ此爲躰をこて快よし〳〵と手をうつてゐらひ又長刀をもつて傍此松の木の幹をおしけづり墨斗とりいだして墨ぐろゐ

形ゐ釋迦の涅弟子ゐ似て行ゐ提婆ごの惡よりも甚しく姿ゐ圓頂緇衣よゐりゐごら心ゐ虎狼野干に等し今いさ〳〵ゐ其惡を懲らさんと六根を不具ゐらしめ此木ゐくゝしつけて永く無間の苦を受しむ早く烏和尚きたつて這奴ごの引導をわゐし狼の長老來て五尺の身を腹中ゐ埋葬せよと云々

月　日

武藏坊辨慶書

と太筆よ志るし其ま〳〵何處ともなく立去りけるかくて往來の人一人見つけ二人見つけ後ゐい蟻のごとくゐつゐり雲散動めきて是を見物し或ゐ豪雲ごの暴惡を憎をゐるひゐ法師ゐ強勇をゐゞへ羅々としてやまぎ此噂たちまち一山よきこへけれゞ敵山此座主聞しめし直よ豪雲をとらへしめて其子細を責問ふゐ豪雲深く已ごの惡事をつ〳〵書寫山の觀慶ごの弟子ゐる法師といへる者阿闍梨ごの罪を犯して謫せられしを吾認言せしと僻おほへして理不盡よ山に登り靈塲をふをゐらし剩さ

〈吾儕をとらへて斯耳鼻をそぎんといふ詞さへ鼻へぬけ乗徒等も腹をかゝへけり座主逐一きこしめし曙寫山此覩慶ご徒弟ゐ法師どもいへるあら法師西塔ゐあり志よしい我も粗きけり然いい〈法師ありとて故もあきよ當山へきたり斯狼藉いあるそまじ彼是もつて豪雲罪あしといふべのらを何はともあれ斯五躰不具とありし者い山へとゃむると難しとて即時よ西塔橋より追放ゐおよびければ豪雲い口おしきことかぎりあしといへども詐術あくさして行べきのたもあく彼處此處ゐ一夜二夜とあのしくらしけれど今はゝや朝夕の糧よも盡ければ些の力量あるよまのせ夜あよあ遠近よ出て白挺強盗をあし其日を送るうちにも法師ご行跡を探し此うらみをはらさばやとおもひもつぱら心をつけてゑづねける去るほどよ法師い迎ものとゐの五條大納言をも捕へて怨を返さばやと洛の邊りよあくれて間あく時あく邦綱ご外ゐいづるをつけねろふといへども邦綱もまた法師ご爲よ難のしめられんとを怖れて絶て漫行をせざりしかば法師いさらに其便を得ぞ百日ばありを過せしご誰いふとあく武藏坊法師といふ豪傑先ゐい五條の橋よおゐて千人ぎりをあし此頃また大ひよ叡山を闘し豪雲といへる惡僧を懲らしゐりあど巷談街說まち〳〵ありければ平家よいこれをきゝて易ならぬとゐおもひ嚴しく詮議ありければ法師も今い爰に足をとゞめごたく些の知音あるをたよりて泉州堺の方へおもむのばやど夜をこめて洛を立出八幡越よそさしのゝりぬ

第拾九回

阿部野街道よ辨慶乘賊を鏖しゐを
淺澤邸宅に姫松鯉魚ば怪よ腦さる

武藏坊い蛭ゐ道を急ぐものら洛を出て足ゐ任せ八幡を越橋本の邊りゐさしのゝるゐ時い將よ冬の末よして寒風はげしく空のき曇りて雪さへちら〳〵と降出し寒さたへごゐく手足もとゞへ殆々行ゐやそしよ遥ゐあたに燈の光り見ゐければ扨い人家ゐやとうれしく近くよりて見るゐ人家よはゐらで只在る山陰よ雲れごとき大漢兒車座ゐ居ゐらび枯枝をあつめ焚火して居りつ法師い是を見て這奴們い定めて野武士山客の類ゐして此山路よ網を張て往來ば旅客を俟ゐるべし何程の事やゐらんと再歩よゐもをよりて大勢ゐ對ひ愚僧い叡山の者ゐるご俄比よ和泉の方へ要事ありて斯夜を冒して急くものゐるご寒さゐ耐ごたくて頗る難義よおよべり何卒暫時ご間其火よゐたらせて玉はるべしといひのけて大勢ば中へわつて入れば山客們い呆れはて〳〵法師ご爲体を熟と打あごめつゝ片よりて火よゐたらもるよ法師い大きよ歡びこい忝けゐしと両足をふこ出し火をたきおこして居ゐるゐ其うちに一人手拭もて深く面をつゝみたる者武藏坊ご形相を右視左視て汝い武藏坊法師ゐらぞや奈何豪雲を見忘れしの去る日の恨を返さんと此日頃汝を待と既ゐ久しと手拭をのゐぐり捨る面を見れば日外耳鼻をそぎゐる西塔ば豪雲僧都ゐり法師呵々と嘲笑ひ汝佛弟子の身を以て罪ゐき人を罪よおとす惡業ゐちまち其身よ報ひ三世の諸佛我手を借て汝を罰しゐるふ是因果的面の道理ゐるをいまゞ悟らす却て我を恨むい僻ことの甚だしきゐらぞやと從容として驚ゐぞ尙悠々と火よ當りて居ゐりける豪雲い左右の應へはゐ〳〵傍の人々ゐ向ひ豫て其公等よ語りたる我深き仇敵い這奴ゐり速我を扶て打殺したまはるべしといふ其下よ大勢ば山客等心得たりと一同よ扳連て切てのゝるゐ法師い縛ともせぞ小癪ゐる蛆虫めら無益の殺生とい思へども飛て燈ゐ入る夏ば虫をづゐら來て死を招くうへゐらい跡へい引ぬ天窓役引導わたしてくれんぞと長刀を車輪のごとく廻して多勢を相手ゐ切結ぶよはや焚火も消へてをるよ雪を

豊春画

あかりゑ追つまくりつ戰ひしご素より野武士山客の類あれゞ爭ゑ法師ご修練ゑおよぶべき忽ち閃ゑのそ長刀の光りと倶ゑ豪雲い二段ゑあつて倒れ伏ぬ殘る黨らい是を見て逃んとそるを此彼ゑ追つめるゑ悉く討取り一息吻とつきて雪を掴んで咽をあめし頓て荷物を肩ゑ禪杖を携へ泉州ゑ方へ急ぐほどゑもき〳〵て其夜の七ッすぎとも思しき比安部野街道ゑさしの〳〵るゑ尙雪のしきりゑ降つもりて野も山も只是一面ゑ白銀をしきあらべゑるごとく寒さたへごたきゑ只在農家の門邊を過りしゑ裡ゑて人聲あければ少刻勞を休て往ばやと頓て內に入て視るゑ二人ゑ漢兒地爐の端ゑ酒酌のはして居ゑりけれゞ法師い大きゑ歡び愚僧い往來の者あるご雪中の道ゑ行あやめり價い望ゑまのせてまゐらせんゑ其酒を一盃めのちゑたへ玉はれといふに主人の漢兒聞て大ゑ怒り我々さへ足じとおもふ酒を爭の汝ゑ分ち與ふべきされゞ法師の身ゑして飲酒い五戒の第一と聞ゑ凡俗の我々ゑ對して酒を覓るこそ易のらね與ふる事は扨おきて早く爰を立去ぜゞ目ゑもの視せんと醉ゑ乘じて詈りけれゞ法師も大きゑ怒りあゞてさばかりの事を汝ゑもらふべき殊ゑ價を出さんといふゑ呑さゃるのそ の土農人の分際として我ゑ對て惡口そるこそ不敵あれ汝們ごのあゐへぞとて我呑ぜゑ置べきやといひさま傍ゑあり合ふ爐を取て只一息ゑ飲干しけれゞ両人い大きゑいのり憎き法師めご進止かあと在ゑふ棒を取つて打てかゝれゞ法師い足をあげて一人をけたほし今一人ごの首筋つのそ力ゑまのせて投いだせゞ破れのゝりし壁つきぬけて表ゑ方へ二三間もんどりうたせて倒れ伏そ此勢ゑ恐れけん二人いそれ〳〵と逃行ゞ法師い獨り打笑ゑ尙紙燈照してそこらあゐりを探し覓るゑ板厨の內に一爐ゑ酒と乾魚とありけれゞ大きゑ歡びこれをもまた飲盡し心の中ゑおもふやう這奴等家を捨て逃行しいのあらぜ其友をのたらひ來り我を捕

んとするあるべし渠等ごごとき土民幾万人來るとも怖るゝゑたらねどよしあき暇取て夜明あゞ便宜あしゝと頓て酒の價ほど錢を爐ゑ口ゑ結つけ明ぬ間ゑと其處を出て堺の方へ急ぎけるごゐゐちまち耳元鉦ゑ音のまびそく聞ゑけれゞ扨こそ我おもふゑたごはぜ鉦をあらし相圖をあして村中の人を集ひ我を捉へんとそるあるべし頻りゑ足を早めて急ぎけれど今まで冷こゃへたる折から多くの酒を飲し事あれゞ十分の醉を發し一歩い高く一歩い ひく〳〵蹌々踉々として行こと幾干あらぜして雪の中ゑ撞と轉びしご其まゝ前後もしらぜ高鼾ゑて臥しゑける暫くありて何もの ゑや矢庭ゑ左右より法師ご手をとつて引起そ者あり武藏坊漸く此時目覺醉眼朦朧としてあゐりを見廻すゑ夜全くあけて其さま獸獵ゑ出たりとおぼしく弓矢を携へりゝしく打扮たる一個ゑ武士左右に數多の勢子を從へ威風凛々として床几ゑのゝり扣へたり法師此形勢を見て大きゑ怒り汝等何奴あれゞ吾快く眠りゐたる所を引起して可惜醉を醒させゐるぞといひさま捕へし手をふりはらへゞ力餘りて二人の勢子等い雪の中へのけさまゑ撞とまろぶゑ彼武士屹と睨まへ此程野武士山客所々ゑ隱れ栖て夜毎に此安部野街道に出て往來ゑ人をおやまそよし是ゑよつて此所等邊の民家ゑい各々相圖を定めおき倘怪しき者來る時い鉦を鳴して人を聚ひ賊人を捉へんとそるとゝ聞り然るゑ我今朝しも未明より獵ゑ出ゐる所近邊ゑて夥き鉦の音聞へしい扨い彼盜賊此邊の民家を犯そと見ゐたりと思ひしゑ案ゑ違はぜ此所ゑ來つて見ゑ心得ごゐき汝ごの形相殊ゑ此邊ゑ住る盜賊の首領といふい大の法師ありと聞ゑ汝ごの爲躰實ゑ僧とい見へざれゞ問ぜと知れし强盜の魁首あるべし早く白狀して縛めをうけよと烈しき下知ゑ大勢の勢子立のゝらんとそるを辨慶い手をあげて暫しとおしとゞめ我い全くさる怪しき者ゑあらぜ武藏坊辨慶といふ者あるご子細有

て泉州堺まで赴かんと夜を冒して道を急ぎしが昨夜は雪も殆々行かやを彼處なる農家にいりて酒を乞て呑しが其酒に酔て思はぬ爰に臥しぬるがりと語るを聞て彼武士い眉を聲めそい何とこの宣ふ其許が名い武藏坊辨慶とのまのらば日外橘次季春と言ふ人と侶共に沼島におひて海上の灘丸を退治し玉へる豪傑よいあらぬのと云ふ辨慶聞てつや〳〵心得ぬ面色よていかゐも我こそ金實橘次と義を結びぬる武藏坊辨慶あり其許何として我名を知り且沼島の灘丸を討たる事さへ知りたまふや最不審と聞より彼武士慌忙めき衝と立て辨慶が手をとつて上座へ推居へ辭を正しふして云らく師父最前より此不禮はだん〳〵幾重よも沙赦しを蒙むりぬしとばかりよていさこそあやしく思しらんが小管い當國淺澤小野の隱士岸此左衛門大江匡博といふ者あり嚮よ吾娘姫松摩耶詣の折柄彼灘丸が爲に捕へられしに其許と橘次主両人に て灘丸を打取り娘を救ひ玉はりしよし率春ぬしの物語に て詳にき〳〵つ何事のありてや此雪をもいとひぬまはぬ和泉へい赴きぬまふや何い兎もあれ先我第宅に來りもる〳〵と勞れをやすめ其後赴きたまふとも遲きにあらじと他事なき詞に辨慶い快然として歡び扨い姫松との〳〵沙父君ぬる岸の大人よてさふらひしの某爰々まき形勢に て雪中よ倒れ伏しぬたれば盜賊白挺とも見たがへぬまふも理あり我何とてさばのりの事を心にかくべきこのうへい詞よまのせ君の館に至り委細の事を問もし問れもせんと聞て左衛門匡博い然はとて侶共よ淺澤此館よ返りければ左衛門い頓て山海の珍味を安排してまづ辨慶に勸るよぞ武藏坊い其管待の厚きを謝し快く數盃を傾けて後匡博よ對ひ橘次姫松等よ別れてより明石此浦に て綜故あく觀慶阿闍梨を救ひまいらせ岡山の泊まで送りとゞけそれより洛陽に忍び登り叡山よいもきて豪雲をこらし尙邦綱をも恨まんと洛中を彷徨りしが詮義きびしきをもつて空しく和泉の方へ赴んと來りしあり其後姫松ぬしよいつ〳〵ごあくてふわすあらめと問ひのけられて匡博い愁然としていふやう吾娘一旦火坑よ陷りしが其許等の勇猛よよつて幸ひに賊徒の爲に恥しめられ玉然るよ姫い還りてより不思議あるい夜に至れば物よおそはる〳〵ことく海より續きぬる庭前の池水ざは〳〵と音そると齊しく家鳴震動し其丈五尺東余此金鱗の魚此彷彿とあらわれ眼を怒らし磴と白眼人のごとく詞を怒らし恨めしや我今まで人の妻娘の別あく强奪して閻此伽とあせしよ汝此を心づよくも我心よ隨はぬ去に よつて愛目をせおきおば自から心解て色よき返事をもあそべしと一間に押し籠おいぬるうちに橘次季春が爲に竟よはのあく討れたり其無念骨髓よとほり死してもあを忘のぬく這奴等に怨をはらさんとおもへども渠等い世よまれある孝子英雄よて近より事あぬはぬ茲を以て吾最期の一念日比愛飼せし鯉魚此物體よ還着して汝を陰司へ誘ふあれ來れや來れと言ふ聲して口より一道の水氣を吹出せば彼水氣のうちより數萬の小鯉魚あらはれ出で娘が總身よ喰ひつきてあやまつよぞ娘い痛さよ耐ぬ痛やと悶苦しむ事終霄にして漸く曉比に いたれば鯉魚の怪い原の池よ飛入つて跡あくあれり是に よつて加持祈禱の類さま〳〵心を盡そといへども更に露ばかりも驗あく娘い日增し顏色憔悴し殆々命も危し我苟しくも儒門此家に生れ粗周公孔子の道を讀三綱五常の道よ背かざるよ奈何ある天命よや只一人の娘を盜賊つれの寃魂の爲よ一命をとらる〳〵とい是非もあき事どもありと兩眼よ涙をうゐめて物のたりければ辨慶い大きよ駭きいのよりそれ折のら親しく鯉魚此怪異をば見たれども然まての事よいあらじと思ひしに扨い灘丸ごの怨魂執念深く密縁て思ひをのけし姫松沙前をあやまちと覺へぬり我れ不意此首に來たりしこそ幸ひ今宵姫松ぬし此枕邊よ通夜して彼怪物

は正体を見顯さし參らすべしといふゝ左衛門い斜あらぎ喜び豪傑斯く宣ふ上い心やすしと頓て
その夜武藏坊を姫松ごの閨房ゝ誘ひ姫松ゝも委細をかたりけれゞよろこぶこと限りあくゝ辨
慶に謝しぬ斯て武藏坊いつもの禪杖を傍ゝおき今や遲しと待ほどゝ案のごとく四更の比とも
おぼしきゝ池水ざは〳〵と音して霧はごとく水氣室中に滿るとひとしく丈拔群ゝして鱗の光い
金色ある鯉魚忽然として現はれいで姫松ゝ飛の〳〵らんとする所を辨慶い禪杖をとつて振動のし
忽ち長刀とおし鯉魚をめのけて獲矢と斫れゞ鯉魚いそのまゝ庭は面へ逃行を續いて追欠れゞ鯉
魚いもとは池ゝ飛いり水上を泛ぎめぐるに乍ち池水い紅ひゝあれり辨慶い長刀のらりと投捨池
の中へざんぶと飛こゝ手どりゝせんと此首彼首へ追詰追廻るより鯉魚い波をけゝて〳〵荒やはる
を辨慶い難あく小脇ゝのひおゝ力を極てぐつとゝめて頓て汀ゝ泛ぎつき大音聲ゝて鯉魚の怪い
武藏坊のおとめゝり八々早く出合玉へと呼とりつ〳〵も鯉魚を陸へあげ兼げて其身も續ひて飛上
りぬ此物音ゝおどろき左衛門はじめ家臣は めん〳〵てんでゝ雪洞を携へはしり來り見ゝこは如
祭ゝ六尺ゝあまりのり鯉魚ともおもひしゝ然いあくて漸く二尺ゝ足ざる印子の鯉魚は餌物ゝありこ
い不審やと八々打よりて改め見るゝ此置物ゝ辨慶ごの斫付し長刀は跡ありけれゞ大きゝ駭き更ゝ
其由緒をおらぎ其時法師医博ゝ對ひ物千歲を經るときいのあらぎ怪をゝとゝ聞り殊ゝ此印子は
鯉魚い唐土玄宗皇帝沈香亭ゝおひて翫そび玉ひし物と聞けり加之らぎ彼灘丸ごの一念秘藏の器物
ゝ還着してのゝる怪異をゝしたりと覺へたり憎き賊徒ごの執着のあ今そ怨靈得脫ゝし成佛せよと
云さまゝ禪杖をゝけしゝ〳〵のゝ打けれゞ不測や印子の鯉魚い忽ち微塵ゝくだけ一道は白氣陰々
と西はそらへゝあびきけれゞ偖い怨念も立去しものゝるべしと驚て其碎けたるをゞ岸の左衛門

ごの菩提所東生郡の北ゝありけるその寺内ゝ埋め跡懇ろゝ弔ひたり今猶綱島ゝ在る所の鯉塚い是
成や否考ふべし斯りし後い姫松ごの病も水復しければ家内の歡び譬ふるゝものゝく是全く武藏坊
ごの勇猛のゝ所ゝありとて深く辨慶を稿ひ此所い洛ゝ遠く身を慫びたまふゝ便りよけれゞいつま
でも止まり居て時節は至るを待たまへとゝ〳〵めけれゞ辨慶い實にもと此年い爰ゝと〳〵まり明れ
ゞ治承三年如月の比ゝもありけれゞ早晩平家の詮義も測らひけるゝぞ左右ゝ義經公の事心ゝの
〳〵れば一旦奥州ゝ下り浮曹子の安否をも訊まいらせ且い都の動靜をもきのゝまほしと左衛門親子
ゝ暇乞をゝし陸奥さして赴きける

第貳拾回

默龍庵ゝ武藏坊主君を諫む
浮島原ゝ浮曹子兄陣ゝ至る

辨慶いもき〳〵て奥州ゝ至り平泉は邊りゝて義經の墳を問ゝおい奈何浮曹子い父母の菩提の爲
入道しゝまはんとは志願ありとて郎黨ゝい悉く暇を玉まはり衣川の邊りゝある福壽川無量壽院と
いふ寺ゝ一箇の庵室をしつらひ晝夜こ〳〵ゝ閉こもりて物いをし讀經のをしておはしまをと問し
ゝゞ大きゝ駭き彼君い幼稚をりのら鞍馬ゝて既ゝ出家ゝたまふべき處を密に下山し自ら當國ゝ
下り秀衡朝臣をのゝらひ大義の思立ゝるごもへゝ去歲も平家の動靜をうのゝはんと再び洛ゝ登
りたまひしゝ今又道世は思ひを起し閉こもりおはをとい何とも以て心得ゞゝし疑ふらくい當國
ゝも亦家隱目附ゝらんとを識りて斯い世ゝうたはせ計を帷幕の裏ゝめぐらして勝事を千里の外
ゝおしゝまふゝいゝらぬかと東樣西樣思ひめぐらし彼無量壽院ゝいもきて對面せん事を乞ゝ一
人の法師出來りていふやう浮曹子い當寺の境内ゝある默龍庵といふ庵室ゝ閉こもりゝまへ敢て人

よ遇事をもるしゐまとを其許行ゐまふとも其甲斐あるべしといふに辨慶答て吾僧い西塔の武藏坊辨慶といふ者あり見ゐまふ如く釋門此身あれば俗客とい事のはりて苦しるまじ狂て對面をもるしゐまはるやう傳へて下さるべしといふよ彼法師頭を打ふり否々彼者ゐい裡より堅く鎖したれい縦寺中此者ありとも物忌はつるまでは入事を赦しゐまはぬ者を何奈ある因ありとも何ぞ赦し玉ふべきや疾還りゐまへといふを辨慶い推返して頼むと再三度ゐ及びけれど法師い更よ聞入ぜさて〳〵汝い聞わけのあき者のあ早くのへらぜい奴僕等よ言つけて敲き出をべきぞと威丈高に言ければ辨慶猶然として眼をいからし我は浮曹子とは三世此約をあしゐる者あれば強て對面を乞よ執つきせざるのそ敲き出をあんぞといふこそ易からね其默龍庵とやらんは何方ぞ汝案内せよといふよ彼法師い色を失ひふるひ〳〵默龍庵のあたを指ざしけれい辨慶は頓て本堂を打めぐりて見るに爰ゐ一箇の門あり這門此内こそ默龍庵ありとおしもるよ武藏坊い打點頭最早汝よい用あしといふよりはやく法師い慌忙き逃行しの何思ひけん潛足しつ〳〵立戻り小蔭へこそい忍び入ぬ法師いやをら門此邊りゐイを裡の爲体を窺ふに障子引立て浮曹子とおぼしく高らのよ語經したまふに法師い立よりて扉をほと〳〵と打ゐ〳〵きいかよ我君武藏坊こそまいりい余人いともあれ爰を明て對面をもるしゐまへのしと聲をのざりよ呼ど叫べど只軒端よ音信る〳〵松風あらで誰答ふる者もあし法師いたまりのねゐあるよりと申せば浮心つよし斯迄よいふを聞わけたまはぜい此處よて腹かき切て相果べしといひのけて門此邊りゐ動下と座し既よのうよと視もるゐぞ障子の内よ聲ありてやれ待武藏はやまりぞと障子ひらけい浮曹子ありしよのわる浮姿髪いおどろゐ乱しゐまひ鼠の衣殊勝氣ゐ數珠つまぐりておはそよぞ法師い此爲体を視て且はぶり落る涙をはらひあどして我君ゐい斯心弱くおはし給ふや日外五條の橋よて遇黎らせし時此仰ゐい譬ひ苦ゐ寐戈を枕にしてあり共父の仇清盛はじめ平家此奴原鏖殺しよあさんと最勇ましく宣ひしよ今斯佛門よ入りゐまはんとい寇よ言ごのひあき浮心このあ大丈夫の一言は駟馬も及ばすとこそ聞はべるゐ僅の間よ然る浮心ゐあらせゐまふは此首邊あたりの寶僧めらゐ誑らのされたまひしあらん遇く浮心醐ごのひし秀衡朝臣を頼そゐまひ與羽の勢をのり催し都ゐ白旗をひるごへしゐまはゝ平家の暴逆をい年來諸人爪彈して憎む折のらあれい源氏舊恩此輩諸國よりはせあつまり一擧して平家を亡し再び源氏の浮代とあさんと親ゐりあり嚮ゐも聞へまいらせしごとく法師生佛此むのし書寫山よおひて夢中の老僧此語もはべればとく〳〵浮姿あらためたまへ其外ゐ聞へまいらせたき事澤あれど履をへだて〳〵のもきをのく如く爰よりい申上ごのたかし疾戸を開きて浮通し下さるべしとき〳〵て浮曹子頭を打ふりたまひ否とよ法師我いとけあき時佛門ゐいりし此義經一旦鞍馬を下山あし平家を亡し父の讐慣一族の修羅此忘執とらさんと思ひしのども熟々考ふる！よ一盃の水よく一車薪の火を消ことゐゐはぜとやらん縦や一人や二人の郎黨ありともそれを頼そ怨ひある事を爲出さんよい恩ある秀衡をさへ連累そるは目前それよりい迚も微運の此義經佛門ゐ入て永く一家の菩提を訪ゐそましあらめと佐藤兄弟龜井駿河の面々にもおもふ旨をきこへ知しこと〳〵く身の暇をとらし我一人此庵室よ閉居して行ひそます窓よ來て我道心を妨ぐるは全く外道此武藏坊もはや三界よ用あき義經あれい上よ君あく下よ臣あし然れども今目前よ生害あさんとする相形ゐまりよ不便あれい戒條を破り一死をとゝめしい我ごの寸志あり今生の對面とれのぎりぞと言ひ棄て障子をはたとさしきりて寂然として音もあし法師今い術のゐあければ我

君本心出家したまふゆ心とおぼへゐり嗚呼言ごひおきとやいとん臆病どや言はんよし〳〵此上ハ我れ一人ありとも竊に洛へ推しのぼり此大長刀をもつて淨海ご首さらへ落しくれんぞと大昔聲に罵り悠々と立去んとそるゑ以前寺中れ悪僧ばらをかたらひ立恐びて居ゐりけるご此時ばら〳〵とゐらはれいで容子は殘らぞ立ぎ〳〵つ反迫人れ年の冬又敵山ゑおゐて豪雲僧都を劫のせし無頼の悪僧いざ尋常ゑ繩の〳〵れと棒千木利器をとつて打ての〳〵るゑ法師はのら〳〵と嘲笑ひ小兒だわもたらねど武藏坊ご歸洛の手土産此世のいとまをとらせて呉んと大長刀をふりまわせば右往左往わ散乱ぞ始めれ法師大ひゑいらつて太刀拔そばめ切ての〳〵る折のらわ何國ともおく一本の素箭飛來つて彼法師ご胸板ゑ發矢と立ば何のハもつてたまるべき云とのつけゑ反のへれハ武藏坊は是を見て阿那いぶのしやと見かへることあたの默龍庵の障子をひらき出でたまふ義經公以前わのわるゆ形相烏帽子狩衣さはやかわ重藤の弓携へ様れ上ゑ衡立たり左右ゑは等しく鎖帷子小手脚當ゑ身をのゐめたる兵ども君を守護し扣へゐり登時義經公莞爾と打笑ミいのゑ法師のおらぞ心を勞ぞる事おかれ我汝ゑ別れてより再び東國ゑくだり時の至るを待うちゑも片時も忘れぬ大義の企て時々相譚ふ味方ゑハ是おる佐藏忠信嗣信をば始め皆是一人當千の兵おれど平家の隱目付當國わも徘徊おせばわざと表ゑ佛門ゑ歸依し出家遁世の望ありと家臣等わハ暇を取し此庵室ゑ閉籠り毎夜讀經ゑ日を送り深更ゑ及んで私ゑ件の人々を聚ひ專ら軍議を評論を夫速々門をひらき武藏坊をこあたへと宣ふ詞ゑ一人れ武士やをら立て門をひらけば法師は大きわ喜びそ〳〵ミ入ゑ仆れ伏したる以前の法師むく〳〵と起上り汐大將もはや愚僧の役目ハ濟たるおらんと正首だつて武藏坊ご後わ從ひ疎々入れば法師は且

駭き且怪ミ義經公ゑ向ひ君のゆ矢先ゑおの〳〵りて落命せしと思ひしゑ然ハおくて恙おく且今の辭ハ全く敵わおらじと思へり此法師は何人ゑやと眉をひそむるゑ義經公打咲はせたまひいまだ知まじ此法師は常陸坊海尊といふ者おり我汝ご心をうたごふるにはあらねども笑の中わ刃を磨ぐ乱世のおらはし人情反覆世の常と聞ものゐら尙やと思へば豫て海尊にも其心を得さし置たれば僅汝を試しれそのおらぞ心わおくる事おのれ其他逃散たる僧徒も皆是當寺の者ゑして義經ゑ心を傾けて事ふる者おれば少しも心をおくゑ及ばぞ又最前海尊ゑ射のけたる矢も鏃を拔おきゐれば常陸坊ゑも恙おし此後ともへだておく相譚ひて我を助け稀世の功を立よのしと殘そのたおき名將れ詞わはつと感激し夫より佐藤兄弟はじめ龜井駿河等わも名對面して俱わ軍議をのゐらひける斯て猶法師等はさま〴〵に姿を擬し遠近ゑ徘徊して江湖上の動靜をさぐり聞うち早くも其年暮て治承四年ゑおりつ然るゑ今年ハ木曾路わハ義仲起り伊豆ゑハ頼朝旗揚ぞまふと聞へしゐば驚破此時ゑと義經公ハ法師海尊等外手勢廿余人を俱して奥州より登り駿州浮島ご原おる頼朝公の陣ゑ至りたまふゑぞ頼朝公ハ絶て久しき同胞の汐對面わ互ゑ手ゑ手を取のはし不覺涙ゑくれたまひぬこれよりして法師ハ東の間も君の傍をとおれぞ平氏追討の折柄豫て意恨わる五條大納言を打とり師父觀慶阿闍梨れ怨ミを返し一れ谷の戰ひ八島の合戰ゑ軍忠挽回ゑして平家全く亡びし後も堀川夜討の功名その外義經公舍兄れ不興を蒙り再び陸奥ゑ吟行たまふゑ及んで尙附添終わ文治五年衣川ゑて立おごら終りを取し事ゑ至つては普く坊間わ流布ぞる處の軍記集ゑ載て詳らのおれば予ご筆を勞するゑ及ばず然あれ共尙遺漏おきゑしも非ぞ且腹稿いまだ吐盡さぞといへども書肆頻ゑ局を結ばん事を促ぞをもて姑く茲に筆をとゞむ猶他日新研を聞くとあ

按ずるに本朝武家高名記に（鎗闘分捕巻之六）文治五年衣川の館に於て法師三十七歳にして主君と同死せり依之子孫あしと云へり是を以て見る時は法師は仁平三年癸酉の出生歟同書（感狀之六）兵糧米借用狀を載せり其文に曰

今度芳野入既令二識定一就二兵粮米闕如之時節一米十石賜恩召候則友成之御太刀一腰被レ指二遣之一候此度之儀如何共才覺專一也

文治元年十一月十日　　尼崎老中　　西塔武藏坊辨慶印

此書猶彼處にありとあん未見ぜ專ら人口に膾炙する攝州須磨寺にある所の若木櫻此制札此花江南無所也云々は只梅の制札あるを好事は人源氏物語須磨の巻に若木の櫻咲きそめてといへるに附會して光源氏を源九郎にあやまれる者にして法師の墨跡にあらざる此事既に岡西惟中か續無名抄及び蜀山翁は南畝秀言に見たり

源平盛衰記に元暦二年三月廿一日熊野別當湛增二百余艘の兵船を調へて漕來り源氏に加はる事を載せり和漢三才圖會の說に依ときは此湛增は法師の父辨正の尙考ふべし

○武藏坊辨慶物語終

明治二十二年四月十六日印刷
同　年四月十九日出版

定價金三拾錢

著作兼發行者　東京府平民　覺張榮三郎　日本橋區本石町貳丁目拾六番地
印刷者　新潟縣平民　角張敬四郎　京橋區南鍋町壹丁目八番地
發兌元　日本橋區本石町貳丁目　上田屋書肆

12